

女性の心理

ヘンリ、マリオン 原著
帝國教育會 監修
前田長太 譯述

東京開發社

明治
47 9 29
内子

序

余は屢々思ふ、世には女子教育ほど大切なものはないと、何となれば女子は人の母となるべき者である、故に西人の言葉に『子供を教育するには、先づ第一母を教育しなければならぬ』とある。如何なる人でも母のない者はない、又如何なる人でも幼少の折、母の膝の上に育たぬ者はない、是を以て西人は曰ふ『母は人生第一の教師にして、其の膝の上は人の學び初める第一の學校である』と。

世には又人物ほど必要なものはないと云ふ、如何にも人物は必要である、天下國家を治むる者は人物である、國運の隆盛を計る者も人物である、國難の急に赴く者も亦人物で

ある併しながら其の人物は誰が作るものであるかを考へねばならぬ。母でなくして誰であうか。古來偉人傑士と稱せらるる人物を見るに、其の母にして賢母でない者は殆どない。例へば和漢に在りては小楠公の母、孟子の母、歐米にありてはナポレオンの母、ワシントンの母など、孰れも皆其の子をして偉人傑士たらしむべき賢母であつた。是故に古來偉人の口にも『我は母に負ふ所少からず』と云ふ言葉は屢々繰返される。如何にも『人物は母に待つ所多きもの』である。而して『國家は人物に待つ所多し』と云へば、女子を教育して、人物を作る母を養成するのは、國家最大の急務と謂はねばならぬ。

古經に『欲治其國先齊其家』と言ふ言がある如何にも國と云ふものは空幻なものではない、家庭相集まつて成立つものである。處で其の家庭を治むる者は誰であらうか。古來『内を司る』と云はれて居る女子ではあるまいか。女子は家庭を治むるに天賦の適性を有つて居る。然らば女子教育に依つて、其の天賦の適性を益々發達せしめて、家庭を治むる責任を完うせしむるのは、治國平天下の上にも如何程必要であるかを見るべきである。

尙眼を轉じて廣く世界の大勢を見るに、女子教育は人文の消長にも、道義の隆替にも密接の關係を有つて居るものである。泰西には『法律を作る者は男子であるが、風俗を作る者は女子である』と云ふ名言がある、東洋に於て吾等は『女子は徳風の淵源である』と云ふことを屢々耳にして居る。今之を古今東西の歴史に徴するに、女子教育の盛んなるは、人文

進歩の著しき國で、一國風俗の亂るゝは、女子風俗の亂るゝより起る事實は、歴々として争はれぬものである。

翻て今日我國の女子教育を視るに、随分進歩して居るには相違ないけれども、之を歐米のそれに比して未だ遜色あるは、甚だ遺憾な次第ではあるまいか、是れは固より封建制度の餘習にも因ることにて、因襲の久しき、一朝にして改むべからざるは言ふ迄もなき事なれども、社會百般の事に長足の進歩を以て名ある我國が、女子教育の方面に於て然らざる有様であるのは、如何にも遺憾な事ではあるまいか、是を以て余は我國の教育家が『子供を教育せんには、先づ第一母を教育せざるべからず』と云ふ言を根本義となして、從來世人の女子に對する舊式思想を一掃し、女子教育を益々盛

んにして、女子の知識の程度を高め、女子の意志を養成し、特に女品の光輝を放たしむるに鞠躬盡瘁せられんことを希望して止まぬものである。

之に就て佛國大學教授ヘンリ、マリオン氏の著『女性の心理』は實に近代の好著にして、女子教育及女子問題を解決するに、最も適當の良書であると思ふ。因て今回帝國教育會にては、前田長太君に之が譯述を委囑し、頃日將に鉛槧に附せんとするに臨み、余が女子教育に對する平生の所思を記して、之が序文に充てるのである。

明治四十一年七月

帝國教育會長 辻 新次識

例言數則

一 本書は帝國教育會の依頼により、佛國巴黎文科大學教授ヘンリ、マリオン氏原著、西曆一千九百年の出版に係る、*Psychologie de la Femme* を譯述せしものなり。

一 現今女子教育の勃興、女子問題の研究盛なるに當たり、之に解決を與へんと欲して著述せられたる、原著書の要旨を譯述して、同胞教育家及び研究者に紹介するは、即ち本書譯述の趣旨たるなり。若し夫れ仔細に味はんと欲するものは、原著書に就いて研究すべし。

1 一 原著書中に引用せられたる、學者教育家の言語文章は、務めて文字に隨ひ章句を追ひて忠實に譯したり、是れ讀

者が更に引用するの便を思ひてなり。
 一 書中に施したる▲は原著書中、原著者が特に注意を惹くべく「イタリック」にて書きたる文字を標示し、○●は、譯述者が同胞讀者の注意を惹かん爲め私に之を附したるものなり。

明治四十一年六月

譯 述 者 誌

女性の心理目次

序論

本論



第一章 本書の大要旨……………一

- 本書の區分○女子の性質○女子の社會的要因○女子の生理的要因○女性研究の難易○女子將來の境遇問題
- 女子家庭教育問題○男女教員の優劣問題○本書の參考書と著者のメトード○著者の主義精神

第二章 過去に於ける女子の社會的境遇……………三

- 女子境遇進化の概則○古代の希臘に於ける女子の法律上の境遇○羅馬に於ける女子の法律上の境遇○基督教より見たる女子の境遇○古代佛獨に於ける女子の境

八遇○中華に於ける女子の境遇○現時に於ける女子の境遇
九遇○女子將來の社會的境遇の影響結果

第三章 女子の生理的問題……………五

○男女の生理的優劣○男女の解剖的相違點○女性の生理的特性○女性の生理的結果○女子從屬の生理的理由及其品評

第四章 少女の婚期以前に於ける男女の比較心理……………六四

○天性と習性○少女の外的特性(1)少女の可動性(2)少女の饒舌性(3)少女の模倣性○少女の心的特性(1)少女の多感性(2)少女の利己心(3)少女の羞恥嫉妬心等○少女の知的能力(1)少女の意志(2)少女の知識

第五章 女子の感性一般……………一〇三

○年若き女子○女子の感性○ロンブローの反對論○見

書知入法の立證○女子感情の激性、悲劇見物の奇癖○感情激發の證言及解釋○感性激發の主腦

第六章 女性の感性と利己的性癖……………一三三

○利己心の種類○女性の快感○女性の愛着心○女性の貪慾○女性の虚榮○女性の虚飾○女性の化粧癖○女性の格氣○女性の野心○女性の統御心

第七章 女性の感性と同情と社交性……………一四九

○女性の同情心○母情○母の愛○女性の優雅性○女性の口喧性○女性の私愛○女性の輕薄○女性の友愛

第八章 女性の感性と高等感情……………一七三

○女性の利己心と利他心○女性の多感性○女性の格氣○女性の饒舌○女性の貞節○女性の道念○女性の正直○女性の眞實○女性の美感○女性の宗教心

第九章 女性の知識……………二〇〇

○男女知識の優劣○女性知識の特性○女性知識の一長
 一短○女性の理知○女性の感覺○女性の記憶○女性の
 創意○女性の想像○女性の求知心○女性の科學的適能
 ○女性の文學的才能○女性の知識的天賦

第十章 女性の意志……………三七

○意志の性質○意志の區別○女性の勇氣○女性の不決
 心○女性の不幸抱○女性の我儘○女性の堪忍○女性の
 強情○女性意志教育の方針

結論

第十一章 女子の使命……………三五九

○女子教育と良妻賢母説○女子教育と女子の獨立問題
 ○女性の心理より見たる女子教育の大方針

第十二章 女子の使命II其境遇の改良……………二七四

○女權運動○スチエアート、ミルの女權論○セクレタン
 の女權論○女子の境遇問題○女子教育の改良進歩○女
 子の職業問題○女醫問題の可否○女子の公職問題

女性の心理目次終

女性の心理

ヘンリ、マリオン原著

帝國教育會監修

前田長太譯述

序論

第一章 本書の大要旨

本書の區分

本書は序論、本論、結論の三論に區分し、序論に於ては、本書所論の大要を概括し、本論には本書の主眼とも云ふべき女性の心理を研究し、結論にては心理研究の結果、女子に如何なる教育を授くべきかを論議するのである。序論は本論と結論の梗概を、豫の述べ置きて、讀者をして一見本書の内容如何を

知らしむるものであるから、此の一論は、姑く之を別箇として、今本論と結論との關係に就て一言すれば、此の二論は、密接の關係があつて、二者其一を缺くことが出来ぬ。又其の順序も論理的にして、前後顛倒することを許さぬ。何となれば人を教育するには、須らく先づ其の性質如何と、又其の發達し得べき程度如何とを研究せねばならぬ。女子を教育することも同じ事で、其の心性は如何、又如何に成り得べき者なるかを究めて見なければならぬ。其譯は、女子教育なるものは、女子の性質、及び其の將來の目的に、適應すべきものなることは、言を待たずして瞭なことである。

乃で余は、兎に角此の序論に於ても、此種の問題を、簡單に論究して置かねばならぬ。

女子の性質

女子は實際如何なるものであるかを、心理的に研究して見るに、二個の基礎的原因に係つて居る。二個の基礎的原因と云ふのは、一は社會的にして、他は生理的である。前者は女子の社會的境遇を指すので、詳しく言へば、歴史上

女子は如何なる境遇を占めて居つたかと云ふ事である。蓋し女子の性格、及び其の氣質は、大部分習慣に係つて居るものであるが、其の習慣は、何處から出て来るかと云へば、從來の女子教育と、其の境遇的生活法より、出て来るものであると云はねばならぬ。後者は前者よりも、尙一層深甚にして、女子の人體的性質を指すので、語を換へて言へば、女子の身體組織、及び其の生理作用を謂ふのである。余は今第一社會的要因を究め、第二生理的要因を調べて見る積である。何となれば、淺き原因より、深き原因に遡究するのは、自然の順序である。

女子の社會的要因

女子の社會的要因を究むるには、先づ過去に於ける女子の境遇に目を注ぎ、其の境遇が、歲月の經過と共に、如何様に變遷して來たか、又其の境遇の變遷が、女子の性格に、如何なる影響を及ぼして居るかを、研究して見なければならぬ。さうすると、茲には二種の變遷進歩があつて、兩々相並行して居ることとを認めねばならぬ。即ち第一は女子の境遇の變遷進歩にして、今日では非

常に進歩して居ると云ふが然し今日の境遇が、進歩の極點に達したのであるとは云はれぬから、今後又如何なる程度まで進歩して行くか分らぬ。第二は女子の性格の變遷進歩にして、それは今日女性の裡に、優勢を占めて居る所の性格を指すのであるが、然し是れも亦漸進的に變遷して來たもので、今日最早決定して了つた譯でないから、此後如何なる點まで進歩して行くか知れぬ。此種の研究は、確に有益の業と思ふ。

吾人は一方に於て、男女兩性が、文明の進歩と共に、益々其の區別を明にする。と同時に、兩者の分業も亦益々著くなるのを見るであらう。吾人は之を見らにつけても、故さら人爲的に、男女を同化せしめむとするが如きは、凡て皆天性自然に背反して居ることと思ふ。何となれば此の如き同化の云爲は、古來の進歩に背馳するであらう。

吾人は又他の一方に於ては、女子が時の經過するに伴れて、益々男子と區別せらるゝに至ると同時に、益々男子と同等になるの事實を認める。而も其の同等と云ふのは、男子の眼から見ても、同等と謂はるゝので、權利問題など

に於て、特に然うである。此の一種の變遷は、一見反對の現象を示すやうに思はれるが、實際は決して然うでない。何となれば區別は、必ずしも不平等を意味するものでないから、同等と謂つたからとて、必ずしも同一と云ふ譯ではない。寧ろ之に反して、同等と云ふのは、區別あつて初めて可能的となるので、區別より出る結果と稱して差支ない。そは兎も角も、男性と女性との間に、相異の認めらるゝのは、一半は其の社會的天職を竭す上に於て、男女相互に異つて居る所より出る結果であるが、一半は又其の社會的天職を竭すに於て、男女各々相異らしむる原因となるのであると云ふ事は、多くの女子の既に感知したる所にして、是れが又余の研究する問題の主眼となる者である。世には斯う極言する者がある、曰く、女も天より男と同じ賜を受けて居るのに、今日男女各々相異つて居ると云ふのは甚だ訝しい、是れは畢竟法律の結果に過ぎぬ云々と、此は洵に奇矯の言と云はねばならぬ。果して此の如くならば、今日何故此の如き法律を立てたかと云ふ事を解説しなければならぬ。若も其の法律が、自然法に基て居らぬならば、之を立る理由はない筈である。

天理に背いた立法を定規にすると云ふのが、第一の誤である。云はねばなるまい、然しさうは云ふものの、法律と習慣とが、男女の原始的區別を著しく表明して、兩性間の隔離を甚しからしめた事は事實である。東洋諸國に於て、女子と小人とは養ひ難しなどの言あるは、隔離主義も亦太甚しと云はねばならぬ、それに「法律を作る者は男子にして、風俗を作る者は女子である」と云ふ謬もある通り、法律は概して強性(男子)の業であるから、某女子が女性を擁護しつゝ、女子の缺點は、大抵皆男子の罪である」と絶叫した言には、少くとも一面の眞理あるを認めねばならぬ。尤も早く十八世紀にも、グリムなる者は曰つた「女子の缺點として非難する所のものは、凡て皆社會及び誤れる教育の業なり」と。

女子の生理的要因

女子の生理的要因に就ては、女子は畢竟如何なるものであるかを研究しなければならぬが、此の研究は、最も大切である、何となれば此點に就ては、古來随分馬鹿らしいことが言はれてある、中には婦人に對して、甚だ失敬なこ

とを極言した者もあつて、女に對しては、出放題なことを言つても、差支なきかのやうに思つて居る、例へば彼のミシュレル氏の如きは、女でさへあれば、誰でも皆病人のやうに視做して描寫して居る。然し何を言つても、男女の性と云ふものは、截然として區別せられて居るから、其の區別の意義を曖昧にすることは出来ぬものである。男女の性は如何なる教育によつても、之を變化せしむることが出来ぬ程、深甚なるものである。是故に今後婦人は、教育に依つて、男子に變化して了ふなどの言は、吾人の屢々耳にする所であるにも拘らず、此の如きは女子の希望としても、男子の恐怖としても、共に、兒戯に類することと云はねばならぬ。勿論女子の男化は、希望す可きことではない、何となれば此の如き輪廻は、化物となると同じことである。然し是れも亦一種の案山子にして、恐る可き所のものではない。

女性研究の難易

此の如く女性の心理を判定する所の要因を知り得た上は、其の詳細に亘つて、之を究むることは、左程困難ではない。文士が面白半分に研究するやう

なことを全く打棄て、眞面目に男女兩性を比較して研究するならば、充分普遍的にして、且充分確實なる主性(主要なる性格)を定むる事は、人の思ふ程困難な事業でなからうと思ふ。

成程此の如き問題を論究しやうと云ふのは、一見無謀らしく思はれるかも知れぬ、就中婦人の眼に然う見えるだらうと思はれる。何となれば婦人は度々「女と云ふものは知り難い者である」と云ふ言を耳にして居るから、正直に然うだと思つて居る。又それを一種の名譽のやうに思つて居る婦人もある。固より是れ女心の小さな自負虚榮に過ぎぬので、此の種の言の裡には、寧ろ輕蔑の意味を含んで居るのに、氣が附かぬのである。女は西班牙の家如し、入り易けれども見難し」と云ふ無作法な文士の言がある。半ば嘲笑しながら、女の心の知り難きを語れば、婦人は直ぐに其氣になつて、嘲笑の意に氣が附かずに、男に知れぬと云ふ點を誇つて居る。成程個人的に言はゞ、女は男よりも知り難い者に相違なからう、余は其の理由を後條に述べる積である。然し婦人を一般に見るときには、其の感性に於て、其の知識に於て、又其の意志

の活動に於て、男子と違つて居るものあるとしても、其の違つて居る點は、男子に取つても、女子に取つても、左程知り難い所ではない。何となれば其の相違の點が正しく男女の定義となる所である。余は本論に入りて、男女兩性を比較して、一々詳しく之を論じ、女子の性質を解剖して、綿密に描寫する積であるが、之れは問題が複雑して居る爲ばかりでなく、又問題其物が、興味多き爲ばかりでもなく、其の結果が、直に結論全體に影響して、女子の知育及び德育に、應用し得べき實行的法則が、自から其中より打算せらるゝが爲である。

女子將來の境遇問題

乍然茲に本論と結論との中間に介在して、前者の終結となると同時に、後者への棧道となる問題がある。それは女子の過去に於ける境遇でもなく、今日に於ける境遇でもなく、將來にあらま欲しく思ふ境遇に關する問題である。此の問題を論ずるに當りて、余は今日女子が、昔に類例のなき社會的天職を求めんが爲に、奔走して居ることを一言する積である。此の如き運動は、凡て皆眞面目であるとは云はれぬが、然し重大な問題である。女子の要求する

所は、餘程亂れて居る、女子によつては、餘り感心の出來ぬものもある、多くは亂關的にして、多少如何敷いけれども、然しスチユアト、ミル及びセクレタンの如きは、之を賛成して、其の政治權に參與することまで賛して居るのを見れば、哲學者まで、之に賛同して居るのであるから、此の問題の、輕々看過すべからざると、到底之を遺棄し去ること能はざるとを知るに足りる、何となれば是れは女子處世の目的と、其の天選の職責とに關することである、されば此の問題を、先づ第一に解決しなければ、如何なる教育を、女子に授けて可いか分らぬ、目的は主にして、手段は之に従ふものであるから、女子將來の境遇問題は、實に、先決問題と云ふべきである。

女子の家庭教育問題

結論に於ては幾多の問題が紛出して來るが、今一々之を序論に敷へ立てて置くことは出來ぬから、其中の主なる問題を掲ぐるを以て足れりとする。先づ第一着に出て來る最も大切な問題は、女子の家庭教育問題である。即ち家庭に始まりて、家庭に一番好く行はるゝ心性の教育を指すのである。家庭

と學校との聯絡と云ふことは、重大なる問題で、男子に取りても、既に大切なものであるが、女子に取りては、尙更に大切である。夫故寄宿問題の如きは、男子の爲にも之を希望せざる者あるならば、女子の爲には、尙一層之を危ぶむので、之れは又大に理由のあることである。佛蘭西では、高等女學校を立てても、普通學の名義で立てるので、但だ土地の請願によつて、寄宿舎の添設を許可する制度になつて居る。勿論請願が四方から續出して、時に餘り容易く之を許可する傾きなきにしもあらずであるが、然し兎に角一般の制度に於ては、高等女學校は、通學ばかりに定まつて居る。如何にも女子を寄宿せしむると云ふのは、餘程考へ物である。如何程完美なる寄宿舎と雖、女子の心性に取つて、良家庭の如き好適の教化を授けることは、逆も出來ぬ、女子を寄宿せしむるに就て、父兄の心配するのも、決して無理はない、次に研究すべきは、

男女教員の優劣問題

である、女子の學ぶ所の學科如何に拘らず、男女孰れの教員を採用すべきか、女生には矢張女教員の方が好いかと云ふ事は、是れ亦大に講究すべき問

題である。一寸考へて見ると、女が女に教へると云ふのは、好適のやうに思はれ、又若し女子に好適の社會的職掌ありとするならば、女教員と云ふのが、一番好く適當して居るやうに考へられる。乍然此にも疑問が存して居るので、余は高等女學校の校長に知己が數人あるが、其の校長の話に據ると、男教員の授くる教育は、尙一層効があると云ふ話である。校長自身が女で言ふのであるから、本統であらう。多くの婦人の意見も、亦之と同じである。兎に角此事は、大學校に取つても、毫も疑ひはない、何となれば大學校は、最高の學府で、女子が此に教育を受けても、其の教育は、謂はゞ最も男兒的教育であると云はねばならぬから、男教授によつて授けらるるのは、寧ろ當然である。乍併女子の高等教育問題に就き、又其の大學校に入ると云ふ事に就きては、種々の議論があり、種々の問題が錯綜して居つて、世界到る處、今仍女子の大學に入るを否定するのが、各國の現状である。就中獨逸に於て然うである。然し之を許可して居る國があるから、其國に於ては、如何なる條件に、之を服せしむ可きか、特に如何なる効果を期し得べきかと云ふことを考ふるときは、中々至大至

重なる問題になつて了ふ。即ち社會上に於ける女子の天分如何と云ふ、大問題に達着するのである。此の問題は、一切の問題の根底に潜んで居るもので、是れは兩性の完全なる教育によつて、果して實現せらるべきものであるや否やと云ふ所まで、研究の歩を進めて行くときには、勢ひ此の至大至重なる女子處世の目的問題を、明瞭的確に解決しなければならなくなつて了ふ。

本書の参考書と著者のメトード

余は此等の問題を解決するが爲に、如何なる所に資料を仰ぎ、又如何なる方法を探るに決したかを一言して置かねばならぬ。古來女子に就て書き記された書物は、汗牛充棟雷ならずで、一々其の書目を掲ぐるさへも出來ぬ。余は又其勞を取る積もない。それは余が此種の書類を多く讀まぬからの爲でもなければ、又其の讀み得たる所を利用する考がないからの爲でもなく、概して言へば、此種の文學的作品の中には、随分雜取なものが多く、煩はしき文章、忌はしき言句も尠からざるが爲である。時々一書を徹始徹終しても、通讀し了つて、何等の眞面目なこともないものがある。就中系統的のものがなく、

唯僅に思想を起さしめる位のものである。眞に材料豊富にして、興味津津たるものに至つては、之を道學記者の書に就て求めるより外はない。例へばラブルニール、ラロシユフコール、バスカル等即ち是にして、而も此種の道學記者が、人間一般に就て記したものに就て求めても認められないから、特に女子の特性に就て述べた所を見なければならぬが、生憎此の方面の記事は、餘り澤山ない。道學者にして、特別女子教育を論じたものは、余から見れば特殊の價值ある者であるから、彼のフエネロン、マダム、ネツケル、ゾーストル、マダム、ヅレムザの三人の如きは、大に之を参照しなければならぬ。就中此種の記者にして、司祭(僧侶)であり、聽告白師(人の懺悔を聴く僧侶)であるときは、尙一層参考になる。例へば彼のジエバンル(司教(僧正)の如きは、随分深く人心を洞察して居ると云はねばならぬ。若夫れ一般の文學書に至りては、無限の富源ではあるけれども、多くは情慾の戦つて居る所を描寫して、冷靜なる真理よりも、寧ろ結果の方面に目を注いで居るから、中には如何敷いものが澤山ある。喜劇物は女子を場に登せても、人を笑はせる爲に、有ること無いこと

を婦人の性に負せて了ふ傾きがある。悲劇物は滑稽的でないとして、尙一層深く人心の奥底に觸れて居るから、同情の念を起さしむる點に於ては、缺けて居らぬけれども、但だ何事をも皆戯曲化して了つて、境遇的のものを好み、例外的感情にばかり目を注いで居る傾向がある。小説は如上二種の傾向の間に往來して居つて、一種の宿論を證明する小説となるときには、純粹の参考にはならぬ。然し此等のものでも、男女兩性の心理を滑稽的に描寫した讀物に比すれば、遙に優つて居る。此種の讀物の裡には、成程面白いことは記されてあるが、然し本統に興味のあることは、甚だ乏しい。エミール、デシアネルの如き知名の文士が、婦人に就て記されたる美點を、残らず蒐めて之を一書に編し、他の一書には、婦人の惡質缺點を、悉く書き記すやうな勞を取つたならば、随分其の著書の裡には、眞珠を認むることが出來ぬでもあるまいが、然しそれでも屑物の方が尙多いと云はねばなるまい。且文壇の珍と稱せらるゝものでも、深遠なる思想と、覺據ある觀察とを兼ね備へて居る金玉の品質のものでもなければ、余より見て何の役にも立たぬ。

若夫れ神學的斷論の如きは、其儘熨斗をつけて返上する筈である、特にホツスエの斷論の如きは、先天的に排斥すべきものである。氏は女をして其の位地に居らしめん爲、高が男の脇腹の骨より引出された者なれば、威張る道理はないとて、太く女を打撃したけれ共、彼の『女人の勝利』と題せらるゝ一小古書は此の如き奇矯の議論の不條理千萬なるを示さんが爲、綴られたるものやうに思はれる。何となれば同書には、婦人の優勝權を、創世記に依つて證明してある。蓋し同書の著者の曰ふには、若し萬物の創造せらるゝとき、完全なるもの程、それ程後に造られて、アダムの如きは、最終に造られた者であつたとするならば、エワは尙又アダムの後に造られた者であるから、此の一事に依ても、尙一層完全であつたと謂はねばなるまい、高が骨から引抜かれた者と云ふけれども、骨と云ものは、身體の中で最も堅牢なものであると云はねばならぬ。而も何處の骨かと云ふに、體中最も高貴なる領分から引抜かれた骨である、心胸を擁護して居る骨ではあるまいか云々と。然し論者或は曰ふかも知れぬ、神が後に降生した時、基督の降誕した時、男となつて生れ

女にはならなかつたではないかと、ケレども是れは益々深く謙遜する爲であつた。此の如く論ずるときは、イクラモ論せられる、然し此は戲言に過ぎないと思ふ。

諷詩、物語、寓言等は、吾々の祖先の消閑の戯とした所のものにして、固より信すべき程のものではない、今其中の一例を引て言へば、アダムが神より授かつた杖を以て、海を打つたところが、羊だの犬だの凡て有益なる獸を出したけれども、エワが打つたときには、狼だの有害な動物などを出したと云ふ話がある、男は昔から女を嘲弄することを好んだが、若しも女の方に筆を執らせて、言ふ可きことを、大膽に言はせたならば、必ず反對であつたらうと思はれる。否、實際女が筆を執つて、自由に書き初めたとき、早速自分等も男の嘲弄を試みたのである、中には泣言を并べ立てたものもある、其の泣言の中には、優にやさしきものもあり、真面目なものもあり、辛さうなものもあり、訴ふるが如きものもあつて、種々様々であるが、余から見れば、皆何の参考にもならないのである。

然し其の最も忌むべきものは、少くも余の空漠無意味とする所のものは、彼の行者、聖人及び教父と稱する者の、女人征伐、女性攻撃の語である。彼等は女を恐ろしい者のやうに思ひ、女を描くことは、悪い業のやうに視做したのであるが、然し女を侮辱するのは、女を裁判するのではない。況や之を研究し、之を描寫するとは、大に違ふ。勿論之には天真爛漫なものもあるが、然し女を悪魔だとか、又は魔王の槍、矢、火把だとか、若くは又地獄の門だとか稱するに至つては、餘り太甚しいと云はねばならぬ。テルチリアンの言には、女を見るは悪なり、女と語るは尙更悪なり、女に觸るゝは至悪なりとある。シプリアンの言には、女の歌聲を聞かんより、毒蛇の鳴聲を聞くを優れりとす。ある聖書のエクレシヤス篇には、又、吾は女を死よりも苦きものなりと思へり、女は獵師の網に似たり、其心は一種の係蹄なり、其手は一種の桎梏なりとある。此等の言は、此種の大聖人の義勇よりも、寧ろ婦人の美貌に譽となるものである。何となれば、此等の言には、一面の眞理あるとしても、若し男が女に對して、出放題なことを言つても、可いとするならば、女も男に對して、立

派に言返す可きものは、幾許もある。此の如きことは、五分五分で、女が悪ければ男も悪いと云はねばならぬ。

因て余のメトードとする所は、此等の罵詈、戯言、譴責、打撃等、一切を遺棄して、顧みの積である。書物に於ても、文學に於ても、若し採る所ありとすれば、寧ろ論議すべき問題となり、参考に資する材料となるものを採用して、一定の意見言説等は、一切之を採らない。人若し余の主として参照する所のものを問はゞ、余は答て曰ふ、天然と歴史と、實驗科學と、就中人生とである。天然の如きも偏頗なく觀察し、當面直觀するのである。

余の研究せんと欲する所のものは、女性一般であるが、然し餘り言及する所廣きに過ぎると、適切に言顯すとの出來ぬ恐れもあるから、余の特に選定して研究したいと思ふ所のものは、勿論物語や、戯作や小説などに上れる女性でなく、切言すれば、歴史上の女性でもなく、特に我國今日の實際の女性である。而も之を明に知悉せんと務むるのは、他意あるのではなく、出來得る丈け善く之を教育せんが爲である。余の研究する所の女性は、實に此の如き者

である。故に余は我國の母たり、妻たり、娘たる者を直接観察し、本人に就て聞
糺しつゝ、其の適能及び其の要求に關する眞理を究め、今日の女子を教育す
るに當つて、目指すべき目的と、之を教育する最善な方法とを、出來得るだけ、
精確に判斷する積である。

若夫れ結論の教育論に至つては、凡て之に關する有益有趣味の議論は、悉
く參照する精神ではあるが、然し余の標準とする所は、自家固有の經驗に照
らした原則と、凭據ある事實とに外ならぬ。

著者の主義精神

然らば則ち余は如何なる原則に基き、又如何なる精神を以て、之を研究す
るかを言つて置かねばならぬ。何となれば人生の事を論するに當りては、是
非主義を定めて置かねばならぬ必要がある。

故に余は公々然表白して置く、余は此の問題を、飽迄も眞面目に思ひ、其の
大切なことを深く自覺して居る。女子の弱質缺點に就て、歴史、生理、心理など
で、何と教へて居つても、女も亦是れ一の人格であつて、男と同じく責任あり、

又自由に竭すべき天の使命を帯びて居る者であると言ふを妨げぬ。余は固
より男女兩性の間には、生理上及び精神上大なる相違あるを認むるに躊躇
せぬけれども、乍併相違は不平等であるとは思はぬ。性質の違つて居ること
は、拒否すべからざる事實で、實は之が爲に、職責が各々相異り、又此の違つて
居る職掌に於てのみ平等と云ふのは、認められるのである。然し設令此の如
き相違あるとしても、其の奥底には、深き一致、深き契合點あるは、言を待たざ
る所にして、若も之がなければ、和合調和と云ふものゝある可き筈がなく、別
離及び道德的離縁のみとなつて居るであらう。要するに男女共に人間にし
て、兩性相合して人類を組成するものである。故に女も男と同じく、全き意味
に於ける人間にして、其の品位を圓滿に備へて居る。即ち義務も權利もある。
から、婦人の權利、詳しく言へば、尊敬を要求する權利、義務を要求する權利、其
の理性の發達と、其の圓滿なる人性の發展とを要求する權利あるを認めぬ。
ばならぬ。

余は此の研究をなすに當りては、博物學者ともなり、社會學者ともなり、道

徳學者ともならなければならぬが、博物學者及び社會學者として論ずるに當りては、男女兩性の分業に於て、進歩の標的を認めんことを欲するには相違ないけれども、道德學者としては、尙一層確かなる進歩の標的として、女子の求め得た尊榮世に公認せられた品位及び輿論、風俗、法律等の獲得せしめたる道德上の平等權等を標榜する精神である。

女子の性質に就て、此の如き主義精神を有つて居るから、女子を教育する方法に就ては、自然此の主義精神より打算せらるゝ譯である。

余の主義によりては、女子は圓滿なる道德的生命の爲に、教育しなければならぬ。換言すれば義務と責任との爲に、教育しなければならぬ。隨て女子を教育するには、聽従をのみ教ふる筈ではない。勿論之に自由服従の心と、獻身的精神とを鼓吹すへき筈ではあるが、然し強て之を壓服すべし筈の者ではない。女には弱質ありとするも、其の弱質は學問と教養とを缺かしめて、男子の都合主義の犠牲に供しても可いと云ふ理由にはならぬ。女は弱い者だから、何うでも可いと云ふが如きは、以ての外である。弱ければ弱い程益々之を

強くする必要がある。故にフエネロンも曰ふた、女子は愈よ纖弱なれば、愈よ之を強健にするの要ありと。處で女子をして、眞個道德的生命の爲に、強健ならしむる道は唯一つ、即ち其の判斷力を養ひ、一の理想を掲げて、其の理性をして、自由に之を憧憬せしめ、其の意志をして、危険を冒して、之を追求せしむるに在る。

マダム、ツ、レムザの言は、實に味ふ可きである。曰く、婦人の精神は、普通一般の思想に閉鎖されて居る間は、安全強固なるものにあらず、何となれば今日まで、彼等を繋ぎ來れる唯一の羈絆とも云ふべき先入と習俗とにして、破るゝ時來りとせば、果して如何なる言動及び信仰の規法か、彼等に留存すべき？と。此言は今日の現狀に、極めて適中して居る。何となれば今日は、風紀問題及び良心問題は、太く動搖を來たして居る。如何にも今日の婦人は、何と言はれても、自由の餘澤を充分受けて居るから、新聞は讀む、芝居には行く、何一つとして聽かざるはなく、何一つとして語らざるはなく、四圍の精神、即ち批評の精神を、凡ての氣孔より自由自在に呼吸して居る。此の過當なる自由に就

ては随分是非の評はあるが然し之を女子より奪ひ取る譯に行かぬ女子に取つても男子に取つても外に好い道はない女子をして成る可く眞面目にして、輕佻浮薄に陥らしめず己れ自ら言動を規劃し得る資格と品位とを保たしむるより外はない。最早今となつては選擇の時代ではなく如何に中心竊に過去を追慕する者あつても又復た昔に立戻る譯にも行かぬ余も亦過去に立戻る主義ではない其の理由は何れ本文に述べやう余は女子の法律上及び政治上の服従主義に就ては姑く措き少くとも道徳上に於ては女の男に對する服従主義は圓滿なる平等主義を以て之に代へ男の特典をも女の無能をも認める筈でない云ふ所の、スチユアートの言論に躊躇なく賛同する者である要するに女子も男子の如くに教育しなればならぬ斯く言へばとて同じ教育法を以て教育せよと云ふのではない同等に注意を拂つて教育しなればならぬと云ふのである是れは男子の利福にもなれば女子の利福にもなるツマリ人類一般の利福及び名譽になるとである世の文明を以て獨り男子のみの事業のやうに視做すのは大なる誤である

る。社會學の主なる法則に據れば社會に分業の制度が益々進歩發展すれば、連帶責任が益々親密の度を増すやうに見える、女子は全く從屬的になつて、殆ど男子の權内に司配せられて居るが如く思はるゝ時ですら、女子は社會に、深大なる影響を及ぼすものである。セリダンの言は、實に眞理に近ひ、曰く「婦人は吾人を司配する者なり、故に吾人は婦人をして完全ならしめんことを務めざるべからず、婦人にして其知愈よ明なれば、吾人は愈よ明に教へらるべし、吾人の賢知は、一に係つて女子の教育に在り」と、女子は將來男子の母となり、人物の母となる者であるから、國家は大に之を教育して行かねばならぬ義務がある、女子を教育するのは、ツマリ人物を國家に提供せしむる道であるのに、今迄男子が自分の利害を打忘れて、若くは思違ひて、自分に名譽を齎し、自分の子に血を分けて教育して呉れる女子の教育を放棄して置いたと云ふのは、何たる偏癖何たる盲目の沙汰であるか。

人の私生涯に於ても、良人が妻と利害を俱にせずして、自分の品位を保全すると云ふことは、到底出來ぬ話である。妻が反對なのに自分ばかりが廉潔

に誇ると云ふ事も出来ねば、妻の扶助がないのに、己れ獨りで一切の義務を竭すと云ふ事も出来ぬは、人の皆自験して能く稔知して居る所である。輕薄なる妻女の虛榮心を満たしめ、若くは其の奢靡の心の満足を買はん爲、大なる失態を演じた良人は、天下に幾人あるか知れぬ。之に反して賢婦人の勸奨がなかつたときには、己の力量を揮ふことの出来なかつた良人も澤山ある。妻が先づ第一に要請しなかつたならば、敢然身を挺して、獻身的事業に従事することの出来なかつた良人も亦世に澤山ある。

是を以て若も女子を善く教育して、健全強勇なる徳の方面に彼のダルヴキンの巧に描きたる雌雄淘汰なるものを行はしむるならば、道徳上の進運果して如何ばかりなるか知れぬ。

翻て之を公生涯に見るも、亦同じことである。フエネロンの言に、公然要路に立つて、權柄を掌握する人と雖若し妻女にして、之が施行を助けずんば、其の計劃をして、實効を收めしむること能はずとある。それはコンドルセ氏の明言した通り、男子は法律を作れども、女子は風俗を作ると云ふ爲である。是

を以て女子は、男子と共に社會を組成、若くは改造するが爲に、如何程貢獻するか分らぬ。女人は其懐に生兒を抱くのみならず、國民をも抱て居るものである。

是故に今日我國では、女子の教育には頗る重きを置き、上流社會の婦人を、單に裝飾的に教育して、徒らに輕佻浮薄ならしむるが如きを喜ばぬやうになつて來た。蓋し國家の彼等に待つ所は甚だ大きい。若し彼等にして、眞面目でなければ、其の兄弟も、其の良人も又其の子供も眞面目でなくなるであらう。若し婦人にして、其の責任の高且大なるを意識して、自ら男子に手本を示さぬならば、男子も亦己れの天職を善く竭さぬであらう。良し男子にして、能く之を竭すことを得ると假定しても、若も妻女の賛同もなく、勸奨もなくして、男女間若くは夫婦間が、始終乖離分裂して居つて、妻女の方が、依然輕佻浮薄の精神に司配せられて、階級的遺習を因襲して居るならば、如何程困難の原因となるか分らぬであらう。故に新時代の男子には、是非新時代の女子を必要とするものである。

勿論廣く社會の公益を圖るが爲には必ずしも女子をして政治的思想を有たしめなければならぬ必要はない女子第一の急務は善く家庭の責務を竭し家庭の平和と秩序と歡喜とを計り凡て家庭をして一致せしめ繁榮ならしめ名譽ならしむる所の要因となるに在る女子の社會的責務は實に主として此に存するものである其の責務や麗はしくして天地神人の均しく祝福する所ののである乍然若も女子にして其の盡す可き義務の心得己の行ひ得る所の事柄の意識及び社會公共的事業の明確深甚なる觀念が充分備はつた上茲に従事しなれば完全に社會的職責を竭すと云ふことは出來ぬ是を以て我國の女子教育にして若も女子をして家庭以外に國家あるを知らしめ小社會以外に大社會の存立するを見せしめつゝ内政より外政に家事より國事に除々と移らしむる漸進主義を取らぬならば良教育と稱し得べきも未だ以て完全なる教育の名は下されぬ

青年子弟に取つては今日吾人の希望する所は決して高襟紳士や文弱の士を作るに在らずして凡ての社會的境遇に應ずる國民を作るに在る乍然

若も女子を教育するに當つても國民の妻たり母たるに適するやうに教育しなれば吾人の希望は殆ど齋餅に歸して了ふであらう此の意見は余一個の意見でもなければ現今の架空論者の意見でもないマダムヅレムヅの書は一千八百二十四年に綴られたものであるが其の書中には國民の妻たる者に就て高崇なる意見が記されてある國民の妻としての女子の天職に就ては焉より立派に描かれてあるものはなからうと思ふ實に高想妙思と謂はねばならぬ

レムヅ夫人は余の言はんと欲する所を最早や立派に言ひ盡したので夫人は自らの経験によつて知あり志ある女子は公生涯に入れる男子に取つて如何程後援になるものであるかを明に知り得たのである此の如き思慮ある女子にして國家の觀念と國家的義務の觀念とを有つて居るならば國家に貢獻せんと欲する男子を如何程勵ますべきものであるかを自驗した上語つたのであるから決して架空論者の空論と同一視すべき性質のものではない

是に由て之を觀れば、女子にも男子に於けると同じく、社會の平安に資する責務と、連帶責任との觀念を鼓吹する教育を授くることは、極めて必要である。と云はねばならぬ。今日吾人の眼前に提唱せらるゝ一切の大問題は、先づ第一女子の權利問題からして解決し始めなければならぬもので、此等は男子が獨斷で斷定することの出來ぬものである。是非とも女子と共に之を解決し、常識の意見を参照しなければならぬものである。左もなければ始終杆格して調和を保つことが出來ぬであらう。若も婦人が、反抗の精神を抱き、不條理の言を云ひ、男子の壓制的權利でなければ、御して行くことが出來ぬ社會であるならば、何うして其の安寧秩序を保つことが出來やうか。果して然りとすれば、女子の爲ばかりでなく、社會の安寧秩序と、其の進歩發展の爲にも、國民の女子、市民の女子、一切の女子を教育して、國家的精神を保たしめ、忠君愛國の衷情を起さしめ、家國に對して責任のあるを自覺せしめ、各自其の自分及び其の位地に應じて、盡す可き所あるを知らしめなければならぬ。如何なる身分、如何なる位地に在つても、女は裝飾品や奢靡の動物でありさ

へすれば可いと云ふ理由はない。此の如きは、自身一個の品位にも、幸福にも、又其の勢力範圍と共に、益々大きくなる社會的責務にも、適はぬことである。是を以て家國の將來を思ふ人士、所謂愛世愛國の士は、人が何と言つても、女子教育に依らなければ、國民の風俗性格を改造することが出來ぬと確信し、飽迄も女子の教育を改良し、男子の教育の如く、之を堅實にし、女子にも相當の學識と、國家的觀念を授けしむることに、鞠躬盡瘁するものである。是れ亦余の目的とする所にして、此事は余の論ずる所を讀むに従つて、益々明に分るだらうと思ふ。兎に角余が此の如き精神を以て、國家の道德、國家の隆運に重きを置き、女子教育の大問題を解決せんと試むるのであるから、誰も之を見て、余を非難する者はなからうと思ふ。

本 論

第二章 過去に於ける女子の社會的境遇

女子境遇進化の概則

余は序論に於て、女子の性質(知識的及び道德的性質の本有的要因に、二種あると言つた)女子の今日に至るまでの歴史と、女子の身體組織及び其の生理作用即ち是である。本章にては、前者即ち女子の史的過去に就て、研究する積である。

余は今茲に創世以來、今日に至るまでの女子境遇の變遷進歩を、編年史的に叙説するの意はない、余は此の事業は、殆ど不可能的であると思ふ、何となれば、人生の事は、愈よ遠く遡つて究むれば、愈よ其の全般の繼續的進歩が認められぬのである。世の事は概して皆此の如くであるが、特に人事に至りて、尙更然うである。哲人ライブニツの曰ふ通り、進歩は往きつ戻りつして行はれる。と云ふ、即ち一進一退、中々容易に直行的進歩をなさぬのである。例へば

今埃及の例を引て曰へば、同國の事は、今日明に知ることは出来ぬけれども、然し古書や古器物などに徴するに、當時の婦人は、如何なる境遇に在つたかと云ふ事は、略ぼ推測される。即ち今日の婦人に比しては、餘程進歩した境遇及び位地に立つて居つたものであるとは、萬口の皆均しく一致する所である。勿論彼の田舎婦人の境遇如何や、回教の婦人に就て、説く所如何と云ふやうなことは、人の皆能く知つて居る所であるが、然し象形文字時代の文獻及び墓碑などに徴して見るに、凡て内事に従事して居つた婦人は、例へば彼の機織などをして居つた者でも、男子と行樂を俱にし、宴會にも、男子と共に出席し、祭禮などにも、男子と共に參拜して、供物を獻げ、青春妙齡の女子などは、花装玉服、麗容月を欺き、美聲雲を止むる歌などを歌つて興をたすけ、光彩を添へ、老母になれば、父と同じく兒孫の尊敬を受け、到る處男子と同等の位地に立ち、一種の祭職にまで、従事するに至つた事が記されてある。

亞細亞就中アッシリアの古代文明とは、珍らしく相反對して居る、兎に角婦人に關する點に於ては、古代の埃及は、現代の埃及よりも、餘程高潮の文明

程度に在つたと云はねばならぬ。是故に進歩は、一般普及的、且継続的と謂れない。

然し進歩の有無に拘らず、余は過去の文明に於ける婦人の境遇を考へ、今日一般女性の性格に照らして見なければならぬ。

處で社會が愈々文明に進めば、男女の分業が、愈々隔離するやうに思はれる。勿論昔から兩性間に、分業のないことはなかつたけれども、野蠻社會には、それが餘り著しくなかつた。今日でも女子が一切の勞働職業を共通して居るので、就中夫婦の如きは、夫が漁獵に従事すれば、妻も漁獵に従事し、夫婦共に勞苦を同うして居るものがある。是非の問題は姑く措き、太初の時代には、往々此の如き状態に在つたので、但だ或社會は、早く此の状態を脱し、或社會は遅くまで此の状態を繼續すると云ふやうに、之を脱出するに、遲速の別あるのみで、初めは孰れも皆同じであつた。婦人共用の如きは、此の野蠻時代の特性であつて、當時の社會は、實に渾亂して居つたものであつたが、然し凡ての社會は、皆此の關門を経て來たらしい。

婚姻の如きも、随分曖昧粗莽の形式の下に行はれ、一夫多妻、若くは一妻多夫は、此の渾沌社會の常態であつた。それが一步一步づつ、正當の婚姻、即ち一夫一婦の制になつて、女をして家庭に従事せしめ、家政を司るを以て、其の本務となさしめ、男は外に出でて、戦争、漁獵、若くは耕作等の、男兒的職業に従事しつゝ、男女内外の事務の、益す相區別せらるゝに伴れて、秩序、分業、及び男女兩性の區別が、益々著しくなつて來たのである。

乍然婚姻以外にも、此の文明の程度の規法を當嵌むるとの出來るものがある。歐洲各國に於て、又一國の各地方に於て、水平の相違の著しいとき、如何なる現象を來たすかと云ふに、高等教育の盛んに行はれて居る處には、男女の區別劃然として立ち、其の職分も、亦其の生活法も、各々相異つて居るけれども、人文の未だ進歩せざる處に於ては、生活法も、嗜好も、將又適能も、男女共に今仍始と相同じである。随て文明の高潮に達して居る、歐洲強國の大都に於ては、男女兩性の區別は、其の極點に達して居るけれども、未だ開けぬ田舎地方に於ては、其の區別が極めて微々たるもので、男女の勞働事業が、殆ど相

同じく、風俗も、氣象も、動作も、將又容貌までも、餘り違つて居らぬ。ケレども文明の絶頂に達して、故さら要求を作つて生活して居るやうな、安樂社會に於ては、男女の區別が、又復た消失して、了つて、女子は男子の職掌、遊戲等を、悉く行ひ、男子は又女子の如く、柔弱になつて居るが、此の如き事態は、決して進歩ではなく、一種の退歩、衰運の兆、社會解體の端緒と視做すべき筈である。

乍併男女の區別は、一の條件を備へなければ、一種の進歩として、視るべきではない。其の條件と云ふのは、區別中に平等ある事、兩性の一が、他に壓服せられざる事、却つて各々其道を異にしつゝ、一致協同して、共同事業と、社會の隆運と、子供の教育等に合力する事、是れ是である。或社會論者の説に據ると、是れは自然に出來するやうになると云ふことである。少くとも事物の勢によつて、此の趨勢に赴くと云ふことである。何となれば、同論者の曰ふには、分業が極めて著しくなると、連帶責任が極めて親密になり、人が最初より之を意識すると、否とに拘らず、然うである云々と、如何にもさうらしく思はれる。何となれば、一の社會に在りて、凡ての成員が、同一の事業を、均しく行ひ得る

とか、若くは均しく行ひ得ざるときは、一人の行はざる所は、他人が之を行ふのであるが、職掌の専門となつて居る社會に於ては、之に引き換へて、各自其の行ふ所を行ふけれども、若も之を行はぬときは、誰も之を行ふ者がないものであるから、働きの一時に停止されて了ふ。兎に角編制組織の完滿なるものは、共同責任の完滿なるものである。是れは人體組織に於ては、明にして、組織の完全なるに依つて、一致共同が能く保たれて居る。社會組織に於ては、其の成員が、皆獨立自由の人間であるから、所謂社會的一致なるものは、個々人々の自由意志より出る業でなければ、完全になることが出來ぬものである。否實際に於て、不可能である。勿論壓制に依つて、此の一致を保たしめ、習慣の勢を以て、其の無理なる統一より生ずる苦痛を軽減することが、全く出來ぬと云ふ譯ではないが、然し此の如き一致は、真正の一致ではない、一致共同といふものは、自由の意志より出で、純然たる道義的のものでなければ、人間社會に、適當なるものと云ふことは出來ぬ。

乃で眞正なる道義的平等と云ふものは、到る處に分業と共に、並行しなければ

ばならぬものである。正直に言へば、女子、今迄一般に、男子より一の目的の如く取扱はれたことのないもので、女子の運命と云ふものは、今日に至るまで否、今日に於ても、寧ろ尋常の手段の如く、視做されて居ると云ふ事は、多くの場合に於て認められつゝある所である。是故に今仍精神的相異の一半を、男女兩性の間に見受くるのである。分業より起る相異に、社會の平等より生ずる相異が加はつて来る。之を古今に照らして、少しく研究して見やうと思ふ。

古代希臘に於ける女子の法律上の境遇

先づ第一に、風俗と法律の二つを明區別してかゝらねばならぬ。風俗と云ふのは、習慣と風習とを指すものに、多くは法律に先だち、廣き程度に於て、之を矯正するものである。女子は自、美色を備へて居る、少くとも男子の美と稱するものを備へて居る。女は男、愛を鼓吹するもので、愛は世にも最も麗はしき感情にして、恐くは他の二の美感の源泉であらう。是故に愛は天性自然に女子をして寵愛せらるべきものにするので、苟も粗暴の人にあ

らぬ以上は、此愛の爲に多少尊敬と親切とを拂つて、女子を厚遇するものである。此は何れの時代に於ても認められた事象にして、野蠻人民の如き、劣等なる社會に於てすら、既に其の傾向を見受くるとするならば、況してや秩序の立つた、人間社會に於て、一夫一婦の制の布かれた場合には、尙更に然うであつたと云はねばならぬ。

乍然過去の世に消えて了つた文明社會の風俗は、吾人之を直接明に知る道がない。唯主として文獻に依つて、間接に之を窺ひ知るのであるから、甚だ不完全であると云はねばならぬ。而も風俗なるものは、時代によつても違ひ、家庭によつても異なるものであるから、之を以て一定不變の則とすることは出来ぬ。此際充分定立して、捕捉することの出来る、確固たるものは、唯一つ法律即ち是である。されば多少精確に論じやうと思ふときには、各國各代の、女子の社會的境遇を判断するには、勢ひ法律に基くより外に道はない。又實は法律を定規とするときには、古代文明に就て、如何敷き物識先生に欺かるゝ憂はないのである。

乃で余は古代の印度に就ては何も語る可き事を認めぬ、但だ希臘及び羅馬の文明の描筆であつたらうと思はるゝ位の事である。蓋しマヌ法典には、古代の希臘及び羅馬に於ける女子の法律上の境遇一切を約言して居る明文がある。曰く「女は幼時其父に従ひ嫁しては其の良人に従ひ、良人死しては其子に従ひ、若し子なければ其の良人の近親に従ふ、蓋し女は決して自儘勝手に自ら處理すべきものにあらざらん」と。

希臘の女子境遇は文運隆昌時代に通じて、實に此の如くであつた。其の狀態は一生丁年未滿者の如きものであつた。身を終ふるまで自ら處決する事が出来ずして、始終自分の上に一の主人を戴いて居つたもので、丁度マヌ法典に記されてある通り、幼にしては父を主とし、嫁しては良人を主とし、未亡人となつては其子若しくは其の親族を主と仰いだものである。婚姻の目的とする所は唯一つ、子孫を繼續する丈けの事であつた。婚姻と云つても、良人の希望に異ならなければ夫婦の道德的契合、眞實なる共同生活とならなかつた。此等は唯良人の意志次第であつた。

成程女でも善良溫和なる男に際會すれば、鄭重親切に取扱はれて愛され、もし敬はれぬしたのである。妻が短氣で、良人がお人好しであつたときには、随分と喚天下にもなつたのであるが、然し是れは氣質問題で、寧ろ風俗上の事である。キセノフォンは家庭の婦人の、春温かな生活を描き示したけれども、法律上茲に至らしめたと云ふ譯のものではなかつた。且此の如き婦人でも、さへも唯母となる事が出来たと云ふのみにて、實際は奴隸程には壓制されなかつたが、女傳若しくは女世話人と云ふ位の身分に過ぎなかつたのである。女は自ら結婚することは出来ず、自分の氣に入ると否らぬに拘らず、他に嫁せられ、子供がなければ、若しくは良人の氣に入らなければ、直ぐに離縁せられ、良人の方では、イツの何時でも自由に離縁を申渡す事が出来たが、妻の方からは如何に重い理由があつて、之を願つても、容易に離縁の許は出なかつた。良人は自分の存命中でも、妻を第三者に譲ることが出来たので、其時は否應なしに、他人の有とならねばならなかつた。それにしても大麥五十リツトルの價額にも及ばぬ、値打の者と視做されたとは、なさけない話ではある。

まいか、斯る有様なれば法律上の行爲などを行ふ資格は、逆も與へられなかつたのである。

人の妻たる者は、良人の授けた権利の外何等の権利もなかつた。處が男は、閨門深く鎖して居る妻は、何事も知らず、無教育なること、下女同様であつたから、之には餘り權利を授けなかつた。寧ろ藝娼妓は、自由が利けて、會話も變化があつて面白く、學識も深いことはなかつたが、多くは洵爛の才があつたから、男子の愛着を引いたのである。ア、是れ實に女子の境遇にして、奴隷でなければ藝娼妓とは、なさけない話ではあるまいか。奴隷と云ふ語は、餘り酷なりと云はゞ、下女と言つても、五十歩百歩である。但だ時代により、特殊の場合によつて、多少の相違はあつた。丈で、婦人境遇の改良と云ふ程の改良はなかつた。

就中婦人は、凡ての男子より輕蔑されたばかりでなく、當時第一流の哲學者と稱せられた者からも、不完全な者服従の性質でなき徳は、行はれぬ者のやうに視做されて居つたから、愈々改良せらるゝ機會がなかつたのである。

アリストテレスの明言に曰く「男子の知賢は、女子の知賢にあらず、天は女子と奴隷との運命を、別に規定し、リと、プラトーンが男女を共に筆誅したのは、兩者を擧げて、共に國家の穢に供せん爲であつた。氏が女に婚姻をも、又其子をも許さなかつたのを見れば、女子の境遇を重んじたとは、逆も言はれぬ。

されば如何なる方面から見ても、希臘に於ては、男女の間に、深溝があつたと思はれる。雅典に於ては、尙更である、スパルタの方は、左程でもなかつた。女を生むを重んぜずして、男を生むを重んじたのは、無理もなかつた。男の子の生れたときばかり、家庭では大祝で、橄欖樹の冠を門の上に釣して、附近にまで旌表したと云ふ。

羅馬に於ける女子の法律上の境遇

羅馬に於ては、チトリウスが、カトンの口に言はしめた一言を見て、萬事を推測することが出来る。其言に曰く「女の奴隷境遇は、萬古脱するの期なし」と。如何にも羅馬では、希臘に於けるが如く、否、希臘に於けるよりも、一生服従の

身分であつた。父、良人子及び男統傍系親の権内に在つて、頭が上らなかつた。羅馬の貴婦人として、随分貴ばれたけれども、是れは唯子供の母、若くは家居の留守役としてのみのことであつた。婚姻の如きも、家名と宗廟とを継げる一手段に過ぎなかつた。良人は妻に對して、生殺の權を握り、其子を認定することとを拒むことまで出來たのである。妻に罪ありと推量するときは、勝手に自分には理屈を附けたものである。

然し奴隷と云ふものは、主人が弛むときは、直ぐに自由に飛出さうとするものである。處が此事は、屢々羅馬に出來した。是を以て或時代には、女人の奢侈、暴慢などが、爲政者の腦を痛める基となり、法律で壓屈せらるゝ動機となつたのである。乍併婦人が羈絆を脱するや否や、直に此の如き暴慢の沙汰に陥たと云ふのは、彼等は如何に責任の觀念薄かあしかを、示證するに餘ある。吾人は思ふ、此の如き愚鈍なる、尙的狀態は、婦人の性質より起り來つたのである。なければ、彼の第三の性、即ち風俗習慣より出でたるものである。女が惡徳を以て、我儘自由になつたと云ふ、徳のみ示せば、無理な注文ではあるまい。

か、女の放縱逸肆を罰せぬのは、人が之を尊敬して居ると云ふ意味でもなければ、又女自身が道徳的に獨立不羈である證據だと云ふのでもない。寧ろ却て其の反對である。女子が法律より求め得ざる所のもの、又最も求め得難き所のものは、平等の權利である。道徳的品位である、尊敬である。

處で羅馬の法律は、如何に西歐の文明を壓しつゝあるか、就中佛蘭西の文明を壓しつゝあるか、人の皆能く知れる所である。羅馬法は、一方より舊ゴリア及びゼルマニクの風俗に合し、他方よりは、基督教と合して、佛蘭西法の大動力となつたのである。良人の「權力」と云ふのは、明に往昔の壓制權の遺産である。

基督教より見たる女子の境遇

基督教が、婦人の位地を高め、境遇を和ぐるに、貢獻した事は、拒否す可からざる所である。少くとも間接に、茲に寄資したるの功は、之を認めねばならぬ。同教自らも、時々女性を尊敬するに就て、躊躇しないとはなかつた。蓋し其の本源、猶太教と羅馬とに、密接の關係を有つて居つたからである。羅馬は前述

の通り、婦人に對して頗る酷であつたし、猶太教は、凡ての東洋流の如く、終始婦人を劣等視して居つた。人も知れる如く、五世紀に當り、マソンの會議では、女に魂ありやの問題に就て、頗る紛擾を極め、甲論乙駁、一は一非、漸くにして神の母(マリア)に就てのみ、肯定説を決議したのである。所謂教父なる學者連(公教學者)は、女が誘惑の本源、犯罪の原因となつたと云ふので、(元祖アダム、エワ)の事を云ふ、往々婦人を酷筆したものである。婚姻の如きは、婦人の社交的生命とでも稱す可きものなれば、之を七秘蹟の一に列したことは列したが、而も之を劣等の状態の如く視做した。人の母となることは、女人の勝利であるのに、尙且之を獨身に劣れりとしたのである。此等は皆女性に取つて、餘り難有くない事である。乍併男の傲慢も、亦女のそれの如く挫かれたので、男女夫婦二人共に、原罪の遺跡を印したので、後悔によつてのみ、救はるゝけれども、然し男女共に、其道に依らねばならぬ。婚姻は最早や男にも女にも勸めぬが、一たび結んだ上は、離縁は出来ぬと定め、婚後は夫婦共に、貞操を守らねばならぬと云ふ事をも規定した。畢竟拯救を計る義務と條件との前には、夫婦

同等であると云ふのが、基督教の説く所である。

古代佛獨に於ける女子の境遇

ゴロア人中に於ても、女子の境遇は、甚だ可哀相であつた。良人は妻に對して、生殺及び離縁の權をも有つて居つた。矢張り東洋流の、一夫多妻の遺跡が、多年留存して、セルト人の中には、焉よりも悲惨なる遺習が、留存して、居つた。即ち妻を良人の屍と共に、火葬場に投ずるの風是である。乍然此等もセザルの時代には、餘程輕減して居つたと云ふ。妻は自分の嫁資を携へて行つて、良人も之と同類のものを合せて、共産にしたから、少くも表面上は、同等の身分のやうに思はれた。

日耳曼人の中に於ても同様で、一時男が女を買つた時代があつたと云つても、タシトの時分には、最早や此の如き賣買がなく、唯僅に噂のみ遣つて居つた。結納を交附して、女の方でも、何等かを納めて、形式だけでも、同等を表明したのである。婚姻の進物と云ふのは、多分此の古風の遺習であらう、何となれば今日でも、夫婦となる者は、進物を交換するのである。

要するに古代佛獨の婦人は、其の良人の所有物ではなかつた、寧ろ其の好伴侶若くは合資者であつた。何となれば婦人も自ら資産を所有し、良人の家督をも相續したのである。一旦緩急あつた時には、戰場にも随伴したのである。少くとも最初には然うであつた。

中世に於ける女子の境遇

右等の要因及び條件の相合したる所より、西歐中世の文明なるものが生れたのである。余の日耳曼婦人に就て、前述した所を見れば、武士時代に於て、婦人の特典を具した事は、略ぼ推測されるけれども、然し此の如き封建時代の美點を見て、直に婦人の真正なる境遇、法律上の境遇と視做す筈でない。封建制度は、主として軍事に従事し得る爲に立てられたものであるから、最初には自然領地を所有することを、婦人に禁じたのである。但だ其の領地が、世襲となり、家督となつたときのみ、之に接することを得たが、年長の權と共に、嫡男の權も、亦之に随伴したのである。乍然多くの場合に於ては、習慣法に依つて、男子たる家督相續者(嫡男)は、其の姉妹を片附けると、姉妹の損害を賠

償しなければならぬ制度になつて居つた。又女子の一たび結婚したる者は、嫁資と共に父の家督より、自分の分前丈を受けたものと視做された。それが漸次婚姻の契約書にまで、家督相續放棄の旨をも、記入する風習になつて了つたのである。嫁資と云ふ程の嫁資を受けなくても、然うであつた。

領地が女子の手中に歸したときには、未だ丁年未滿なれば、藩主が之を後見し、若くは之を一人の武士に(采地及び財産の權と共に)委托して了つた。後に丁年以上に達したとき、藩主の承諾がなければ、自ら結婚することが出来なかつた。却て藩主は、其の丁年、即ち十二歳に達するや否や、強ても結婚せしむることが出来たのである。未亡人の如きも、再婚せしめられても、一言の異議をも申立てることが出来ず、而もそれは、六十歳に至るまでにして、之に背けば、領地を失はねばならなかつた。婚姻の時にも、夫婦共有財産と云ふものがなく、唯豫贈財産(婚姻の時夫の婦に約して、其死後家道に備ふる財産)のみが、妻の權内に在つた。

貴婦人の境遇すらも、左程羨ましきものでなかつた。良人が粗暴でなかつ

たととしても、又留守中随分失敬な用意警戒を備へて置くやうなことがなかつたとしても、餘り芳ばしい境遇とは云はれなかつた。然し風俗が漸次和らいで来て、貴婦人には得意の時代があつた事もある。ケレどもそれは、幾人あつたかと云ふに、洵に數へる位しかなかつた。滔々たる家來の身分になると、夫婦共に駄獸の如く視做されたのである。良人が駄獸なれば、妻も駄獸で、駄獸の又駄獸と來た日には、焉より劣等の身分はなからうと思ふ。違法結婚中世封建諸侯の法律に反戻したる婚禮の法に依つて、家來共は、身分の違つた者と結婚することを禁せられた。主君の領地外に於て結婚することも出来なかつた。尙此の時分の賤民夫婦及び其娘を壓屈した法律があつたが、今は此等に就て何も言はぬ。

若夫れ中流人民、即ち市民若くは町民と稱する者に至つては、之に對する法律は、習慣法と云はんよりは、寧ろ成文法で、一半は羅馬法を模寫したものである。女子の無資格、就中既婚婦人の無資格何も出来なくなる事は、法律で一般に規定せられた所である。然るに夫權の如きは、佛國革命に至るまで、殆

と變らずに繼續したのである。乍然此の長き世紀間に、風俗は法律よりも進歩したのである。宗教改革は婦人を苦しき場合に處せしめて、其の性格をも強め、其の品位をも高めたので、婦人も自然に、人文の進歩を利用し、サロン、會話、及び社交等を以て、紳士又は君子人より尊敬を受くるやうになつたのである。

乍然社會には、種々の階級あることを、決して忘れる筈ではない。前述の概則に基き、社會的分業と、男女兩性の區別とは、始終上流の階級に於てのみ、著しく顯はれたのである。ケレども他の階級では、其の代りに、眞正の尊敬と眞面目なる平等とを失はなかつた。上流社會の婦人の受けた尊敬と云ふものは、寧ろ媚愛である。媚愛と尊敬とは、表面上同じやうに見えても、實際は大に違ふ。是を以てアグリツバ、ドビギエは失敬な比喻を設けて、當時の貴婦人を埃及の寺院に比べたのである。如何にも埃及の寺院は、外觀甚だ美麗ではあるが、院内には、猫だの、猿だの、野牛だの、鶴などが巢を作つて居つた。

戀歌を歌つて、媚びた先生方も、多くは皆貴婦人に對して、中心では右と同

感であつた。兎に角婦人は、男が之に媚び諂つて居る間は、無論酷遇壓制せられるよりも、黙んで居るに相違ないが、然し實際には、其の境遇が、表面に見える程高まつた譯でない、哲學上より見ても、其の通りである。ルイ十四世の宮廷の貴婦人と雖、厭々ながら結婚し、氣がすまなくとも、禮儀作法の奴隸となり、王の寵眷斜ならずとするも、有難迷惑の事が度々であつたから、實際は希臘羅馬の婦人よりも、其の境遇位地が高かつたとは思はれぬのである。

現時に於ける女子の境遇

男女兩性の平等を、民法的に宣したのは、一千七百九十一年四月にして、佛國の革命が、初めて之を宣したのである。此法が撤回されぬやうにとて、民法では、相續權放棄のことを一切禁止したのである。それ故嫡男權は、歐洲各國何れの國に於ても、多少遺存して居るが、佛國だけは、最早それがなくなつたのである。が是よりして女子は、本統に獨立と、品位との保證を得たのである。若し一生獨身で居るならば、自由に其の財産を處理することが出来る。若し結婚しやうと思へば、夫權の爲に、一半を失つて了ふけれども、併し先づ第一

自分の承知の上である。且人は道徳的に、其の意志を壓することが出来るとしても、強て結婚せしむるなどのことは、出来ぬやうになつた。又風俗も漸次法律の如く、此種の壓制を禁するやうになつて來たのである。それに其の嫁資の爲に、婚姻の時、幅が利けるから、之が爲に、一種の平等を主張することが出来、醜婦でも、多少威張れると云ふ譯である。夫權の如きも、亦殆ど其性を變じたと言つて差支ない。當初には、婦人を蔑みして、殆ど根本的に、無資格の如く視做すを目的としたものであつたが、今日では、寧ろ妻を擁護し、妻と同時に、子供及び家族を擁護し、其の弱きを扶け、其の無經驗の爲に、危きに陥るを豫防するを以て、目的とするやうになつたのである。

妙なことではあるが、女子を民法的に失墜せしむるのは、殆ど結婚の一事に止まるやうになつた。何となれば結婚以外のことなれば、女でも商法を營むことも、銀行を支配することも、法廷に出て自他の爲に、辯護することまでも出来、尙其上滿拾五歳には、結婚するにも、二十一歳からならば、父母の承諾をも要せぬやうになることが出来たのは、男子にも優したる特典と云はね

ばならぬ。乍然一たび結婚すれば、良人の許可がなければ、何も爲ることが出来ぬやうになつた。進上物をも贈與物をも受けることが出来ぬやうになつた。是れは實に恐ろしい壓制の夫權と云はねばならぬ。是れでは妻は最早一生其の權内を脱することが出来なくなつて了ふ。

勿論是れは、一半は家庭の組織にも關することであるから、妻が何も出来ぬやうになつたとて、或一部の婦人の如く、悪く言ふ譯ではないが、然し事實を言へば、夫婦其人を得て、善い家庭なれば、弊害は大抵之なく、あつたところで、忍ばれぬことはないが、不幸にして、善良なる婦人若くは中流の婦人が、マラヌ男と結婚するやうなことになる、實に可哀相である。殆ど夫の所有物の如くなつて了ふ。夫は之に働きを強ふことも出来れば、其の儲け得た所のものを飲食することも出来、其の家庭を滅茶々にすることまで出来る。余は専門家でないから、此の問題には、詳しく通曉して居らぬけれども、何か改良の道があるまいかと思ふ。結婚を誤つた婦人、丁年未滿の女子、又は貧乏人の娘などに關する事に就ては、何か改良の道がありさうなものである。

兎に角此點に就て、我國の文明は、進歩の極點に達したと云はれぬ事は、誰も疑はぬ所である。

然し此事は女子將來の運命及び其の社會的目的を論ずるに當り、女權回復問題を研究する條章に於て、又復た之を詳く論ずることとし、今は唯過去の史的事實を、簡單に研究し、今日の如き女性の性格に就て、其の参照すべき所を明にせんと務めたまでである。

女子從來の社會的境遇の影響

婦人が長い年月の間、取扱はれた方法は、其の知識的、及び其の道德的、心性に、尠なからぬ影響を及ぼした事は、疑を容る可からざる所である。最初の性質如何に拘らず、長い年月の間には、遺傳に依つて、何う成る可きかをも、知る能はざるにあらずである。

女兒は其母からばかり、心性を承繼ぐものでないから、遺傳のみが、其の原因でないとも云つても、既得の性格は、多く遺傳に依つて定まるもので、夫より以後は、淘汰と教育との業である。教育は女子を人の望む儘に育て、其性に

必須的と視做される特性を習得せしむるのであるし、淘汰は矢張り男子の眼から見て、其の要る所の婦人に、あらま欲しと思ふ所の特性を著しく發揮せしめんとするものである。

然らば之が爲に、如何なる特性が生じて来るべきか、又特性と共に如何なる缺點が出て来るべきであるかと云ふに、先づ身體に取つては、一種の弱質、即ち其の坐職的生活に依つて、筋肉が弱く、身體の發達が充分でない事である。次に心性に取つては、内政的生活と家事的用務との嗜好、遠慮勝にして、勇氣に乏しき事、其の意志も忍ぶ方面に強くして、企る方面に弱き事、思念が緻密にして、小事細事を好む事、何事も男の意志次第であると云ふ所より、之に氣に入られんと務むる事、力のある主人に對して、聽從、屈服、主人の必念を推測するに堪能なる事、主人が餘り嚴酷に過ぐれば、之を欺くに妙を得て居る事、利害の關係あるときは、少くとも己の心情を隠すに、巧妙なる事等、是れ實に女子の性格中に、必ず認め得べき性情である。生存競争場裡に立ッて、社交的防禦を計らんとするならば、必ず此種の武器を取るに相違ない。

尙知識上の方面より見れば、閨門深く鎖され、若くは封建時代の別業などに、幽居せる婦人に於て、何故公私の事務に、忙殺せられて居る男子と、殆ど同じく知的能力の發達を見ることを得るか、と云ふに、それは一生輕侮と、阿諛との間に生活したるが故に、代々遺傳的愚鈍の生を送らなかつたとするならば、其の淺薄なる知慮を著しく發展せしめ、記憶の如き、類化適應の能力のみ、養成したる結果である。推理力總合力の如き、深遠高崇なるものは、比較的發達しない。昔から男子は、餘り學問のある婦人を愛さなかつた。餘り知慧の深過ぎる婦人をも、好まなかつた。惟ふに今日でも、務めて婦人を愚にする方であらう。餘り利巧になると、馬鹿にする傾きがある。

乍然何うして婦人は馬鹿正直の者で、眞正の自治的精神がなく、知識的及び道義的人格が缺如して居るのであらうか、男子は又長い年月の間、婦人永遠の恨事とするやうな輿論を作り、實を言へば、罪逆なる輿論で、男は女に對しては、何を爲ても不可なしとし、女の弱質をも顧みずして、之を欺く者を褒め、之が犠牲になる者を嘲るやうな、罪な業をなしたものであらうかと云ふ。

に、何事も聽従と遠慮とを、唯一の定規として教へ、個性的理知に向つては、殆ど何等の教ふる所もない場合に於て、人前を憚ると云ふことさへもなくなつて了へば、此の如き極端の弊害に、陥ると云ふことは、何も怪む可き事もないではあるまいか。

然し今日は是れだけ語つて足りるとして置かう、女子の弱質缺點は、一つをも洩さず掲げた積である。ケレども過酷に筆誅した所は一つもない。余は嚴酷なる判官となる意志はなく、唯明快なる觀察者たらんと欲するのみである。余は過去の史的事象を研究した結果、寧ろ婦人女子に同情と尊敬の心を有し、何故長き歲月の間、人が之に尊敬を拂はなかつたのであらうかと怪む者である。婦人は如何なる境遇に閉込められても、又其の境遇を脱しやうと思つても、多少尊敬を拂はしむる権利がある。若も男子にして此の如き苦境に際したならば、果して如何にして脱せんとするであらうか。此等の事を考へた日には、グリュム氏の言つた通り、婦人の事を悪く言ふどころか、寧ろ婦人は、概して男子よりも、善良の性質の者であると謂はねばならぬ。

少くとも女子には、特別なる發動力あるを認めて、其の法律上の境遇を改良したならば、今迄抑付けられて居つた特性を發揮して、社會の公益に資する所、尠なからぬであらうと云はねばならぬ。そは兎も角吾人の理想とする所を、過去に求むると云ふことは、開れなきことである。正義と愛譽の缺如して居つた時代に、婦人が充分其の心性を發展したと云ふ理窟は、ある可き筈がない。

第三章 女子の生理的問題

男女の生理的優劣

余は前章に於て、過去に於ける女子の法律的境遇の一斑を叙説して、其の心性に、如何なる習癖を得たかを、簡單に指示したのである。此の習癖は、矯正することが出来ぬと云ふのではない。何となれば、時代の作りたるものは時

代が之を破ることの出来るものである。但だ其の習癖は、因襲の久しき、中々深く浸入して居るから、之を無視することが出来ぬと云ふだけの話である。然しながら此の境遇と雖、原因なきものではなかつた、即ち是れも女子の性質、其の人體組織、其の本有的作用、及び其の必須的天分に係つて居るものである。性は習よりも尙深しと云ふ語を、記憶しなければならぬ。余は今本章に於て、此の要因を研究せんとするのである。

概して言へば、女子の性及び之に附屬して居るものが、女子の境遇をして、不利ならしめ、從屬的ならしめたのである。余は劣等ならしめたとは云はぬ、何となれば、女子は道義的に、男子よりも劣等ではない、或點に於ては、寧ろ優勝の所もある。

本章研究する所の問題は、他の動物も、矢張り其の通りであるかを究むるのではない、學識のある婦人、例へばベツケル嬢の如き、英國に於て女子の境遇を高めるが爲に、勇ましくも妙な運動を經始し、犬又は馬などに於て、牝は牡に優るとも、劣つて居らぬ、少くも同等であることを證明するが爲に、徒勞にも

畢生の心血を濺ぎ、競馬の表を調べて、牝馬と牡馬との勝利數を比較しつゝ、其の同等なるを證論し、又は狩獵に於て、牝犬の嗅覺、健脚、知慧等の點に於て、牡犬に劣る所なきを證明したるものもあるけれども、余は茲に於て、如此な研究をする積ではない、就中家畜を、人爲に馴致して論ずるが如き、到底證據にはならぬ。自然の状態に於ては、牝獸必ずしも牡獸に劣つて居る事、著しいと云はれぬけれども、多くは先づ劣等の方である。設令優つて居るとした所で、それが人間男女に當嵌めて、證據になるものとも思はれぬ、何となれば、其の出産、其の乳養の方法等、人獸自ら別がある。人間の子は、長い間特別注意を要するもので、其の初めて生れ落るときには、動物中、最も虚弱無能なるものである。

男女の解剖的相違點

男女の解剖的相違點の細目に至つては、就中此種の相異の勢力問題に至つては、人類學者の説が一致して居らぬ。マヌウリエ、ヅワリギの二氏は、此の問題を研究した最近の學者であるが、プロカ及びトビナールの二氏と、多少

其説を異にして、寧ろ女子に肩を持つ方である。何れにしても、全般に就て考ふるときは、女子の身體組織は、男子よりも堅牢でなく、其の筋骨も逞しくなく、又其の抵抗力も強くないと云ふ點に至つては、萬口皆一致する所である。ドクトル、ヅワリギ氏の言に據れば、此は一切の器官、一切の構造、及び一切の作用に及んで居ると云ふことである。余は今其中の重要なものをのみ掲ぐる積である。

先づ女子の身長は、凡ての種族に於て短小である。此は搖籃の時より然うである。男の兒は最早大きい、何うしても丈が高い、大人になつてからは、平均十センチメートルだけ勝つて居る。

次に體重に就ても、殆ど同様の相違がある。是れ亦子供の時からである。大人になつてからは、男の方が女よりも平均五キロだけ重い。就中女の骨組が軽い、絶對的にしても、又體重に比しても、其の通りである。骨が軽く且弱いばかりでなく、其の化學的組織(化合)に就いても然うらしい筋肉の附着して居る所も、餘り發達して居らぬ。大腿骨の如きも、男よりは斜形になつて

居つて、身動きするには、明に不都合な構造を示して居る。筋肉も男子に比して、三分の一位容積も尠なく、精力も尠ない。随て力量も運動も共に弱く、且鈍い。女子に於て勝つて居る所のものは、脂肪組織だけである。蓋し之が爲に圓ぼちやで、姿色が優れて見えるのである。是れは女性に著しき特性である。足の形は、文明を誇れる女子の間に、屢々稱讃せらるゝので、自然美しいと思つて居るけれども、實際は然うでない。女子の足は、平均すれば、寧ろ平たい方で、餘りそつて居らぬ。寧ろ劣等種族の足に近い。

眼を轉じて内臓を観察するに、女の胸は男の胸よりも小さく且軽い(平均三百グラムの代りに、二百四十グラム位)之に由つて觀れば、胸の容積は愛情の分量と關係ないやうに思はれる。其の代りに、脈搏の速度が餘程早い、一分間に十二、二十四搏位早い(凡ての高等動物に於ては、其の通りである)。獅子の牡は六十搏、牝は六十八搏、牡牛は四十六搏、牝牛は六十六搏、牡羊は六十三搏、牝羊は八十搏、血液は勿論分量も尠く、品質も違つて居る。鹽分が著しく尠い、[海鹽まで其の通りである。牡鶏は牝鶏よりも鹽氣がある]、血球素も少量にし

て、赤血球が割合に少なく、白血球が割合に多い。
 呼吸器 胸量肺量共に小さい、呼吸の速度は大であるけれども、化學的作
 用が激しくない。何となれば酸素の吸収と、炭酸の放出と、二者共に少量であ
 る。随て體温も女は尠い方である。消化器の食物の分量に對する要求も尠い
 が、空腹を感ずることが速かである。

頭腦 は如何であるかと云ふに、形狀の相異は、専門家には一見して分る
 さうだが、それは姑く措き、女の腦蓋は、何れの年齢に於ても、男ののよりも小
 さい。此は文明國民に就て考ふれば考ふる程然うである。何となれば男の腦
 蓋は、人文の進歩と共に増大になるけれども、女の腦蓋は、殆ど解らない。文明
 の今日に於ける女性の腦蓋は、歴史以前の姉妹のそれと、左程容積にかはつ
 た所はないと云ふ。然し容積の少ないと云ふのは、通常分量の少ないと云ふ
 意味である。女の頭腦は、平均すれば容積も重量も、共に男のより尠ない。女子
 の方の重量は、一一〇〇グラム乃至一三〇〇グラムであるが、男子の方は一
 二〇〇グラム乃至一四〇〇グラムである。それでも若し比較的重量が等し

いならば考物である。茲に比較的重量と云ふのは、身體全體の重量に比して
 云ふのであるが、ドクトル、マヌウリエ氏は此説に同感であると見え、此の比
 較的重量の影響する所大なる事實を主唱し、禽獸の中に小さくても利巧な
 ものあるのは、全く其の腦髓が、體重に比して、寧ろ大なるが爲であると曰つ
 たが、ドクトル、ヅワリギ氏は、之を承認しない。氏の説に據れば此の比較説も、
 尙未だ女子に取りては不利だと云ふ。女子の腦重は、其の體重に比して、
 過ぎない。然るに男子の腦重は、 $\frac{1}{10}$ である。此の相異は、年齢と共に益々大
 きくなる。今其の相異數を掲ぐれば、二十一歳乃至三十歳の男子に就て調べ
 るときには、百に對する七だけに過ぎぬが、三十歳から四十歳までの間に於
 ては、百に對する十一である云々と。相異は尙其の形狀にも在る。ドクトル、
 マヌウリエ氏のみ、此點に就て多少疑を挾んで居る。氏は前頭葉の發達に於
 ては、女子は男子に譲らぬと云ふことを證明せんと務めつゝある。他の人類
 學者は、大抵皆一致して曰ふには、女子の腦は、一層滑かであるが、其の回轉が
 餘り美しくなく、又餘り豊かでなく、其の曲折も餘り明截でなく、又餘り深く

はない、前頭葉は知識の宿る所と云はれるが、情感的作用の在る所とする後頭葉よりも發達して居らぬ、尙腦髓、腦漿及び腦血の灌漑なども、女子に於ては凡て男子よりも薄く、乏しく、且不充分であると云ふ、前頭部に注ぐ血管は、後頭部に注ぐ血管よりも、口径が狭い、男子に於ては、丁度反對である云々と、是れ實に多くの人類學者の、殆ど相一致する所である。

此の如く女子の肩を持たぬ諸説に對しては、先づ第一に、此等は果して皆證據ある説であるか、否かを究めて見なければならぬ、語を換へて言へば、此等は果して充分嚴密に觀察した結果であるか、否かを究めて見なければならぬ譯であるが、然し余は今茲に事實に事實を重ね、調査に調査を加へて、各々相反對せしめると云ふことも出来ぬから、姑く右の諸説に服するより外、仕方がない、又實を言へば、此等の諸説は、概して真らしく思はれる、怪む可く疑ふ可き點も認められない、何となれば身長、短き事、體重の輕き事、血液の少量なる事、呼吸の活動の鈍き事、頭腦の發達、及び頭腦中に於ける心靈の高、等作用に資する部分の發達の遲滞せる事等、皆是れ壓屈された、座職的生活

の影響結果に外ならぬ。

活動の適能を缺き、筋骨の力に乏しいとして、何も別段怪む可き譯はない、數百千年以來、此の方面に従事せしめられなかつたのである、機能機關は、之を働かせぬ時は、其の容積をも、其の重量をも、又其の運用力をも減少するのは、自然の勢である、生物學の原則である、此の一事を考へても、前記の相違點を、解釋するに餘師ありと思ふ。

女性の生理的特性

然し茲に前記の相違點よりも、尙一層深甚にして、又尙一層主要なるものがある、之に就ては異議異論のある可き筈がない。

此は簡單の一語に約することも出来るが、然し其の結果は、身體にも心靈にも關し、影響する所廣く且遠い、女は矢張り女で、其の本性母的作用の爲に組織せられ、是れが女の眞體である、と云ふ丈の語に縮まるので、二語を以て之を約すれば、女性と母性との作用、即ち是である、是に於て乎懷妊と乳養と云ふ、女子特有の作用が出て来る、一切の形體的、生理的及び心靈的特性は、

皆之に係り、若くは之に屬して、女子固有の性質を、尙明確に組成して、拒否することの出来ぬやうにする。此事は女と母と云ふ普通の常識の言を掲げて、萬事皆緒に就て了ふ。

女の劣つて居ること(女子一切の劣等性)も、之より出で、又女の優つて居ること(女子一切の優勝點)も、此に含まれて居る。何となれば、母たる女を尊敬せず、に居られやうか、實際母となつて居る婦人としては、尙更の事であるが、母となり得べき女子としても、尊敬せず、に之を語るとは、逆も出来ぬ。之を考ふれば、男女の不平等の事すらも、之を語ることが出来ぬ筈である。其譯は社會の上より立言しても、家庭を繼げ、國民を繼げ、種族を繼げるほど大切な事は又とない。然し其の代りに、母と云ふ性は、女子を恐ろしき重味で壓して、逆も生存競争には堪へしめない。是に於て乎、否でも應でも、男子の權内に服し、男子の保護を仰がねばならぬ。是れは實際(現在)母となつて居る婦人ばかりでなく、母となり得べき女子でも然りである。

勿論世には、女人の此弱性を、面白半分に極言したり、又は女尊主義を主張

しても、實際は義侠の精神より出るものと限らぬものあるを、記憶して置かねばならぬ。例へば健全なる婦人ならば、容易く忍び得べき苦境を、故さら誇大に吹立て、表面上、女子の境遇の如何にも悲惨なるに、同情を寄せて居るらしく装ふ論者がある。此等は婦人の方で、餘り信任を置けぬ者と視做さねばならぬ。さりとて、ミシユレの如く、婦人とさへ見れば、青春妙齡の花盛りの時でも、直に病人呼りしたり、又はドクトル、シカールの如く、女性の發達には、凡ての狂的病原が含まれ、且伴れて居ると云ふやうに描寫したりするが如き、餘り惡罵し過ぎると云はねばならぬ。婦人の特性を描くに當りては、阿諛的の文字も、惡罵的の言辭も、共に中正を逸したるものとして、排斥する筈である。成程女性には、前後二回の恐慌期とも云ふ可きものがある。十二歳から十四五歳時分に一度、又四十五六歳時分にも一度、特別の危険ある、弱質、缺點、輕佻、浮薄等の徵候續々として發現し、身體も纖弱にして抵抗の力なく、品性も平均を失つて、頗る險呑な時期あることは、余も亦之を否定しない。乍然此等の恐慌は、不健全なる境遇と、不規律なる生活とによつて、重るこ

とあつても、心身の衛生を重んじ、光明に接觸し、大氣を呼吸して、平居規律的生活を送るときは、珍らしく平癒するものである。女と云ふものは、老幼を問はず、其の性に適した事業ならば、如何なる疲勞にも堪へ得る力がある。病人の枕頭には、男子も及ばぬ堪忍と親切とを、立派に示すものである。又一たび自家固有の危険を脱した曉には、健康に於ても、壽命に於ても、決して男子に譲らない。それは健康な女としても、其が一生中の好時期に當り、多少危険なる弱質に捕獲せらるゝことなきにしもあらずであるが、然し此の如きは、男子にも免れ難き通患である。如何にも女には、身體疲勞して無能に陥り、殆ど半病的衰狀を示し、神経の過敏なるが爲に、一小鎖事のためにも直ぐ激し、其の結果として、殆ど必然的に、悲哀と憂慮と恐怖との心的狀態を伴ふ時期があつて、避けることの出来ぬのは、甚だなげかばしい事といはねばならぬ。

此の厄難は母から娘に傳るに従つて、益々病態を増し、命數を縮めるやうになる。統計表によつて調べて見るに、女の子が男の兒よりも、少しく抵抗力に富み、幼年の内には、死する者が比較的に少いと云つても、是れはホンの一

時の特典にして、それは頓て他の方面から償れて了ふ。即ち此の厄難は、其の一生に始終随伴して、如何に休養しても、如何に注意しても、又如何に利便の境遇に居つても、免れることが出来なくなつて了ふが、是れが勞働社會に至ると、尙一層著しくなり、之が爲に非常の痛苦を覺ゆるのである。何となれば此種の厄難は、工場製造所等の勞苦と共に、益々女子の境遇を悲惨ならしむるからである。

是を以て里昂の絹職工の共濟會社と、伊太利の共濟會社の調査報告に據れば、四十五歳乃至五十歳までは、女工の病に罹る數は、男子の倍半に均しく、女工の死する者に至つては、三倍以上に達すると云ふ。何となれば女工に在つては百人に對する十人なれば、男子は百人に就て三人だけに過ぎないと云ふことである。實を言へば、余は此の如き經濟上の問題には、不案内であるから、人の自由に任せて置くが、但だ婦人の勞働を、財政上の利害の勝手に打任せて置く、殺人的制度を恕す可きものとして、視ることは、人情の上よりして、逆も出来ぬ。余は此點に就き、ハクスレーの名言に敬服する者である。曰く

母となることが、婦人の運命なりとすれば、設令未だ實際に母となり居らずとするも、婦人に取りては、生存競争に於て、一種の恐る可き過勞たらん然りと雖若し果して此の如くなりとせば、男子の義務は、之を助けて、其の重荷を軽減するに在り、少くとも他の重荷の來りて、之を壓するを妨げ、不義の來りて、生來の不平等をして、益す深からしむるを妨ぐるに在り」と。

女性の生理的結果

然し、尙一步を進めて、本章の主眼なる問題に、尙深く斬込まなければならぬ。

通常の場合に、又最も好適の場合に於て、何故女性の身體が、心性に影響を及ぼし、女子の精神と性格とを、司配するかと云ふのが、本章の要旨である。

スペンセルの説に據れば、天は婦人をして、其の母となるの職責に準備せしめん爲、其の個性的發達を、尙早く停歇して、其の職責に必要とする力の、大貯蓄をなさしむるものである。之が爲に、其の成長發達が早く止み、其の身長も低く、身體機關は、全體に其の發達が尠いのである。營養力のみが、尙ほ大に

活動して居るが、是れは悉く種族を傳ふる方面に、利用せらるゝのである。

是に於て乎、先づ第一に其の結果として、女の子は男の子よりも、早く其の知識が熟するのである。是れは拒否すべからざる事實である。最早十五六歳になると、女の子の早熟は、甚しいもので、同年の男の子と、天地の相違がある。それは眞面目なる事、鋭敏なる事、速に理會する事、善く判斷する事等に於て顯はれ、少くも實際の事柄、具體的の事柄に於て然うである。男の子よりも、早く人生を解し、必要な場合には、生活の道に早く應ずることを知つて居る。例へば斯る年頃の女の子が、母の手傳をするとか、若くは母に代つて働くなどの場合には、如何に巧妙に立廻つて働くか、誰でも見て感心しないものはない。

乍然此の特長は、直に己の身の缺損に變じて了ふ。此種の早熟は、取りも直さず發達の停止となるのである。頭腦も他の機官も、其の發展を停歇して了ふ。女子は早く己が進歩發達の頂上に達して了ふが、其の究極の近きは、正しく是れ其の進歩の限られて居る證據である。此の基礎的事實は、世の諷刺論

者及び悪戯記者等の面白半分に通言極論しつゝある所のものである。シャ
ンフォールの言に曰く「婦人は大なる子供なり云々」と、シヨペンハウエルも
亦曰く「男子の理性及び知識は、二十八歳に達せざれば、圓満の發達を遂げざ
れども、女子は之に反して、十八歳にして、早や既に精神の成熟期に達す。是を
以て始終十八歳だけの理智をのみ有して、それ以上に達すること能はず。之
が爲に婦人は一生涯大なる子供なり」と。多くの文士連も亦皆之と同感であ
る。マダム、ヅ、レムザも、ルーソーも、殆ど同じ言を吐いた。ジヨリ氏の言にも「少
女が青春妙齡の女子となりても、其の顔色をも、又其の傾癖をも變せざれど
も、幼童の少壯に達するや、其の變化は一種の著明なる革命なり。如何なる學
問に於ても、女子は其の豫測する所を、悉く履行することは甚だ罕なり」と曰
つた。現代の某小説家も曰く「少女は、其の始むる時に當りては、實に珍らしき
發達をなせども、頓てガラリと崩れ、茲に停留して進まず。蓋し其の何故なる
を知る能はず」と。處が今は其の何故なるかを知るに難からずである。それは
女であるからで、女としては最早男の才能をも、叢をも有つことが出来ぬの
である。

斯く言へばとて、女子は女子としての理想を、現實にすることが出来ぬと
云ふ譯ではない。男子が男子としての理想を、實行するならば、女子も亦女子
としての理想を、實行するに於て、何の差支もない。女子は發達を止められた
る。男子に過ぎずなどの言は、不條理千萬の言と云はねばならぬ。
乍然婦人を子供呼りするものが可笑しいと云つても、婦人は男子よりも、心
がイツモ若く見えて、情も熱いと云ふのは、婦人の逆鱗に觸るゝことではな
からうと思ふ。婦人の感情は、實に熱烈なるもので、切實なる利害の關係ある
ときには、之を隠すことを知つて居るけれども、然し之を拒否するやうなこ
とはしない。蓋し是れ婦人の婦人たる特性である。然しながら此の如き己の
特性を何故隠蔽せんとするを務むるかと云ふことは、研究に價する問題で
ある。左に少しく解説して見やう。

抑々種族保存と云ふことは、萬物の目的にして、之には機官及び作用のみ
が、必要であるばかりでなく、之に適切の本能と云ふものも、亦必要である。父

的。本。能。と。云。ふ。も。の。が。あ。る。け。れ。ど。も。母。的。本。能。程。切。實。で。な。く。又。專。務。的。で。な。い。男は天性自然に保護者であるが母は特別稚兒の弱質に適合して之と密接の關係を有つて居る此の愛情的性癖には之に適當する精神的性癖も加つて居るので彼の稚兒の要求を推測する直觀の如きは即ち是で言に發せざる所を察知する感能である此の感能は稚兒に對する時にのみ限るものではなく婦人一般の操行にも行渡つて居るから婦人が深く愛するときにはイツモ多少母情的に愛するのである。

婦人は子供に對しては強く且保護的であるけれども男子に對しては弱くして且其の保護を要求するものである其の理由を探ることは六箇敷くない實は男子の支持を求め且保つに適切なる能才と精神的性癖とを充分備へて居る婦人のみ存續して子孫を遺すことが出来るものである氣に入らんとする要求氣に入らんとする能才斯道に成効せんと欲する志望此の方面に於ける熱烈なる競争等皆相互に貫聯して居るので勸誘術の如きも亦其中に加入すべきである。

他の方面より見るに獨立不羈の氣象に富んで居る婦人若くは制壓的權利の侮辱を餘り感知し易くして直に怨恨の情を示さんとするが如き婦人は確に之が爲に社交的愛着を減少して了ふ是に由て觀ても一種の克己力一種の自制術若くは矯情術とでも云ふ可きものが婦人を擁護するに必要なる性癖であることが知れる述べて爰に臻れば前記の若やかなる心熱烈なる感情を有つて居りながら切實なる利害問題の關するときは何故之を隠蔽せんと務むるかと云ふことは一目瞭然となる。

之と同じく婦人は己の苦樂の係つて居る男子の感情及び愛憎等を絶えず推測せんと務めつゝあるから此點に於ても彼の稚兒に對するときに使用する直觀即ち一種の推測を應用することは自然の勢である男子の一言一行を見て其の喜怒哀憎の近きに在るを推測するのは婦人に取っては往々其の死活問題である此の中心秘密の情を探る直觀は天然の状態に在るときは純然たる本能的であるけれども之を修養練習するときには文明國婦人の珍らしき才能となり其の應用極めて廣且大なるものである。

右の性癖に比すれば、少しく殺風景にして、優美性を缺いて居る職を免れぬが、然し婦人一般に通じて見受けらるゝ性がある。之は愛力性とでも稱すべし。性質である。其の力の種類は、境遇、文野の程度及び人に依つて種々様々であるけれども、男子の方から一種の力の顯はるゝとき、女子は之に愛戀の情を寄せることは、確かなる事實である。即ち其力の發現が、女子の愛情を引く動因となるのである。女によつて體力を慕ふ者もあれば、知力を愛する者もあるが、兎に角、慕力愛力の心構は、凡ての婦人に在つて、上流社會の優美なる婦人でも、實力のある人をのみ、良人に持ちたいと思ふ。女子に對つて、此の性癖のあるを、譴責するのは、無理と云はねばならぬ。何となれば、此の性癖に依つて、自分も子供も、共に支へられて居るのである。唯人文の進歩するに従つて、婦人をして、益々知力と徳力とを重んずるやうに、教導して行くを以て足れりとする。多くの婦人が、酷遇、虐待を、左程に恐れぬのは、畢竟此の慕力性の在るが爲である。女が酷虐なる待遇を恐れぬと云ふのは、其の纖弱、優美なる性に似合ぬやうに思はれて、如何にも奇怪千萬に見えるけれども、然し是

れは實際である。確かな事である。婦人に依つては、揆たれることを好む者なきにしもあらずである。良人に太く打たれた後、其の交情、尙一層濃密を加ふることがある。却て意氣地のない男から、如何に優遇、款待されても、餘り難有がらぬ者である。就中前者が、格氣で激しく打ち、後者が冷淡で優柔不斷なる時には、尙更然うである。

スペインセルは、此の強力を尊崇する。性癖に、尙又一の心情を認め、た。宗教心。即ち是である。此の心情は、何れの國、何れの時代に於ても、男子より寧ろ婦人に多く認めらるゝのである。是れは何の爲であるかと云ふに、愚見に據れば、是れは婦人と云ふものは、男子よりも情的信念が厚くして、心身上の補助を要求する心も、恐怖、希望、哀願、待望、感知、祈求等の習慣も、男子に比して尙一層深い爲であらうと思ふ。此の問題は、尙一層詳しく究盡する必要があるけれども、茲には別段宗教問題を研究する意はないから、余は唯何れにしても、此の感情は、其の根源、女性の深甚なる心性に基因して居ることだけを記憶して、人爲的教育の結果であるなどと云ふ、皮相淺薄なる謬論に陥らぬやうに、

注意して置くを以て足れりとする。
 権利及び其の一切の形式表象等を尊重する心も亦婦人には男子よりも深くして、是れは服従の本能と、自治的精神の缺乏して居る結果の如く、見做されて居るが、左もあるべき事である。概して言へば、是れも亦一種の保存主義と謂つて差支ない。女子は常に國風家傳などの保存者であることは、疑なき所である。女子は又天性自然に、男子よりも官權黨、若くは國權黨、政府黨であることも、疑なき所である。而して此種の性癖は、女子が自然的に、又遺傳的に、從屬依頼の心あるに歸す可きこと、是れ亦疑を容る可からざる所である。政權は之を服従せしめ、國權の機關は其の獨立不羈の志念を、悉く奪取つて了ふのである。女子には曾て抽象的權利の觀念なく、又純乎たる正義の意識もなくして、男子の心次第、方次第に司配されて居る者であつて見れば、何うして自由主義などを取ることが出來やうか、女子に取りては、暴力と御意と眷顧とは、其の大法であると言つて差支ない。

女子從屬の生理的理由及其品評

余は女性の研究に、随分深く歩を進めたと思ふ。余は既に女子は何故又如何にして、男子に從屬せしめられたかを研究した。前章には、從屬の事實を示した。此の從屬は、往々極端に陥り、往々無理非道なりしが、最後に根本的改革が起り、法律までも改正せられ、一種の革命によつて、將來希望す可き所と、危惧す可き所とあるに至らしめたと言ふ事柄をも叙説したが、茲には、此の從屬の事實の、生物的理由を尋究しなければならぬ。前に述べた所は、女子は古來何故從屬せしめられたものであるか、又如何なる意味、如何なる程度に於て、從屬しなければならぬか、將來も永く從屬すべきものにして、否らざれば古來傳承し來れる秩序ばかりでなく、事物の性質までも改變しなければならぬと云ふ事柄であつたが、今茲には、此種の改變は、果して希望すべきものであるかを究めて見なければならぬが、之には打勝つことの出來ぬ困難がある。此の困難は、女子の性質にも、其の組織、其の本能、及び其が一切の心的習性に於ても認めらるゝのである。

此の從屬と云ふことは、壓抑暴舉が附隨して居らぬときは、別に忌はしき

ものでない。是れは分業制度によつても改まらず、正義によつても和げられず、却て男女間の奇怪千萬なる競争によつて寧ろ甚しくなつて来て居る。男女と云へば、一致協力すべきもので、相互に格闘すべき筈のものではないのに、此の現象あるのは、實に恠むべきである。乍ら從屬は、別に壓屈的及び侮辱的のものではないから、人の見て以て耻とし、不快とすべき筈のものでない。從屬は正しく一致の内、に於ける區別である。全體の中にも支體の從屬と云ふものが必要である。如く、家庭に於ても、社會に於ても、之と同じ道理である。男女相互に打撃するとか、又は絶對的獨立自由を絶叫するやうな場合には、男女の從屬を矯正する道がない。家庭を亡ぼすより、外、仕方がない。是れ實に人間社會に取つて、由々敷き大事件にして、女子の幸福の爲にも、恐る可き禍害である。

果して然りとせば、吾人は禍害に禍害を加ふるやうな愚を學ばずして、天性の行ふ所を行ふ主義を取り、女子の性質の許す程度、及び範圍に於て之を改良する方針に出なければならぬ。此の範圍は、後條記す所によつて明にな

る如く、中々廣いものである。即ち明々地に言へば、女子教育を指すので、女子の運命を回復し、女子の境遇を高め、今迄永く放棄せられて居つた能力の許す限り、其の發達を計り、而も女子の優美性と貞淑の徳とを、毫も損せざる所の教育を指すのである。此の如き教育に依て、女子をして品位に於ても、理知に於ても、益々男子に接近せしめつゝ、男子の尊敬と愛慕とを得せしむるに足る可き者に養成することが出来る。吾人は無論此道に従事しなければならぬ。それには本章述ぶる所の女性の弱質をよく考へ、之を非難嘲笑する爲でなく、出來得る丈け、之を矯正し、其短を補ひ、其長を助けんが爲に、之を記憶して置く筈である。女子を堅實にし、強健にすることを憂慮する筈ではない。是れは家庭の爲である。社會の爲である。否、茲に盡瘁する男子それ自身の爲である。自分の配偶を教育するときは、自らの威嚴を損するものゝやうに思ふは、甚だ小膽の事である。女子も亦天命を忘れたならば、雷に大なる心得違たるのみならず、女子の女子たる所以を失つて了ふであらう。天は女子の本分をして、男子の本分の如くに完美ならしめたので、唯兩者の本分が同じで

ないといふ丈けの語である。女子にして男子と平等とならんとするが如きは、却て平等となり得可き點を失つて了ふであらう。又若し義をのみ絶叫して、愛を殺して了ふならば、先づ第一身自ら之が犠牲とならであらう。

第四章 少女婚期以前に於ける男女の

比較心理

天然と習性

男女兩性の比較心理は、婚期からでなければ、明瞭的確なる目的とならぬやうに思はれる。是を以て余の今茲に男女兩性の性癖、適能及び心的狀態等に對する比較研究なるものも、主として少年期の終から老年期の始までの間に往來して居るものと記憶して貰ひたい。少年期の終とは、十三四歳頃を指すので、女子に取りては青春期の始である。老年期の始とは、四十五歳乃至

五十歳位をす指ので、成熟圓滿の時期である。青春期以前は、男女共に後來出世の準備期に在り、成熟圓滿期以後は、過去の紀念追想期に在るのである。尤も少年期の終と云つても、國によつて違ふ。例へば埃及にては十歳瑞典には十八歳を以てするが如き相違がある。美容期及び多産期は、少年期の終が遅ければ遅ひ丈け、それ丈け長く繼續する。埃及あたりでは、最早三十歳以前にも終を告げて了ふ、同國にては、僅か繼續の間が二十年にも足らない。北國に至りては、五十歳少し以前に終を告げるから、三十年間も繼續する譯である。是に由て觀れば、可婚期の早熟を賀する理由はない。却て教育に依つて成る可く之を延ばさんが爲に、之を早むる性質のものを悉く排斥するやうに務めなければならぬ。

婚期以後の事は、茲に直接の關係がないから、姑く之を措き、婚期以前の事が、兒童教育上に、特別の關係があるから、之に就て少しく研究して見なければならぬ。茲に男女兩性を比較して研究するけれども、此の時分には、少年男女の知識的及び心性的相違は、比較的に甚だ微々たるものである。青年期に

入るときには、其の相違が著しく顯れるやうになる。乍然少年期に於ても、相違點が全く無いと云ふ譯ではない。仔細に之を檢點すれば、之を認むることが出来る。子供の地位が家庭に於て、漸次上進して來るに従つて、益々著しく見えるやうになる。西洋にて子供と云ふ語が、中性になつて居るのは、多少個中の眞理を示して居るやうに思はれる。天は搖籃の時から、少女の心及び精神を、男の兒の如く準備するものである。男女の相違點が、未だ毫も顯れぬ時分から、故さら之を探り立て、之を作らうとしたり、若くは少くも之を目立たしめやうとするのは、危険のこともある。今日我國の家庭に行はるゝが如き、子供の扱方にては、早くから男の兒を、一人前の男の如く、女の子を、一人前の婦人の如く取扱ふやうに、自然傾いて行くことは明かである。斯かれば服装から遊戯に至るまで、自然的相違點を目立たしめやうとするが上に、尙又人爲的方法をも加へ、子供の性格に於ける天然の業と、人爲の業とを區別することが出来ぬ程までになる。我國では、五歳から男女の區別を、明に目立たしめる。何となれば男の兒には、男らしい性格を附して、之を軍人の如くに取

扱ひ、玩弄品として與ふる所のものも、大鼓だとか、喇叭だとか、サーベル、鐵砲等、及び之に類する物を預ける。子供の之を見て喜ぶのは、確に其性の傾く所を示すには相違ないけれども、人爲を以ても、亦其の性の傾く方へ、促進すること、亦疑ふ可からざる事實である。女の子に對しても、亦同じく其性を助けて居る。雛人形だとか、針箱だとか、料理道具だとか、其他リボン、寶玉等、凡て女性に適する玩具を與へて居る。然し茲に天然と習性との區別を立てる必要あるかと云ふに、其の必要はなからうと思ふ。何となれば習性と云つても、一般に行き渡つて、何代も年を重ねて居るときには、天性と大した差はない。故に天然の上から、少女らしいと云つても、習性の上から、少女らしいと云つても、吾人の多く關する所にあらずである。此の如きは、學術上の問題で、今余の期する所に於ては、大なる關係はない。余の今茲に研究する所は、兎に角今日の少女である。但だ不明瞭の點があれば、之を揭示すれば、澤山である。又序でながら茲に附記して置きたい事は、(1)人爲的方法によつて、著明になるべき性格の多くは、半ば教育の結果に依つて、求められ、若くは著しくせられた

ものである事。(2)一性の特性の如くに視做すものでも、他性にも認められぬことはない、唯程度問題だけのことであると云ふ事即ち是である。

少女の外的特性

(1)少女の可動性

或時期、或場合に於ては、女の子でも、大抵は皆いたづらな子供の如く、視做すことが出来る。遊戯の如きも男の兒のものと同じにして居る、若くは共通せんことを希望して居る。ギョーゾー夫人も曰つた通り、如何なる女兒でも、少しく其の爲るが儘に打任せて置くならば、優美高尚なる遊戯よりも、八釜敷き遊戯を好まぬ者はない。利巧なお嬢様でも、閨巷の梳白小僧の悪戯を羨まじさうに眺めて居る。要するに此の時分には、要動性が男女兩性に共通する基本的性質である。之と同じく男の兒の方でも、女の子の玩具(例へば人形等)を以て遊ぶを好まぬ者は尠ない。是れは先づ第一には、可交性、次に模倣性、一言以て之を蔽へば、遊戯を好む要求が、男女兩性の子供に共通であるが爲である。然し結局平均して言へば、男の兒と女の子の遊戯は、別になつて居るのが普

通であるから、女の子にして、男の兒の遊戯を永く愛好すれば、男の兒見たやうだと云ひ、男の兒にして、女の子の玩具を愛玩すれば、女の子のやうだと云ふ。されば其中にも、何等か自然的の區劃があつて、共通し難き點のあることを認めなければならぬ。

余は今茲には、男女子供の形體的異點、例へば身長、體重、頭腦の容積等、出産の當時より相異つて居る點に就て、再び詳説する積はない。前章に於いて此事に就て、充分説き盡したと思ふ。今茲に掲ぐる所は、半ば形體的、半ば心靈的相異點である。

運動は其量に於て違はぬならば、其品に於て異つて居る。男の兒は大袈裟な遊びをする。轉地的若くは更所的運動とでも稱すべきものゝ性能を、餘分に有つて居る。例へば競争、飛躍、又は大袈裟の運動等即ち是である。女兒の方は、短縮的、擬容的、若くは表情的運動の感能が多い。パプカルベンチエ夫人の話によれば、同じ年頃の子供に就て考ふるに、觸覺的技巧に於ては、女の子が勝れ、建設的手業に於ては、男の兒が勝つて居ると云ふことである。紙などを

折るときにも、男の兒の折つたのは、其の折目が一層堅く、其の角が一層確りして居ると云ふ。女の子の業は、大抵皆優柔不斷の所があつて、其手の堅實ならぬ所、其の精神の決定的ならぬ所を示して居るけれども、男の兒の業となると、誰の目にも一見して解るとは、同夫人の語る所である。之が爲か知らぬが、人の常に申す如く、男の兒は女の子よりも騒々敷い、其の運動が強く、激しく、大袈裟であるが、其の代り優しい所がない。乍然他の一方より考ふるに、女の子も亦矢張り女的に騒々敷い、之を自由に放任して置くときには、随分男の兒にも負けぬ亂暴を働くものである。某婦人が「ボンマルセ」の店員に向つて、自分の娘が着物などを破り汚すこと、男の兒にも劣らぬと語つたところが、店員の曰ふには、それは普通一般の事です、凡ての婦人方が皆然う申します云々と、是に由て觀ると、男の兒が果して女の子よりも亂暴であるかは、中々容易に決定せられぬやうに思はれる。但だ通常人は、男の方が亂暴であると云ふ。

それは兎も角も、多少の例外を除き、男の兒の方が、一層軍人らしく、一層喧囂

を好み、一層強い遊びを愛し、又性質上、一層攻戰的、硬強的、及び統御的であることは、疑ふ可からざる事實である。是れは女の子の方は、司配したい心がなからと云ふ譯ではない、女の子とても、自分の小意志を通して、自分の働きを目立たしめたく思うて居る。然し常には、其の方法が違ふ。其の發現が一層穩和的である。此點に就て、吾同僚余に語つて曰く、ストラスプールの公園に、一の大なる檻あり、檻内に動物群を成せり、少女來るときは、猫撫聲にて之を呼びつゝ、パンを與ふ、同じ年頃の小僧來るときは、土石を捨て之を投ずと、此言裡には、男女兒童の性格が、歴然として顯れて居る。

(2) 少女の饒舌性

女の子は常に多言饒舌である。此の事實は普通一般の事であると見え、ドクトル、セルウキン氏は、此の事實から打算して、吃ることが男の兒に一層頻繁であると、妙な事實を解説したのである。吃ることから比例を立て、見るに、女の子一人に付て、男の兒十人もあると云ふ。前に述べた所に依れば、却て之と反對の事實があるべきやうに思はれる。何となれば、男の兒の方が、一層

堅實な又一層決定的の運動をする。云ふれば口舌を動かす點に於ても、他の運動と同じであるべき筈である。凡て口舌の病の優柔不斷より出るもの例へば誤音の失、g、gと云ふべきをzと云ふが如し、又は發音の誤、j、gの發音をzの如く發音し、JungeをZunzaに發音するが如し等は、寧ろ女の子の方に多い。然し吃ることは、之と全く其の性質を異にして居るを記憶しなればならぬ。吃は遺傳又は真似の場合を除くの外は、大抵イツモ其原因は、神経の痙攣及び幼時急激に起りたる感動に關係して居る。就中其の感動が、三歳より六歳に至るまでの間、頭腦と口舌との契合的作用の、未だ充分定まらぬ時に激發するときは、必ず吃になる。處が此の契合は、常に女の子の方が、男の子の方よりもズツト早い。

此種の説の是非は姑く措き、ブレインエ氏及び其他凡ての心理學者は、女子は男子よりも多少饒舌であると云ふ事實に一致して居るやうに思はれ、余も亦然か思ふ。勿論冗言はてしなきは、幼時男女兩性に通じて見る所である。根も葉もなきくだらぬことを、唯饒舌る樂しみの爲に饒舌つて居る時期が

あるけれども、然し何れかと云へば、贅言冗語、意味のないことをベチャクチャ饒舌る性癖は、女の子の方にズツト多い。是れは發音の發達が、意解の發達よりも進んで居るからの爲である。反對の意味の言葉を話すこと、例へば雪が熱いなどのことも、少女に就て度々認めらるゝ事實である。此等は皆女と云ふものは、男よりも饒舌で、無暗矢鱈に話すことを好むと云ふ證據ではあるまいか。是れは別に余が嘲笑の意味を以て、曰ふのではない。

(3) 少女の摸倣性

女の子は又男の兒よりも、真似易い方である。設令摸倣性は、男女兒に通じて、著しく顯れるものでも、何れかと云へば、ロリオル嬢の言ふ通り、女の兒は男の兒よりも、ズツト真似が上手である。自分の面前に、人の言ふ所、行ふ所を、男の兒よりも善く注意着目して、之を真似るのを尙一層面白がるやうに思はれる。之を摸擬し、之を反覆するのが、其の愉快の中の、最も愉快なるものとなつて居る。自ら發見し、發明し、工夫し、創作すること、少き丈、それ丈、真似することが上手である。幼き女兒が、母親の己に語る所を、如何程巧に真似て、

之を玩具の人形に語りつゝあるかは、吾人の一驚を喫する所である。母の音色から、姿勢舉動まで、ソックリ眞似するから實に妙である。此の事實は、甚だ興味ある問題である。何となれば是れは相貌にも、性格にも關して居る所のものである。模倣と云へば、屈伸自在、教へ易く、従ひ易く、類化し、想像し、境遇及び場合の變に應ずる等の、可能性を備へて居る意味である。少女が何事をも珍らしく解し、餘り自發心を要せぬ事柄に於て、大に勝る等の事は、皆之によつて知ることが出来る。然し其の代り、模倣は、切言すれば、輿論、風俗、習慣及び先入等の奴隸である。流行の崇拜である。人格の缺乏である。發明、創作、深意等を缺いて居るものである。

擬容の巧みなるも、又模倣性の一種である。少女は演劇などに妙を得て、最早や四歳乃至五六歳位から、妙技を示すことがある。彼のセリヌ、モンタランの如き、然うであつたと云ふ子供演劇などには、少女は男の兒の眞似などをも、中々珍らしく演ずる。

他人の相貌、感情、思念等を理會し、解釋することなども、女の子の方が、ズツと巧妙である。是れ亦少女の逸才を見て可なりだ。他人の相貌、感情、思念等を理會し、解釋することなども、女の子の方が、ズツと巧妙である。是れ亦少女の逸才を見て可なりだ。

少女の心的特性

(1) 少女の多感性

少女は又平均すれば、男の兒よりも感じ易い性質である。最早純然たる婦人の、多感性を有つて居る。ネツケル、ゾ、ソツストル夫人が、此の相異點に注目せずして、十歳までは、男女殆ど同一性であると曰つたのを見て、ミシユレ氏は驚き、且憤つた。如何にも少女は其の人形に對しても、多くは母情を示して、本統に恩愛の情を示して居る。最早此の時分から、母の觀念が、其の心を司配して居る。ミシユレの言は、少しく誇張の譏を免れぬが、然し本統である。曰く「女は搖籃の時より、早や母なり云々と。女は天地間の事々、物々、死物でも、活物でも、悉く之を子供の如くに化して、了ふ。少女は吩咐られ、もしやうならば、欣んで自分の弟妹の世話をなし、之を背負つたり、之を携帶したり、之を心配したり、又之を教化したりすること。を如何程好むか。知れぬ。果然母となり、教

師となることは、女子の天職である。感性情緒なども、男の子に比して、更に熱烈である。感動し易く、感激し易く、情の熱することも、亦甚だ深い。凡て子供と云ふものは、鼠とか虫などを恐れるもので、木で作つた鼠の動くのを見て、沮心したと云ふ話もある程であるが、乍併此の恐怖心は、女の子には尙深く、又尙永く繼續して居る。凡て子供は泣き易いけれども、女の子は又特別である。泣いて勝つと云ふのが、女の子の長所。涙は實に其の唯一の武器である。泣くときには己の望む所一つとして行はれぬことはない。此點に就て、別には是非する譯ではないけれども、女の子は一體に男の兒よりも、涙脆いと云はねばならぬ。是れは何の爲であるかと云ふに、男の兒に在つては、感動及び神経の激動などが、發して外部に出で、運動に顯れ、感覺中樞を衝動すること尠い爲である。此の事實に就き、ジュバンルは左の如く證言した。少女の泣くを好むの甚しき、鏡前に行きて、泣くことを樂まん爲に泣く者ありと。氏は之を見て、女子は健全なる教育法によりて、其の小神経を強壯にする必要あることを説いた。如何にも尤な説である。

(2) 少女の利己心

若夫れ女の子の傾癖はと云へば、ジュバンルは其の利己主義を指示するけれども、惟ふに氏とても、男の兒の利己心より、深大であるとは主張せぬであらう。余が經驗の範圍内に於ては、女子の利己心は、男子のに比して、寧ろ尠い方であるが、但だ其性を異にして居ると思ふ。ロリオル嬢の言に據れば、少女は概して汝の物、我の物と云ふ觀念が、男の兒よりも切實で、男の兒よりも所有者的の方であるが、其心が小さく、其度量がせまいと云ふ。憤怨、嫉妬、饕食、虚榮などは、男女共に殆ど相ひとしいけれども、但だ其の光景が違ふ。男の兒の方は、虚勢的、自慢的、梳白的で、天真爛漫の所があるが、女の子は、虚榮術に於て一層巧者である。人の氣に入る術に於ても、一層妙を得て居る。朋輩の上に、權利を取らんとする心も尙一層複雑して居る。女の子は、早くから人の注意を引く心を有つて居る。勿論教育に於ても此の傾癖が、助長せられて居るに相違ない。ジュバンルは、世の母達が己の娘を人形の如く飾り立て、無暗に虚飾の心を起さしむるのを、太く筆誅したのは、實に道理な説であるけれど

も然し女の子それ自身が此心なきにしもあらずで、粉飾は蓋し其性と云つても可い程である。百方己に就て心配をして貰ひたがり、其の爲に有らゆる屁理窟を言ひ、叱られても人に見られぬより可いと思ひ、時には泣いて慰めらるゝまで、押通すこともある。道途の人々が自分等の遊んで居るのに目を注ぐときなどは、デット其人の顔を視て居る。蓋し見て貰ひたいからである。男の見として此の如き場合に於ては、自分の遊びにはかり熱心になつて、見る人などには、目をくれぬとは言はれない。彼等も矢張り豪くなりたがり、又豪く思はれたがるものであるけれども、然し女の子の見物人に注意することは、又格別である。其の言語、其の舉止及び其の姿勢等、半分は確に見物人に獻げられて居る。

(3) 少女の羞恥、嫉妬心等

少女は漸次婚期に近くに從つて、行先きを考へ、一種の羞恥心と共に、遠慮の心を生じて来る。是れが虚榮自負の念ある少女になると、妙な現象を呈する。即ち遠慮と不遠慮の衝突を來たすのである。行末の觀念のない内は、天真

爛熳の者であるが、漸々と婚姻の時期の迫つて来るに從つて、人爲的擬容が加つて、来る。それが多少不遠慮な少女になると、人の氣に入りたいと云ふ心が、歴々と外に顯れるやうになるのである。或六歳ばかりの女の子が、母に向つて、「お母さん、彼道を又通つて行きませう、母は何せ」と問へしに、娘の曰ふには、彼處には私のことを、可愛い綺麗なお娘さんだと言つた人が居ります」と、亦以て少女の心事を察すべしである。

少女は又人を嘲笑することを好むけれども、人から嘲笑せらるゝことを、非常に忌嫌ふものである。一般の嘲笑を、悉く恐れると云ふ譯ではないけれども、自分が其の嘲笑の犠牲になるのを、太く氣にするのである。是を以て何の惡意もなき嘲笑でも、少女の虚榮心には、此上もなく辛く思はれるのである。

嫉妬格氣と云ふのは、少女の心性に取つて、餘り大袈裟の文字かも知れぬが、兎に角競争心、少くとも人の氣に入らんと欲する競争心は、甚だ激烈なもので、人と己とを比較する心が起り、それが又無用心なる母によつて、焚き付

けられるともある。處が繊弱無能なる性質として、此心が容易く嫉妬に變じて了ふことがある。性質が野鄙なれば、格氣にも化けて了ふのである。ジュバンは、多年宗教の要理を兒童に教へ、女の子百五十人、男の兒百五十人に、數年間宗教々育を授けながら、仔細に注目して見たところ、此の嫉怨の情が、女の子の方に、ズツと激烈であると云ふ事實を認められたのである。女の子は、家庭に於ても嫉み合ふし、又友達同志の間に嫉み合つて居る。十歳になる女の子が、新參の女の子に、自分の最愛なる友を奪はれたとき、ア、本統に彼人が憎い、彼人が憎いと心底から怨んで、其母に告げたと云ふ話がある。

ジュバンル及びロリオル嬢の觀察に據れば、女の子は、概して男の兒よりも不正直で、權謀家で、虚飾家で、誇張家で、嘘を真らしい作る者である。云ふ利害の關係のあるときは、無論然うであらうが、利害の關係なきときにも、然うであると云ふことである。就中嘘を吐くときには、男の兒よりも巧者である。少しも心を亂さず、眞面目に嘘を押通すことがある。

少女の知的能力

(1) 少女の意志

本章の終に在り、少女の理性に就て、一言を費さうと思ふ。即ち知識と意志の二大能力に就て考へて見るのであるが、先づ第一意志の方から觀察する積である。

女の兒も男の兒も、未だ意志と云ふ意志を運用することが不可能である。兩性共に、臆病勝で、己の神經を司配することが六箇敷い。其の意志は弱くして、未だ事を企つる底の勢を有つて居らぬ。故に自發的ではなく、消極的及び防禦的である。然し剛情と云ふ情性的勢力があるから、それが其の時分の唯一の力である。惟ふに我儘と云ふ方面に於ては、少女の方が、尙意力が強いかも知れぬ。飽迄も自分の望み通りに、押通さんと剛情張る女の子が、中々世間には澤山見受けられる。其の傾く所外に定規はない、自分の望み次第であるが、其の望みは、感性の激しき爲に、屢と變り易い。

(2) 少女の知識

少女の勝利とも云ふべきは、知識である。女子の劣等を主張する論者と雖、

幼少の時に於ける知識の發達の早きには、驚かぬ者はない。少女は知識の尖鋒頗る鋭く、記憶力も殆ど之に準じ、最早大抵の事は、之を理會する力を有つて居る。此時其の知識を磨かしめやうと思へば、實に容易く且速かであるが、不幸にして、年と共に精確を缺き、抽象性を失ふやうになるから、深遠なる學問が出来なくなつて了ふ。余一個の經驗に於ても、實に珍らしい少女のあるを實驗したことがある。三歳から九歳までの間に、哲學的好奇心を起して、人生問題を盛んに研究し、小さき頭腦ながらも、人間の本源、歸趣及び死後の問題などを究め之に就き、種々の質問、又は難問などを提出し、如何にも死後の奥義を尋究するのが、楽しさうに思はれた。若も此の少女が、絶へず哲學問題を研究しつゝ、其の知識が、年と共に發達して行つた日には、果して如何に成り行くであらうかと云ふことは、我人共に氣を附けて居つた所であつたが、其後の經過は、遂に知ることが出来なかつた。

それは兎も角、彼女の早熟は、實に珍らしいと云はねばならぬ。ジエバンルも亦少女は、中々理論家であるを實驗し、最早五六歳の頃より、之に理論を語

り得べし、其の精神の早成、眞に驚く可く、又恐る可し云々と曰つた。

要するに少女に就て、此の如く研究し來れる所を見れば、前章及び前々章に於て、積年累代の境遇と、女子其者の性質との結果として語りたる、通能及び特性の大半が、少女に於て種子の如く包まれ、萌芽の如く顯れかゝつて居るのを認むるのである。借此等は、少年の終を告ぐる時、即ち一人前の女子として立つ時には、果して如何に成り行く可きかは、次章以後に於て、詳しく研究して見なければならぬ。

第五章 妙齡の女子 感性一般

妙齡の女子

少女の研究の後に、妙齡女子の研究に、一章を獻げねばならぬと思ふ。余は先づ女子の心理に就て、單に理論的研究を試みたいと思ふ。前章に於て、少女

のこゝを研究した譯は、女子の特性の純乎たるもの天然其儘なるものを、少女に於て見ることが出来るであらうと希望したからである。

妙齡の女子になるに従つて、婚姻の時期が切迫して来るから、益々自省的になつて来る。随て尙一層謹慎に、又一層遠慮勝になる。蓋し謹慎と遠慮とによつて、女子となり始めると言つて差支なからう。此時になると、女子の主性とも云ふ可き感性が、直に圓滿の發達を遂ぐるやうになる。是故に女性の心理的特性の研究を、先づ此の感性より始めるのが順序である。

女子の感性

凡ての心理學者は、女子の敵たる、友たる、に拘らず、感情は、其の主性である、と云ふ點に至りて、何れも皆一致して居る。感情の女子特有なる、オキエ、スト、コントの如きも、女子を稱して「情性」と呼んだ。

余の今茲に感性と云ふのは、一般の意味に解すもので、感じ、樂み、哀み、隨て望み、恐れ、愛し、憎む能力を指すのである。哀樂の感情の強弱は、天然の性癖、若くは多少人爲的情慾の強弱によつて定まるものである。概して言へば、此の

能力は、男子よりも女子の方が、ズット發達して居る。就中女子に在つては、人生の大役を勤めて居る。先づ第一此の一般の事實を證明し、次に其の理由を述べ、其次に此の感性の細目に亘つて、殘らず述べることは出来ぬが、其中の最も興味あるものを掲げ、終りに此の心理的研究より、教育上如何なる實行的教訓の出で来るかを考察する積である。

感情の強弱は、其の結果に依らなければ、知ることが出来ぬ。而して此の結果は、始終發して外に反映、又は反動するものである。顔色が變り、或は蒼然となり、或は赧然となり、呼吸又は血液の循環が亂れ、泣聲となり、流涕となり、各種の笑となり、音聲が變り、言語が止み、若くは激發し、其外舉動にも顯はれ、行止にも見えるから、少しく觀察に熟したる者は、之等を見て、内情の如何を察知するに六箇敷くない。

此等の徴候を見れば、女子の感性の激甚なるを證するに、充分餘師ありと思はれる。澁面を作つたり、雀躍したり、笑つたり、泣いたり、饒舌り散らしたり、猫撫聲をしたり、慰めたり、抱いたり、媚笑百態であるが、然し少しく氣に障る

事があると顔をしがめ、口をつぐみ、怒り薄ければ臍黙し、憤り深ければ激歎し、或は其の相貌が直に其の中心の状態を、歴々と示證することがある。少女でも既に年若き女子ならば尙更、ツマリ女子は老幼に拘らず、殆ど冷淡無頓着に暮して居ることが出来ぬものである。造次にも顛沛にも何人かを若くは何物かを愛せず、若くは憎まずに居られぬものである。蓋し寸刻も心中に多少の感情を湛へずには居られぬからである。

ロンプロゾの反對論

乍然此の徵候は、果して感情激烈の著明なる證據であらうか、之が反對の事實はあるまいかと云ふに、伊太利の教授セザル、ロンプロゾなる者は、之を拒否して反證を掲げたのである。氏は近頃婦人の感性、否寧ろ無感性に就て、一書を著して、身體の無感覺なるを論じたのであるが、先づ五感の鋭敏と云ふことに就て、味覺嗅覺等に關する事例を掲げて、婦人の方は、男子よりも二倍乃至五倍までも鈍いと論じ、之を以て香料の濫用を解釋し、婦人の感覺が鈍いから、香料を澤山用ゐると云ふ議論をなして居るけれども、余の見るところ

を以てすれば、氏の所謂事實の證明なるものは、寧ろ慣習の結果に在りと云はねばならぬ。氏は外科醫の證明する所であるとして、婦人は男子よりも、手術の苦痛を能く忍ぶと云ふ事實を掲げ、之が爲に、ピルロト氏は婦人には、始終新たらしい手術を試みる筈である。感覺が鈍くて、抗抵力が強いからと曰ふ言を引證し、尙是言は、バルザックの有名な言に適合して居ることを語つて居る。バルザックの言とは、婦人は苦痛を憂慮すること甚しけれども、苦痛の來るや、男子よりも能く之を忍ぶものなりと云ふのである。病中平穩の容を保つて居るのも、亦是れ著しき證明である。と曰ふけれども、此の事實は、感性の鈍きに歸すべきものとは、誰も思はぬ。是れは寧ろ婦人の柔軟にして、順應し易き性、若くは己に打克つ力に歸すべきものである。然るにロンプロゾは、斷乎として自説を主張して居る。同國人セルギ氏も同感である。ドクトル、ツワリギは、其説を殆ど其儘採用して、自説の如くにして居る。此の先生方は、婦人が苦痛に對して、比較的不受感性を有つて居ることばかりを喋々し、而も人生の苦痛は、寧ろ婦人に多いのにと論じて居る。吾人今之を難するに、婦人

は男子よりも屢々苦痛の反動を起すにあらすやと云へば、ロンブローゾは、一向平氣である。氏は之に答て曰ふには、是れは感性の大なるが爲ではなくして、憤激性の大きなるが爲である。然し感性と憤激性と、區別する譯があらうか、此の如き區別は、無意味ではあるまいか。婦人が男子と同じく、否、男子よりも著しく苦痛の徴候を示すのに、男子の如く感じて居らぬと斷言することが出来やうか。之を否定する理由ありとすれば、それは唯婦人は、感情の外に現はるゝを防ぐのと、矯情の術に巧みなるのと、就中婦人の中には、己の思ふが儘に泣きたいと云ふ感能等のあるが爲である。

余は前章に於て、少女には模倣性があつて、演劇の真似などの極めて巧みなることを述べた。茲には、單だ婦人は、任意に泣き暮すと言ふを以て、充分餘師ありと思ふ。兎に角、氏の主張に反し、一般の輿論に合して居る、實際の眞理と認む可きとは、婦人は、其の感情、矯激にして、其の感、覺、中、樞、甚だ、顛、動、し、易きものである。と云ふ事、即ち是である。故に其の顛動は、男子よりも尙一層深く、奥底まで響き、涙を流すまでに至り、腸を廻轉するとさへもある。而も是れ

單だ瑣細な事より、妙な思想若くは幻影を書きたるが爲と云へば、其の如何に感情の激しさを證するに足るではあるまいか。其の瑣細な事と云ふは、隠れて見えぬ、内的原因から出ることもあれば、見易き外的原因から來ることもあるが、何れにしても、大した事ではないのである。是れは決して意志の作用とは云はれぬ、意志は往々沈んで居る、是れ全く無意識的暗示の結果である。

見書知人法の立證

是を以て余は伊太利の生理學者に反し、又其の多少獨斷的言論に抗して、飽迄も感性を以て女子の主性と視做すべき、權利ありと思ふのである。此の事實は、學術上の精確嚴密なる實驗に上るか、と云ふに、茲に一の證據と視做すべきものがある。

彼の見書知人學者(筆跡を見て人の性質を知る學者)は、書法を以て感性を判斷する者であるが、此點に就ては、皆一致して居る。處で書法が變つても、女子の書體が、男子のそれの如く太くなつても、根本的相違は、始終依然として

遺つて居る。即ち概して言へば、女子の書法は、イツモ男子のよりも、多く感性を見はして居る。

クレビュージアミン氏は、此の見地より、男子の書法三千種と、女子の書法三千種とを比較対照したるに、感性の微弱なりとする婦人は、單だ六十人だけしかなく、即ち百分の二と云ふ割合である。穩健なりとするものは、五百三十七人、即ち百分の一七強、激烈なりとするものは、二千二百八人、即ち百分の七十三強、若夫れ極端過激にして、病的感性とまで認むべきものに至つては、百分の六強であると云ふ。

男子の書法を見るに、感性の微弱なりとすべきもの、實に二百四十二人、百分の八、穩健なりとすべきもの、一千九百八十八人、百分の六十六、激甚なりとすべきもの、七百二十四人、百分の二十四、即ち右と全く反對の現象を呈して居る。

果して然りとすれば、凡て婦人の婦人らしき者に就ては、某氏がグラサブリエール夫人に就て語つた所を、ソツクソツク其儘應用することが出来る。某氏

嘗て夫人の幽房を訪問したところ、人其の夫人の何を爲し、何を考へて居るか、を某氏に問ふた。某氏の曰ふには、考へることなどは決して爲ない、唯感するばかりと、婦人として考へぬ譯ではないが、併しイツモ多少感情の支配を受けて居る。

女子感情の激性、悲劇見物の奇癖

男子とても感激せぬことはないが、併し一層漸進的である。徐々と階一階づゝ進んで行く。女子の感情に至つては、實に急激である。(トマス)の言、某奇想家の曰ふには、婦人は頭と胸と相互に、又同時に膨れる膠囊の如きものである。と、古來の心理學者の言に徴するに、女子の特性に就て、何れも皆同じく記してある。即ち感情が始終勝つて居るを言はぬ者はない。道學者の説も亦之と同じである。フエネロンの曰く、女子の通患は、細事に就ても、感情を激發するに在り、彼等の愛憎は、理由なし、其の愛する所には、毫も其の缺點を見ず、其の憎む所には、毫も其の美質を認めず云々と。

是を以てフエネロンの曰ふ通り、女子は何事にも極端である。善にも惡にも

も。極端である。最善の腐蝕は最悪なりと云ふ格言の通りである。愛憎共に極端である。安寧秩序の亂るゝに當りては、婦人が一番矯激である。一番大膽である。一番慰撫し難い。又一番火に油を注ぐことに熱心である。イツモ此の如く愛の極端より憎の極端に至るものである。勿論婦人にも亦男子の如く中庸のものもあるけれども、常に餘り之に傾着しない、中正を守るらしい容子をして、心底には其の望みがない、又必ずしも中正の容を保つとも限らぬ。何となれば感情的氣質の特性は、オギユスタン(オーガスチン)の懺悔録にも記されてある通り、愛することを好むのである。自ら愛を樂んで居る。多くの婦人の自白する所に據れば、強き感情に、一種の嗜好を有つて居る。多少恐怖が加味しても、氣に入らぬことがない。婦人の中には、感情を追求するの餘りに、安全なる境遇よりも、寧ろ禍害を好むに至る者ありと云ふ言がある。思ふに女は、皆芝居を好む、又其の芝居に於て、悲劇的のもの感情を引起す底の境遇を、非常に好む者である。芝居の悲惨に過ぐるを、悪く言ふ婦人を見たことがない。余は知名の士と共に、西班牙の闘牛戲を見物したことがあるが、此

戲は立派は立派であるが、随分忌はしいことであるから、男子にして深く之を忌み嫌ひ、且憤る者あるを見なければ、之を好まぬ婦人少女は、一人も見なかつた。縁弱なる者でも、柔和なる者でも、欣んで危険なる變化の場合を見物して居る。時に悲しい聲を出して、顔を背けても、扇で顔を隠しても、直視するに忍びなくとも、矢張り之を好んでゐるから妙である。或年かさの婦人が、余に曰ふには、實に酷う御坐りますネー、私は是れで四十回も、此の恐ろしさを見物しましたが、矢張り止められませぬ云々と。

余は別に其の殘忍酷薄の性を、非難する積はない。此の觀劇には、勇氣を引起す原由が、幾個も寄り集まつて居る。演者の輕快なる扮装、群衆の喝采、感情激發の傳染、服裝の美、新奇の好み等、皆總合して自然に一種の醉態を來たす原因となるので、此の醉態は、勿論罪ではない、併し余は唯婦人が、此種の醉態を好むの奇癖、抜く可からざるものある事實を、認むる丈けの話である。

感情激發の證言及解釋

女子感情激發の例證は、枚舉に遑あらざる程ある。其の慾望の急激なるこ

と猛烈なることは、常に諷刺記者の筆に上るばかりではない、婦人記者の最も嚴肅なる者の中にも、之を自白する者がある。ゾレムザ夫人の曰ふには、吾等は堪忍する者と云はんよりは、寧ろ柔和なる者にして、不自由を忍ぶことは待望する者の遅るゝを待つよりも易し」と如何にも婦人の堪忍は感心であるが、それは避く可からざるものを、忍受する意味に解し、忍ぶと屈するとの順應性として見るときの話である。彼等が一たび希望するや、實に不幸抱つて了ふ、望みが其心に起るや否や、直に焦せる、一切の精力を擧げて、其の満足を期する方面に傾注する。又其の慾望が、正しく此の如く破裂的であるから、成否難易等を考へて、之を制限することが出来ぬのである。オクタウ、ソイエ氏曰く、婦人は善よりも最善を夢想し、悪よりも最悪を夢想す、中正と云ふことを知らぬ、判断の冷靜を之に期することが出来ぬ。

其の恐怖心も、亦其の慾望と同じく急激である、但だ空漠にして、精確でないから、何となく苦しく恐いと云ふ心的状態になつて居る。故に

明なる原因がなく、確かなる事物がなくても、空に恐れて、急に氣力を落すことがある。此の病的状態は、婦人には、實に有勝である。某詩人の言に、あゝ女よ、苦みと恐れとの爲に生れたる者よ」と曰つてある。

デデロは、此等の性情を、能く觀察した者であるが、其言に曰く、吾は婦人の愛嫉妬、忿怒等、男子の未曾て感知したることなき程度まで達せるを見たり」と語りつゝ、之が解釋を試みて曰く、繁劇抗爭的生活は、心を八方に散じて、吾人(男子)の情を欺瞞(輕減)するものなれども、女子は其情を伏卵(内に温むるの意)するものなり、云々と。

されば此の矯激なる感性的原因としては、婦人の生理組織、及び其の動搖定りなき神経質等を掲ぐべきは勿論ではあるが、然し其の座職的生活、蟄居的生活、及び多くは日夕無聊、無爲、閑散に暮して居ること、亦之が原因であると思はれる。感情は何も爲すに居るときに醗酵するもので、心を外に散ずることなければ、情は自然内に温まるものである。何人も自驗して明に知ることの出来るものである。男子とても此の如き状態で居れば、感情が一に

聚中し内に醸成し、或は熱を發し、或は毒を吐き、遂には一切の精神的活動を横領するに至るものである。

感性激發の主腦〔愛〕

今や此の矯激なる感性の主動者は何物なるかを研究して見なければならぬ。愛であらうか、又は憎であらうか、それは無論疑はない、愛に定まつて居る男子の感性としても、女子の感性としても、愛は其の基本である。實は男子に於てすら、感性の基本となつて居るものが、愛でありとするならば、况や女子に於ては、尙更然りと云はねばならぬ。是に於て乎、多くの學者及び文士にして、女に於て心の勝つて居る事實を認めたる者は、無論之を善き意味に解して、女子には愛するの要求、恩愛の心、同情の心、一言以て之を蔽へば、愛が主性となつて居ると解釋したのである。憎悪、仇怨、忿怒等、凡て憤激的情慾も、無論婦人の心に激發して、随分と恐ろしくなることは、前述の通りであるけれども、然し此等は、愛に對して次等的のものである。續發的のものである。女子は男子よりも柔軟なる者であるが、時に甚だ剛頑となる。然し凡ての人に對し

て、剛頑であることは稀にして、大抵イツモ其の愛に衝突したる者に對してある。其時には、冷淡でない、無頓着でもない、活動的に剛頑である、惡意的である、復讐的であると言つて可い。是れ亦其の根底となれる愛の要求の、別種の結果である。

勿論愛が、其の根底となれりとして、一切の利己心を排除して居ると云ふのではない、女子の利己心を利他心に就ては、何れ後章に述べる積であるが、茲には單だ主性的傾癖に就て、語るのである。

慈愛の情は、婦人の基礎的心情にして、其の大徳も、其の大惡も、皆之より出て来る、一方には其力の本源となり、他方には其の弱質の原因となるものである。婦人は其の愛するとき、熱誠男子の到底企及すべからざる程度まで達する。成程時として、其愛には獻ぐ可からざるものまで、犠牲に供することがあるけれども、是れすら或場合に於ては、美譽たるを失はぬジョルジュサンの言に曰く「敗徳の婦人でも、或一種の學者よりも優れる者あり、之に石を投ずる男子よりも優れり」と。

愛は女性の至上利害である。如何なるものでも、愛と陰に陽に關係のないものは、女子に面白く思はれないと云つても差支ない。是れ實に小説をして、一切の文學中、最も廣く行はれしむる所以である。愛は小説をして、イッモ凡ての文學中、最も民間に歡迎さるべきものとするであらう。小説が婦人の好適讀物となる所以は、婦人の最も心に懸けて居る所のものを以て、之を養ふが爲である。婦人は愛に養はれて居るときには、苦みを知らない、愛に關するときは、何事をも他さない。極めて綿密なる研究でも、極めて深遠幽玄なる形而上學でも厭はない。

苟も愛がなくんば、何事も皆面白くなくなる。彼等は直に顔を背けて了ふ。若くは單に紙をはぐるのみに過ぎない。現代の某評家の言に曰く、婦人の小説を讀むのは、己の秘密若くは己が競争者の秘密を求むるに過ぎずと。余は其の果して然るや否やを知らぬけれども、小説を好むには、必ずしも自ら秘密あり、競争者あるの必要がないと思ふ。小説は愛ある婦人に、其の愛を呼び起さしめ、愛なき者には、其の幻影を示すのである。又余は同評家の如く、今日の

小説は、輕佻浮薄である。何せなれば小説の讀者が、輕佻浮薄なる婦女子であるからと云ふが如き、言論をなさぬが、小説の讀者が、主として婦人であるから、人を悦ばしむるに、成功せる小説を作ることが、斯く易しいのであると思ふ。

婦人の愛と云ふものは、實に複雑なるものである。奇妙なるものである。茲に婦人の愛と云ふは、情の深い愛を指すのである。婦人の愛は、男子の愛と多少違ふ。男子の心には、恐れのみが僅かでも愛に加味して居ると思はれぬ。婦人の情熱深き愛には、始終多少の恐怖が加味して居る。故に自分の思ふ儘になる男子を、左程に愛さない。

彼等は抗抵する程の力のある者に基かなければ、自ら支へることが出来ぬと、善く自覺して居る。故に自分が自由自在に翻弄し得る男を、輕蔑するものである。

女子教育上取る可き方針

女性の愛の特性としては、禁菓の誘引を掲ぐるを以て常とする。オクター

ウ、アイエの言に曰く、咀はれたる菓實の誘引と云ふものは、甚しきものにして、善良なる婦人さへも、一々之を食はざれば死すとも瞑せず云々と、戯言は措き、果して婦人は禁せられたものに誘引せらるゝものであらうか、實を言へば、男でも女でも、皆禁せられたものに誘はれ易いもので、それには種々の理由がある。先づ第一禁せられると云ふのは、誘引的でなければ、禁せられぬものである。誘引的でないものを、禁する道理がない。次に妨となるものは、情を激せしむるものである。例へば堰が水を激せしむるが如きを見ても知れる。乍然萬事平均した上にて言へば、許されぬもの、禁せられたものの方へ、誘はれ易いのは、實際男よりも女の方である。と云はねばならぬ。是れは先づ前に述べた所より起るもので、若も本統に女の愛には、多少恐怖を加味して居るとすれば、實に斯くなくてはならぬ。次に心を外に散ずる活動的の事業が少いから、尙更其の感性の磨となり、感情の暗示する幻影の魔を防ぐことが出来ず、今日生理的心理學上の用語にある如く、女は尙一層被暗示的である。如何にも此の方面から見ても、女は男よりも、被誘引的のものと云はねばならぬ。

ぬ。しかのみならず、禁戒それ自らが女を誘引して、其の誘ふ所のものに想到せしめ、誘引に尙一層力を與へて、抗することの出来ぬやうになし、遂には之を眩惑するに至るものである。

是を以て今より吾人の教育方針を定めて置かねばならぬ。即ち女子教育に於ては、成る可く禁することを、少くしなればならぬ。是れは兒童教育一般に該當する原則ではあるが、特に女子教育に適切なりとする所以は、女子が誘はれ易いばかりでなく、男子までが多く禁する方に誘はれ易いからである。然し禁するときには、益す悪の觀念を與へ、其の觀念と共に、望みをも起さしむるの憂がある。處が女の望みと云ふものは、何處まで行くか、底止する所を知らずで、就中其の道理のないには、實に閉口しなければならぬ場合がある。

此の原則から、尙他にも實行的結論が打算せられる。先づ第一女子教育に於ては、凡て女子の神経過敏と、感情激發との性に反する、對重となるものを、悉く強壯堅牢ならしめて、其の感性を、理性の權内に服せしめなければならぬ。

ぬ。理性と心情とは必ずしも相反するものではない、無論男女各々其の傾く所あるには相違ないが、然し教育上女子の愛には、理義を定規となし、愛の翼を、男兒の冷靜なる理知に、結付ける方針を取らねばならぬ。

第六章 女性の感性—利己的性癖

利己心の種別

余は前章に於て、單だ感性を一般に概言したばかりで、感性の激烈深甚なるは、高潮なる女性の特性であることを考察したのみである。是からは細目に涉つて、此の感性の主性的性癖、其の傾向及び其の弱質等を研究しなげればならぬ。

前章の末段に於て、余は斷案を下して曰つた、女子は此世に於て、主として愛と心情とを代表して居ると、勿論其の愛には、美點もあれば弱點もあるこ

とは、申す迄もない所である。男子は之に引き換へて、寧ろ正義と冷靜なる觀念とを表現して居る。乍然是れは、餘り普通の及び近似的の言説であるから、空漠の譏を免れぬ例へば愛と云ふ文字を高尙なる意味に解して、女子は愛を代表し、愛の化身であると云ふからには、一切の利己心を脱して居るものであらうなどと、解説するに至らば、大變な間違である。故に如上の見解前章の所論は、兎に角餘り一般に失して、精確を缺いて居ると云はねばならぬ。何となれば全然利己心を脱却して居ると云ふが如きは、如何なる人にも當らぬ言である。若も果して此の如き絶對的廉潔心が、人生可能的の事であるならば、意志の勝利、道心が人心と、永く戦つた功勳など、有る可き筈もないことである。人心即ち劣等性の傾癖は、男女共に免る可からざる所のものである。女も男の如く、先づ第一自ら愛すると云ふ、生物一般の法則に服して居るもので、但だ男とは其の方法を異にして居る丈けのことである。實を言へば、或一種の心理學者の如きは、女子を以て寧ろ天性利己なる者であると視做して居る。フェネロンの如きも、斯く觀じた形跡がある。ギーンゾー夫人の言に曰

「女は己に關する事柄にあらざれば面白がらぬ者なり」と、ネットケル夫人の言に據れば、世の妙齡女子にして、文明流の教育を受けた者には、人の歡心を得る望みと愛されたいと云ふ心とは愛する能力よりも、自ら優つて居ると云ふことである。夫人は語を繼いで曰ふには、他の年齢に至るときには、無論天真の性は利己心に勝つて、己の勢力を回復すると雖、多くは其の勝利すらも覺束なきことあり云々と、今日小説に上る少女、婦人及び女丈夫は、大半皆心情の極めて拗き婦人にして、フェネロンの所謂歡心を釣らんと欲する、切なる望みより外、他に心なき婦人である。其心が冷たく淋しく、己より外に愛することを知らぬ者である。グイ、ゾ、モーパッサンは、其著「吾心に一例を示して曰く、切實にして、自發的なる嗜好は一つもなく、美術的觀念は露程もなく、乾燥にして而も放逸なる自己崇拜の外、胸中一物なき者なり」と。此の如き女性の例は、アルフォンス、ドードの作品の中にも見受けられる。其著「リシモルテ」の中には、女を底意地悪く、野鄙で、卑劣で、嘘附で、貪食で、自負で、好奇で、凡ての惡徳を、一身に集めて居る者のやうに描てある。

勿論是れは諷刺的描寫、惡罵的筆法で、氣儘勝手に罵倒したものであつて見れば、之を以て則とする譯には行かぬ、少くとも是れは極端な場合を描いたものと、視做さねばならぬが、乍併仔細に實際を調べて見るに、此言が毫も該當して居らぬと、斷言することも出來ぬ。事實を語れば、自愛と云ふものは、吾々人間の本性である。男も女も、此點に就ては大した差別はない、されば茲に論ずるのは、唯其の程度問題である。特殊の傾向を有つて居ると云ふだけの話である。女の利己心は、男の利己心と、相異なるものか、異ならば、如何なる點に於て、相異なるものであるか、是れ實に吾人の研究すべき問題である。余は利己心の最劣等なる性癡より、最高等なる性癡まで、研究の歩を進めて行かうと思ふ。最劣等なるものと云ふは、肉體的嗜欲に關するもので、人體組織の要求にも係つて居るものである。最高等なるものと云ふのは、無論右に對して、比較的と言つたもので、全く、若くは殆ど精神的性格の傾向を指すのである。

女性の快感

概して言へば、陋劣卑猥にして、全然肉快的利己は、女性に尠いやうに思はれる。彼等は要求が少なく、而も其の要求たるや、彼等の天性により、若くは自ら足るを知り、又は嗜欲を節しつゝある習慣に依りて、左程命令的でない。却て男子に至るときは、放縱逸肆、遺憾なく其の本能を發展せしめ、其の主公たる資格と権利とを濫用して、自ら節制を守る義務を免除して居るものである。是を以て女は男よりも、口腹の奴隷でないのが普通である。勿論嗅覺と味覺に就ては、女の方が寧ろ之に司配されて居ると云はれるかも知れぬが、然し是れすら、確固なる事でない。嗅覺及び味覺の八釜敷過ぎるのは、主もに教育の結果にして、而も或社會にのみ限るものである。彼の滋味を嗜み、美食を好み、甘味なる菓子類を嗜むが如き、即ち是であるが、惟ふに此は、其の天性の要求と云はんより、寧ろ一種の文明流の嗜好及び習性の結果であらうと思はれる。之は兎も角も、女性の肉感に概して罪がなく、寧ろ優美と云ふ方であるが、男子の肉感に至りては、千態萬狀にして、多くは随分と陋劣極まることがある。云はねばならぬ、多分女は屢々間食する必要あるかは知らぬが、大

概小食である。性來節食家である。飽食大飲などの癖は、殆ど無いと言つて差支ない。多くは菓子、漬物等を好み、飲物、就中酔を促す強い飲物などを好まない。喫烟などの奇怪なる癖を自癖にするには、餘り成功しない方である。伊達に吸ふと思つても、成功しない、少くとも我國(佛國)に於て然りである。遊惰も亦女性の特性の如くに言ふ者もあるが、余は其の活動に就て語るべき、之を述べやうと思ふ。女性に著しき性癖として、茲に言ひ得可き所のものは、一種の優柔性である。是れは成程女性普通の性癖らしい、何となれば女は柔弱にして、感じ易く、いじけ易いもので、一種の疲勞を餘計に恐れる氣味がある。然し是れは天然の性癖ではない、寧ろ習慣及び教育の結果と云はねばならぬ。婦人が田園に働いて居る國に於ては、女でも男の如く丈夫で、毫も柔弱の點が見えない。ピレネーあたりでは、木だの薪だの、玉蜀黍などを、頭の上に載せて、急坂を安々と登降する婦人がある。都會に於ても、又或程度の文明國に於ても、随分婦人的に、活潑なる婦人があつて、訪問、俗務、家事等を、一身に引受けて、毫も疲勞の容子もなく、其の輕快なる舉止、其の活快なる相貌及

び其の抗抵力、忍耐力等、實に吾人の一驚を喫すべき者がある。而も此等は、自分の性に固有避く可からざる責務以外に行つて居るのである。要するに女性の要求嗜欲などは、男子のそれと多少選を異にして、其量も尠く、其度も激しくなく、常に陋劣粗野の容を帯びて居らぬ。

女性の愛着心

茲に半ば肉體的にして、半ば精神的性癖がある。例へば所有癖、土着心、風物に馴るゝ性癖、其中にも先づ第一人生に對する愛着心即ち是にして、心理學者は、時々之をも此の範疇に列するのである。

人生を愛着する心は、人生一般の性にして、普通の常態に在つては、萬民同一である可きもので、設令相違ありとするも、それは男女に依ると云ふよりも、寧ろ人に依ると云ふ可き性質のものであるが、詩人は之を女性の性癖に歸すると見え、人生を愛する天真爛漫の言を、女子の口に上せて曰く、生き存へて光を見るこそ樂しけれとは、希臘の悲劇に於て、少女の語れる言葉である。是れは少女の方からは、感打つべき言葉かは知れぬが、男の方からは寧ろ

ろ耳障りになる言葉である。設令少年としても然うである。吾人男兒と生れたる者は、尙一層勇敢、尙一層豪邁、又尙一層大膽にして、危険を物ともせざらんと欲する底の、雄志あらんことを希望するものである。乍然男子にして、已に相當の勇氣があるならば、女子にも亦女子固有の勇氣と云ふものがある。女子は戰場若くは危険の場合に於て、死を冒すと云ふことをしないけれども、家庭に於て、病人の枕頭に於て、己の生命の危き場合に於て、死を冒しつゝあるものである。是れ亦女子の戰場である。而して此種の女性的勇氣は、女子に缺如して居らぬ。男兒的勇氣が男子に缺如して居らぬと同じことである。否、それよりも尙缺如して居らぬと言つて差支ない。

乍然自殺者の統計表に據ると、女子の自殺は男子に比して、四倍も少いと云ふ事實がある。

若夫れ土着心、及び馴れた風物に離れ難き心に至りては、是れ亦女子に特有として、記すべき者あるを認める。女子の生活は、尙一層座職的尙一層家庭的であるを常とするから、尙一層家庭に愛着して、其のホームを去らなければ

ばならぬと云ふ場合には、尙一層辛く感ずるのは、自然の情、當然の事と云はねばならぬ。概して言へば、又所有物の觀念をも離れて言へば、女子は其の馴れた風物に、特別の愛着心を有つて居る。此等は女子に取りて、大抵イツモ貴重なる紀念となつて居る。又此等を受するに、一種の迷信を以てするのである。此の感情ほど貴ぶ可く、感ず可きものはないけれども、然し是れは特別の感情とも思はれない。單だ其の一般の感性が、其の感情物と關係して居る。若くは居つた一切の物に發射したまでのものである。而して此の感情が、平均して男子に乏しき所以のものは、思ふに是れ男子の生活は、餘り家居的の方でなく、寧ろ外出的にして、日夕各種の事々物々に接觸して居るからの爲と見える。

女性の貪慾

彼の所有癖若くは所有物の慾望とも云ふべきものに至つては、之と性質を異にして居る。大貪慾家の標本は、大抵皆男子とされて居るけれども、然し人生の觀察者、人心の研究者は、貪慾的傾向を以て、寧ろ女性に普通のもの

如く視做すに於て、殆ど相一致して居る。此の貪慾的傾向は、如何なる年齢の婦人にも見受けられ、最早幼少の時にも顯れるけれども、就中老婆に至りたるときは、最も著しきものとして居る。ロリオル嬢の言に據れば、母の膝下に居るときには、男の兒は其の有つて居る所のものを、欣んで共同にするけれども、女の子は寧ろ個人的所有の觀念を抱いて居る。前者は帽子でも、手袋でも、氣を附けずに取り換へるけれども、後者は自分の帽子、自分の手袋を、チャンと所持して居る。嬢の言に曰く、われ男の子供等の、錢を出して菓子などを買ふを見しに、之を分配するものは、多くは餓鬼大將にして、其の餓鬼大將は、常には錢を出して菓子を買ひたる者にあらず、其の子供は、寧ろ見て居る方なり。然るに女の子供の一群にして、此の如き場合にあるときは、菓子を買ひたる者、常に之が分配をなすなり云々と。

シラルデン夫人の言に曰く、佛蘭西に最も稀なりとするものは、馬鹿なる婦人の次には、鷹揚なる婦人なりとあるが、夫人は實に甘い言方をしたものである。

ポアローの諷刺の中にも、貪慾は女子の特性として、随分著しく目立つやうに描てある。或名門の御役人様が、嫁資の爲に、貪慾の嫁御寮を娶つたところが、新女主殿、早速家政を改革し、馬や牝騾を賣飛ばす、従僕や老臣を追出すなど、根本的革新を施行されたので、家は忽ち空となり、臺所まで閉鎖主義を取られて、淋しさ言はん方なきに至つたと云ふ。

如何にもフェネロンも言つた通り、女は貪慾に掛ると、男よりも極端に奔ると見える。其の貪慾が如何にも陋劣で、吝嗇極まると云ふ。故にフェネロンは、其著「女子教育論」の中に、女子を戒めて曰ふには、節儉の變じて貪慾とならざらんとを注意し、女子に斯慾の極めて可笑しきを詳に知らしむ可し。貪慾は得る所少うして、名譽を損すること多きものなり。大徳用となるものは、家政の整理にして、陋しき吝嗇にはあらざるなり」と、成程節儉、經濟と云ふは、常に女の貪慾の源である。故に餘り口八釜敷く、之を矯正しやうとするのは宜しくない。是れは善良有益なる性癖の、極端に陥つたのである。是に由て考へて見ても、能々解ることであるが、平居女の貪慾と云ふものは、儲け主義

の方よりも、寧ろ失ふ恐れの方である。即ち貪慾と云ふもの、實は吝嗇と云ふ文字が適切である。溪壑飽くなきの慾などはない、一攫千金などの大慾望もない。女は、纖弱にして、働きの出来ぬ者であるから、又子供の世話や蓄積の心配ばかりに、直接従事して居るから、失ふ恐れ、男子よりも多きは、當然の事と思はれる。クレビエ、ジャミン氏の説に據れば、女の書法は、男の書法よりも寧ろ消極的貪慾を示して居ると云ふことである。

時としては、又或一種の婦人は、奢靡と世間體を作る心があつて、敢て義捐の心あるでもないが、唯無暗に消費する癖のあることがある。切言すれば浪費と云ふことは、貪慾ではないけれども、然し鷹揚とも云はれぬ、兎に角正秩の立つた心ではない。是を以て余は茲に斷案を下して曰ふ、女には一種の傾癖があつて、是非教育に依つて矯正しなければならぬものがある。之に家事、經濟を教ふるの、は、營に節儉をばかり教へるのではない。家事の整理、費用、上適度を守る事、一種の出納哲學と云ふやうなものを教へるのである。

女性の虚榮

余は尙歩を進めて、利己主義の精神的形式を帯びて居るものを論究しなければならぬ。此等は總じて自愛と云ふものに包含されて居るけれども、其の發現する方法が千態萬狀である。其中最も女性に特別固有なるものは、何であるかと云ふに、無論それは傲慢ではない、是れは寧ろ強者の惡癖である、纖弱なる女性に好適の傾癖は、虚榮である。ツレムザ夫人の言に曰く、同一の原因に依りて、男には傲慢の念起り、女には虚榮の念起るものなり。云々と虚榮は其の外見は、社交的情癖であるけれども、其の性質は、根本的に利己である。女性の利己主義、即是虚榮である。フェネロン曰く、女子に虚榮ほど恐るべきものはあらず、歡心を釣らんと欲する、激しき慾望より起り來るものなり」と。

乍併虚榮は、男に稀であるといふ積でない、余一日某夫人の社交界に名あるを、奇貨居く可しとなし、夫人が女性特有の性癖と視做す所如何と問ふたところが、夫人は明に余に答て「虚榮なり」と曰つた。尙夫人は語を繼て曰ふには、若し此の主癖がなかつたならば、女の智巧と其の矯情術とは、確に女をし

て、巧妙なる外交家とならしむるでありませうが、不幸にして女は虚榮の爲に、屢次欺れ易いものであります」と。或時余は有名なる外交家に邂逅し、語るに此の言を以てしたところが、外交先生の曰ふには、それは虚言である、何うも人は男が虚榮家でないと思つていかぬ、男女何れが虚榮家であるかと云へば、確に男である、男子は十に八九までは、虚榮の爲に誤る。公生涯に於ても、私生涯に於ても、虚榮の爲に欺かれる。特に言はなくて可いことを言つて了ふやうになると、如何にも虚榮の爲には、何んでも知つて居るらしく、所謂物謙顔を示すのである。自分が豪え、自分が立派である、自分に手柄があると云ふやうなことを吹聴せしむるものは、虚榮である、それで失敗して了ふ。今男子の虚榮の著しき手本を示さうならば、人は知る、婦人が社交界に於て、男を釣らんとするとき、如何なる秘訣を用ゐるか、男を釣る唯一の妙法如何は、少しく智巧のある婦人ならば、直ぐに認める。決して自分の知識を示すやうなことはしない、却て男の知識を褒めそやして、之を認めんことを務める。初には男の話す所を悦ばし氣に、感嘆を拂ひつゝ、謹聽して居る。初對面の時は、

斯くして歸つて来るが、頓て復た遣つて来て、自分が長上の御方とお話をすることの出来るのは、如何程名譽であるかを話して、爾後屢々膝前に來らんとことを申して行く。其後度々遣つて來る、自分と共に大勢の人をも伴れて來て、其の警咳に接せんこと、親しく御教示に預らんこと、若くは以來昵懇にして頂きたい由を申出でしめる。さうなれば最早しめたものである。男の虚榮をさへ温めることを知れば、即ち馬鹿になればなるだけ、それだけ男を虜にすることがよく出来る。

是れ實に人心を穿つた話である。若し果して此の如しとすれば、虚榮は男女兩性の根底に於て、殆ど相等しいと云はねばならぬ。但だ其の外見と名稱だけが違つて居る。男子固有の虚榮は、寧ろ倨傲と稱すべき性質のものである。俗に言ふ馬鹿自慢と云ふ方である。人の尊敬を待ち、之を求めつゝあるが、威張つて之を受ける、中心には、己れ程豪え者はないと思つて居る。

女性の虚飾

然らば女子固有の虚榮は、何であるかと云ふに、それは寧ろ虚飾と云つた

方が尙適切である。中心より言へば、人の氣に入らんとする要求である。時に空漠時に無意識のこともあるが、然し人の注目を惹かんと欲する熱烈なる心情である。人の注目と云ふけれども、就中男の注目を惹かんとするのである。言ふ迄もなき事である。虚飾は乃ち其の心情要求の發して、外に見はれたるものと視て可からう。ロシエフコールの言に曰く、虚飾は婦人の氣質の根底をなせりと。婦人は其情を抑へることが出来ても、其の虚飾を抑へることは、中々六箇敷い、如何にも人の氣に入らんとすることが、女の性質の要求である。何となれば是れは愛される必要條件である。或は是れが女の運命かも知れぬ。氣に入らんとすることは、其の社交性に取つて、必須缺く可からざる所である。其の唯一の武器と言つても過言でない。何れにしても生存競争に於て、大切なものである。人の氣に入ると云ふのは、女の方である。其が唯一の主權である。此の主權のみは、女に許される。又是れが至上の主權である。ことを、女は能く心得て居る。是を以て一たび人の氣に入つたと悟つたら最後、最早己の主權は立派に設定されて、地盤が強固安全であると思ふから、此上

なく満足する。設令之を濫用する心がなくとも悦ぶ。ルナンの言に、斯ういふことがある。女に。諂ふ。最大の術は。之を。恐れて。居ると。表明する。事である。と。成程恐れて居る風を装ふときは、女は此上もなく悦ぶものである。

フエネロンの言に曰く、男子をして、權利と名譽とに導く道は、女子に閉塞せるが故に、女子は心身の雅美を以て、之を補はんと務む。是に於て乎、其の會話は情味ありて耳に快なり、是に於て乎、美容及び一切の外的艶麗を好み、粉飾などには熱中しつゝあるなり、帽巾、リボン、毛並、色の選擇等、是れ實に女子に取りては、重大なる事件なり。と。此言には虚飾に關する、主なる事柄を輕妙に諷示して居る所が見える。如何にも人の氣に入る術には、種々の方法があつて、女は必ずしも、其の最善なるものを選ぶと限つて居らぬが、然し是れは男の好惡に依つて、裁判する結果で、一の方法が氣に入らぬと見て取つたときは、他の方法に出ることを知つて居る。

乍併歡心を釣る幾多の方法の中、其の最も驚くから傳はつて、又其の最も確かなるものは、ツマリ最も簡易なるもので、美即ち是である。美人と見られ

た。き。望。み。は。婦。人。大。多。數。に。取。つ。て。其。の。虚。飾。の。主。性。と。も。云。ふ。べ。き。も。の。で。あ。る。仕。方。が。な。く。な。る。と。き。に。は。精。神。に。立。戻。つ。て。形。體。美。容。貌。美。の。代。り。に。精。神。美。氣。質。美。を。追。求。し。温。雅。親。切。の。容。を。装。ふ。の。で。あ。る。是。に。於。て。乎。愛。嬌。と。云。ふ。も。の。が。出。て。來。る。乍。然。美。人。と。な。ら。ん。と。す。る。程。希。望。す。る。も。の。は。他。に。何。に。も。な。い。又。精。神。及。び。氣。質。の。美。な。る。婦。人。で。も。其。の。精。神。其。の。温。雅。若。く。は。其。の。親。切。を。誇。ら。な。ければ、あきらめがつかぬ。

女性の化粧癖

美人に見られたい、と云ふ女子自然の望みの結果として、其の最も普通一般のものは、化粧である。故に化粧慾に就て、少しく研究して見なければならぬ。マダム、ジ、メンソンの曰ふには、おのれ百回も語りさかしても、更に効験のなき事一つあり、貴嬢方の化粧の事即ち是なりとす。貴嬢方の化粧は、質粗なりと思はれず、此の如き小さき女心と弱質とは、打克たざるべからず。或女子の如きは、故さら夜間頭髮を捲縮して、自然に縮髮の者なりと思はしめんとするものあり、貴嬢方は、此の如き者の真似をなすべからずと。善き

訓戒と云はねばならぬ此の如き訓戒は何れの時代何れの國に於ても必要なり化粧の悪魔は女性昵近の悪魔なりとは穿ち得て巧みなる言葉である。ロビンソン嬢は自分の姿を水鏡に寫して流行の極致に達せんことを務めたと云ふ世に稀なる賢婦人ですら己の容姿に就ての非難若くは品評を中々許さぬ其の精神美に有らゆる稱讃を博すよりも其の形體美に一言の褒辭を呈せられたるを寧ろ悦びとする傾がある茲に特に記して置くべきは婦人は斯くまで化粧を凝すと雖其の爲に男子に如何なる結果を及ぼすかに就て屢々誤つて居る男子が婦人ほどに之を重要視して居ると思ふは大なる心得違である之を嘆く者は格別に其の父と母であるから古來詩人及び文士は多く其の諷刺を父母の口を藉りて言はしめて居るプロートの言に曰く厄介を背負ひたいと思ふ者あらば船と女を引受けさへすれば可い此の二者は饒装するに最も困難なるものであると然らば他の男子は此の小さき女心に於て何を美として好むかと云ふに適度の裝飾なれば審美的方面が見えるからそれを美として愛好する其の外に男の氣に入らんとす

る正直な自白を貴重する男子固有の虚榮に投ずる自白であるからである。ツマリは倨傲なる者でなければ男の常識は之を非難して居る婦人が氣に入らねんとて餘計な化粧を凝すときには確に婦人自ら想像する如く男の氣に入るものでない。

此の化粧癖は年と共に大きくなつて來る頃で可笑くもなる厭らしくならなければ結構である粉白をベツタリ塗りたてた濃厚化粧になると實に嘔吐を催うさざるを得ない。

化粧のみが馬鹿々々しく思はれるのでない婦人が知識及び精神に就て誇るときでも極端になると可笑しい蓋し極端と可笑しいとは親類である。又其の可笑しいと云ふのは男の倨傲に障れば障る程甚しく思はれ積年累代の長上權が女の爲に侵害されるやうなことがあつては尙更變に思はれて笑はるゝばかりであるされば氣に入らんとて如何なる方法に出るも其の餘計に心配すればする程男の氣に入ることが六箇敷いマリウオー氏の言に曰く己の可愛らしいことを忘れて居るならば大に可愛がられる婦人。

は澤山ある。

女性の恪氣

然しながら最悪の結果は、虚榮心が、就中女性の虚榮心が目ら人と比較し、若くは競争しつゝ苦んで居る時である。女と云ふものは、褒めるにも中々六箇敷いもので、他の女を褒めると、直ぐに己を貶す如くに解して了ふ。他の女に與ふる所のものは、乃ち是れ己より奪ふ所のものであると云ふやうに思はれては實に堪つたものでない。然し女は實際此の如き狭い量見を有つて居るから、女同志の間にも、仇敵の心が激しく、時に何とも言はれぬ過酷の惡意を抱いて居る者がある。是を以て比較すると云ふことは、女に取つて、餘程慎まねばならぬ。幼少の時には、成る可く比較熱を温めぬやうにするのが大切である。余の知つて居る少女の中には、之が爲に心が變になつた者幾人もある。馬鹿な考を起したり、惡意を挾んだりするやうになるから、洵に困る。其中に最も妙な者と思つたのは、多年ピアノを習つた少女が、他の者と比較せらるゝがいやさに、何うしても人の前に、ピアノを弾することを承知しなかつた。實際上であつたか否かは別問題として、兎に角多年の間、稽古したものを、人の前では弾じてきかせぬとは、餘程心が倭けて了つた者と云はねばならぬ。中には又家に居りながら、親類の娘が愛嬌を以て、菓子を切つたと云ふのを聞いて、非常に之を憤り、自分は何んなことをしても、菓子を切ると云ふことをしなかつた娘もある。此等の例に照らして見るも、比較と云ふことは、女の子に於て、餘程氣を附けぬと、直ぐに嫉妬と變じて了ふ。

恪氣と云ふものは、愛があつて、其の愛の奪はれるのを、氣遣ふ心より起るもので、寧ろ憫む可く、否、寧ろ貴ぶ可き情であると言つても可い位であるけれども、然しカントの言に據ると、男は愛があるときに、恪氣するけれども、女は愛がなくても、恪氣し、凡て他の女に誘はると、男は、皆是れ己を見捨てた者のやうに思ふと云ふから、女の恪氣には、同情を寄せ難い場合が多いと云はねばならぬ。

女は又嫉妬にも、甚だ捕はれ易い者で、嫉妬は純然たる利己心の一種である。其の本源は、今言ふ競争心より起るものであるが、其の結果に至つては、實

に恐ろしいものである。彼の競争者を排斥しやうとする言動すら、既に恐ろしいものである。乍然種々の慾情が錯綜して、此に入るときには、尙一層恐ろしくなるものである。分けても愛の敵、虚榮の仇となつた日には、終世和し難く、慰し難きものとなつて了ふ。之が爲には、一切の美舉善事を滅却して了ひ、名譽をも打忘れ、宛然狂者の如くになつて了ふ。

此時に婦人は、人を嘲弄侮慢して顧みぬやうになる。少女が學校に居るときには、随分人を馬鹿にする癖のある者であるが、婚期に近づくにつれて了ふ。其時は可笑しいことを恐れるやうになり、嘲笑又は諧謔などを、餘り好まぬ。それが自分の身に關するときは、故意と解らぬ振をする。婚姻に關する諧謔は、特更厭に思ふ。要するに女は虚榮の方面に於ても、愛の方面に於ても、餘り感じ過ぎる。又直ぐに怨恨を含み、輕々しく悪意を挟むやうになる。偶々諧謔を弄するやうなことがあつても、好意上の諧謔ではない、悪意の満ちた諧謔にして、之を兵器の如くに使用するのである。

女性の野心

女は天性野心家であるかと云ふに、少くとも今迄は、野心と云ふ程の野心を外に見はしたことはない。無論今後其の職責が多端になり、今迄男子にのみ獨占せられて居つた業務にも就くことが出来るやうになるに従つて、益々其の野心も顯はれて来るだらうと思はれる。今日の處、學校的野心、學生的競争としては、男子にも女子にも殆ど同じ程度に於て、激しく行はれて居る。世間的野心も、女には中々激甚を極めて居る。何となれば、是れは丁度立派に目立つやうにならう、立派に成功して見せやうとする、一種の競争心である。此の心情の著しき特徴とも云ふべきは、常に個性的に限らずして、良人も子供にも、全家族にも普及する性質を帯びて居るところである。其時若も適宜の程度に止まつて居れば、一種の儀容の原則となつて、美質たるを失はぬのみならず、個性的虚榮も、亦之が爲に自らの權利を失ふことなく、一舉兩得の策となるのである。婦人は又常に己の築きたる、新家庭の名高くならんことを希望するのみならず、心中竊に己の家柄の、良人のそれにも勝つて居らん

ことを希望して居るのである。故に良人に向ひ「所天の家風では然うでせうが、吾里の家風では斯々です」などと、暗に父家の勝れるを誇る氣味がある。男子にも其の心中同じ傾癖があるけれども、餘り目立たない。思ふに是れは、其の人格の尙一層獨立不羈的なるが爲であらう。女子に至りては、個性的の功業が著しくないから、自然に他に頼らんとする傾向を生じ、其の里方及び其の父家の家傳などに依頼する氣味を生ずるのであらうと思はれる。是れ妻の名譽は大抵皆夫に係つて居る、一證となすことが出来る。

又其の證據として、妻は特別に夫の爲に野心を有つて居るのである。夫の爲に野心を抱かぬ婦人は、甚だ罕で、己自らの爲には實權よりは寧ろ爵位、實際よりは寧ろ外見を希望して居る傾きがある。勿論此の如き評判を蒔き散らす者は、半ば男子であると云はねばならぬ。男子は己自ら地位爵位を慾望して居ると見られるのを、恥しく思ふとき、之を妻に嫁して、妻が之を希望して止まぬからなどと、妻の弱點を口實にする癖がある。好い迷惑ではあるが、然し又實際妻の方にも、此の弱點がある。上流社會の婦人になると、良人の爲

に必ず富貴名譽を希望して居る。乃ち是れ上等の野心と云つて宜しからう。

女性の統御心

本章の終に極み、女性の統御心に就て、一言を費さうと思ふ。是れはポープの説く所にして、カントも此説に賛したのである。吾人は此の二氏の如く、統御心を女子の特性と視做すべきかと云ふに、君王の如く、主公の如く、統御するに云ふやうな意味に於ては、賛成は出来ぬ。ポリオル嬢の言に據れば、男子は可配權を要求し、女子は尊敬をのみ要求すと云ふ。乍然男子一般の上に、女權を施行せんとし、就中良人に對して、妻の權利を施行せんとするのは、女子の本分、妻の職責の一半であると言つても差支なからう。然し是れは必要上、茲に出るのであるが、手段が善にして、適宜の度を守るときには、婦人の品位ともなるのである。何となれば、婦人は是れより外に、殆ど何にも行ふことが出来ぬからである。然し之よりも重大な問題は、自分の良人たり、主公たる男子に對して、服従の精神あるのに、眼下の者に對しては、統御壓制的の精神あることである。是れは女將若くは女中頭などに於て、往々見受けらるゝ特性

である。乍然若も之を以て、上から壓せらるゝを、下に對する壓制を以て、償はんとする心より出るならば、卑怯陋劣の心術と云はねばならぬ。但し是れは、女性特有の心で、女にのみ限るとは思はれぬ。部長職工頭などに於ても、屢々見受けらるゝ所である。故に是れは、普通一般の事で、女性特有のものとは云はれぬ。

さなきだに女の貸借書は、最早多きに堪へぬ位であるから、是より上に、尙重なつたならば、大變であらう。然し余は別に面白半分、女の特性でないものを、無理に特性の如くなすりつけるやうなことはしない。茲には唯利己的性癖に就てのみ語つたので、而も其の利己と云ふ陋劣なる心術は、女には、男よりも薄からうと云ふ考である。少くも男に於けるが如く、醜くないと云ふ考である。何となれば、女の利己心は、社交的性質を帯びて居つて、最早幾分か、同情に近い。同情に向つて進みつゝあるから、男子の利己心の如く、唯己のことのみ考へて居るのと、少しく選を異にして居る。

第七章 女性の感性、同情性と社交性

女性の同情心

「女は男よりも社交的生活の爲に作られたやうに思はれる、孤獨と云ふことは、女には尙一層忍び難く、尙一層不可能的であるやうに見える。人は社交的動物と云ふから、男子でも寂然孤獨を守つて、社會と毫も接觸しないと云ふのは、天性にも背いて居るのであるが、然し例外として、又克己とか後悔とかの名義で、跡を山野に潜め、永く孤獨的生活を送りつゝ、自ら完全の域に進んだやうに思つて居る者がある。所謂山中の隠君子、雲煙野鶴を侶として居る者があるけれども、女の隠遁者と云ふことは、餘り聞かぬ言葉である。余の知る範圍に於ては、女の隠遁者はない。マダム、ツ、セウイギエは、女隠者と云ふ文字があると斷言するけれども、隠君子の語は、女性ではない。女は何うしても、好伴侶的に作られた者で、自らも斯く感じて居る。是れ蓋し其性の要求である。亦是れ其の利己に於ても、利己以上に出でしむるものがある所以であ

勿論女は人の氣に入らんことを好む、人に愛せられんことを愛する、然し人を愛せんと欲する要求が尙更に深い。又實は餘程貞操の亂れた場合でなければ、此の愛する要求が人の氣に入らんとする要求の根底をなして居ると信じて差支ないやうに思はれる。實際此の二箇の心情が均しく自然的で、又均しく人心の奥底に根差して居るのである。而して此の二者は、同情の心に於て、相合して一となつて了ふ。何となれば同情心は、相互共通の情である、勿論自ら感せずして、之を人に鼓吹し、若くは人に鼓吹せずして、自ら之を感ずると云ふことは出来ぬではないが、然し是れは例外である。普通の場合と視做すことが出来ぬ。同情心それ自からが、共通の情である、感染的であると云つても可い、人に對して自らも感じ、又其人にも感せしめるのが、同情である。何れにしても、之を感じて之を行ふのは、之を感せずして、之を行ふよりも、遙に嬉しく感せられるものである。處が女性の愛は、自愛的のみでなくして、又他愛的である。今日の實驗論者の語を借りて言へば、利己的と共に、又利

他的である否、此の二心が、女性の心に於て、相衝突するやうな場合には、熱れが強いかと云ふに、寧ろ利他心の方が強いと云はねばならぬ。故にジエクロ氏は曰ふには、心の稀有偉大の犧牲は、殆ど女性に於てのみ認めらる云々と、是れ實に女性最大の名譽となる言と謂ふべきである。

論者或は曰はむ、成程是れは愛の奇蹟とも稱すべきものにして、女が本統に愛するときには、這箇高潔の域までに達するけれども、是れは世罕に見るの事實ではあるまいか。成程愛情的傾向は、女性心理の根本的特性の一であるには相違あるまいが、然しそれが男子に比して、ヨリ強く、ヨリ大なりと謂はれやうかと。

勿論是れは女性心理の根本的特性に相違ないが、然し男子には、此の特性を缺いて居ると云ふ譯ではない。男子とても、或は女子の如く、強く且大に愛することが出来るかも知れぬ。但だ男子の生涯には、愛情的感情は、廣き領地を占めて居らぬ。加之男子の愛情的感情は、其の形式も違へば、其の性質も違つて居る。

若も世の風俗が變つて、女子も男子と同じやうな職業を執り、男子の如き野心を起すことが出来るやうになつたならば、如何であらうかと云ふに、それは余は知らぬ、否、知らぬ譯ではない、之に就て深く信する所がある、乍然之を以て、愛情の女子の生活に於て占むる地域が、男子の生活に於けるよりも狭からうと斷ずるのは、餘り矯激な議論と言ふだけ、を以て、今は足れりとして置く、兎に角現在のところ、世の妻たり、母たり、姉妹たる者は、其の本分が家庭に限られ、子供の搖籃に従事し、社交界の狭き傾分に止まつて、外的事業、手腕若くは精神の業務に關係すること少き丈、それ丈、心の方面に近き生活をして居るものである、換言すれば、愛の深き生活、同情心の深き生活をして居るのである。

母情 II 母の愛

此の同情性には、種々の形状があつて、其の最も濃厚なるものより、其の最も空漠たるものに至るまで、幾階段あるか、知れぬ程であるが、其中に最も著しく、最も美しく、又最も温かなるものは、母情、若くは母の愛と稱するもので

ある。是れは凡ての愛の中に、最も深く、最も廣く、又最も女性に特有なるものである、何となれば、婦人によつては、母たるよりも、寧ろ妻として稱すべき者であつても、是れは普通のとも云はれなければ、又眞個女性的とも云はれぬ。蓋し女の女たる所以は、其の母、と云ふ點に於て、一番著しく、顯はれるものである。男子に取つては、父たるよりも、寧ろ良人である方が、普通にして、且自然的であるけれども、女子に取つては、寧ろ其の反對が、却て著しいやうに思はれる。多くの場合に於て、女(母)の方が、男(父)よりも、深く子供を愛するものである。就中子供の幼き時には、尙更然うである、子供に對する世話は、最も其の專門とすべき所にして、女(母)でなければ、他の人に出來ぬ世話を竭して居るのであるから、子供に對する愛情は、確に唯一無二の性質を帯びて居るものである。彼は其の子供を、心底より愛し、滿腔の精神を込めて之を愛し、畢生の心血を凝で之を愛して居る。生兒の搖籃に、俗に言ふ乳呑兒に、最も純潔なる、最も慈愛なる、又最も利己の分子を排除したる温き情を、天性自然に集注せしめて居るやうに思はれる。若も母の情なるものがなかつたならば、世に無慾

の愛、無我の愛、獻身的の思愛なるものが如何なる程度まで到達するかを知らざることが出来ぬであらう。

是れ實に女子思愛の至上なるものであるから、女子一切の愛情の中には、多少母情が含んで居ると言つて差支なきものである。今此の母情は何に因つて組成せらるゝかと云ふに、身に一物もなく、全く世話する者の儘に任せられて居る微弱なる又脆弱なる稚兒に對する思愛、及び憫憐の情によつて、成立つて居るものである。處が此の慈愛と憫情とは、眞に女の女たる者の心に溢れて居るから、子供から移つて、他の者にも傳り、凡て弱くして、且扶けなき者にも、光輝を發射するのである。此愛は、保護の愛、撫育の愛とも稱するものなれども、最も力のある語を以てすれば、力の愛と名く可きものにして、是れは前にも述べた通り、女性に自然的たると同時に、又必然的であるが、其の集注する所は、弱くして力のなき者、即ち是である。力がなくして、扶けを要求して居るから、此の力の愛が到つて、之を扶けるのである。故に弱いと云ふのが、此愛を吸集するものである。成程一種の邪癖によつて、此の力の愛が、力に

醉つて、殘逆なる事を行ふに至ることもあるけれども、是れは例外である。通常は其心の門が、憫情に開けて居るから、凡て之を要求する者に向つて、自ら溢れて行くのである。而も人の爲に盡せば盡す程、益す盡さんと欲する情が起つて來るのは、愛は自らの犠牲によつて、養はると云ふ法則に依るのである。ア、是れ實に女性の一大義侠と謂はなければならぬ。成程女性の利己、自愛、虚榮、虚飾及び余の先きに語りたる、生存競争等の領分に於ては、此種の義侠は更に見えぬけれども、然し一たび其心に觸るれば、之を感服せしめて、之を感動せしむれば、忽ち慈善の絶頂に高進し、忘己愛他の完全域に到達するのである。

是れは實際であるから、世の道學者、及び教育家などは、始終其處に危険の伏在するのを警告したのである。如何にも同情心、憫情心、惻隱心などは、利己心の對重が、之に釣合を取つて居らぬとき、若くは堅實なる理知に於て、之が釣合を取るものを認めぬときには、道德的危機の原因となることがあるからである。

何となれば、弱きを自白して、憐みを乞ふ者に對するるとき、女性の心は直に之に感じて了ふから、強力を以て之を壓するにも優れる、誘惑力となるのである。憐憫の情は、女性をして最も遠く忘私愛他の道に驅り立てるものである。容易く之をして、獻身的行爲に出でしむるものである。男子も亦保護するの情があり、人の助けを乞ふ者を愛着する心があるけれども、男子の保護心には、多少威張つた所と、喧嘩腰の所があつて、女子の謙抑的、隱晦的なるを好む心と、頗る選を異にして居る。ド・ソソウイ伯の言に曰く、明者なる女子にして、盲人なる男に嫁する者は、屢々見受けらるれども、明者なる男子にして、盲目なる女を娶る者に至つては、世甚だ罕なり。此の如き結婚に出るには、一種の獻身的友愛を要し、吾人男子は、之を行ふこと、殆ど不可能なり云々と。今茲に一々例證を掲ぐる必要はないが、此の同情惻愷の心が、女子をして稚兒の教育、孤兒の教育、及び悪兒童の感化等に、男子の企て及ぶ可からざる事業を行はしむる、最大原因となるものである。

女性の優雅性

女性の同情心は、滾々として汲めども盡きず、兒童の上にも、病人の上にも、又貧民の上にも沛然として溢れ出るものである。何等反對の情慾が、之を妨げぬときは、其の全身より光輝を發し、其の眉目にも、其の言語にも、又其の舉止にも、歴々として顯はれ出るものである。是れ實に女性の温情の秘訣にして、女性は之があるが爲に、世に最も艶麗優雅なる者である。蓋し是れ愛の泉源より出るものにして、仁愛と稱するものを、表明するものである。是れが實に社交性の眞髓である。愛嬌親切の溢るゝばかりなるも、亦之が爲である。男子が一時其の強暴の性を抑へて、其性の愛す可き方面をのみ示さんと務むるのには、此の優雅なる婦人の、集まつて居る所だけである。是を以てウォルテスは曰ふた、婦人は、男子の風俗を和ぐるが爲に、作られたる者と思はる云々と。

女性の口喧性

然し一方に、此の如く優雅親切の情あるのに、何故他の一方には、口八釜敷く、氣六箇敷き性が、屢々顯はるゝのであらうか。女は實に口論好きであると

云ふは、一般に認定せられた説にして、口喧性を以て、女性特性の一となすことは、嘗に諷刺滑稽嘲弄を事とする、文士連のみならず、嚴肅謹嚴なる道學先生も、皆之を口にし筆にして居る所である。昔より今日に至るまで、モンテ・ギユよりウイーウエに至るまで、皆然りである。就中ウイーウエ氏の如きは、此點に就て、最も深刻に女性を描寫したのである。氏の言に據れば、婦人は實に口八釜敷く、氣六箇敷くして、自分に必要な人でなければ、決して温和な者でないと言つたが、是れは餘り罵倒し過ぎた議論である。無證據の罵詈嬌激の偽言と謂ふべきである。實際を言へば、婦人の心と云ふものは、各種の感情音階を有するもので、一時自分の特性の如く示すものでも、忽ち之を極端に持つて行き易い性質のものである。前にも述べた通り、利己心と虛榮心の傷けられた場合には、悪意を挟み、攻勢的に出で、飽までも慰撫し難き態度に出ることがある。愛の毀損せられたる場合にも、又格氣に依つても、此の如き口論的態度に出ることがある。愛が侮辱されたとき、若くは單に威嚇されて、恐慌を來さんとするやうなときに起つて來る憎恨は、實に恐ろしくして、憎恨

の最悪なるものと云ふべきである。是れ實に古來人心を描きたる者の、皆均しく示證したる所にして、吾人は今日に於ても、毎日眼前に之を目撃しつゝある事實である。故に是れは人心の永遠不朽の歴史と云つて、差支ない。女は男よりも、心の方面の生活を送つて居る者であるから、此の一事に照らして見ても、此の如き心界の嵐に逢ひ易き性質の者たることが瞭である。吾人は之を能く記憶して置く筈である。

若夫れ喧嘩好きと云ふ、特殊の非難に至つては、滑稽の沙汰と云はねばならぬ。就中夫婦喧嘩なるものに至つては、尙更然りである。羅馬の諺に、喧嘩せぬ者は、獅身者なり」と云ふことがある。如何にも夫婦は喧嘩する者と、相場が定まつて居るやうに思はれる。某僧老同穴者の墓碑の上に、左の如き奇文字が記されてある、道途の人よ、佇立して天下の一大奇觀を見よ、一生喧嘩せざる一夫一婦即ち是れ」と。

然しながら此の諧謔は古めかしいが、多少の眞理を藏して居ると云はねばならぬ。モンテ・ギユは眞面目臭つて曰ふには、夫に、不服を云ふは、妻の持

前なり云々と然れども喧嘩するには必ず二人を要するが故に、非難も亦相互的である。實を言へば女でも男でも内に居るときより外に居るときは、ズツト愛らし。家族の者と接するときより、外來の客に接するときの方が、尙一層愛嬌のあるものである。此の傾向は、誰にも知れきつて居る所で、彼のフオンツネルが家庭に在りても依然温容快心を持せりと稱讚した言は、賢者中の賢者の性格にのみ該當する。至上の賛辭である。乍然教育上能く此事を考へて、少女をして此の傾癖に陥らぬやう、豫め用意警戒するのは、洵に結構な事である。若夫れ婦人が本統に反抗し易き性を有つて居るとするならば、それは余の前に記した如く、其の性質を考へて見れば自ら解る。婦人は衝動の激しきものである。表情の容易きものである。時々不羈の心を起すものである。加之ならず、同情心それ自らも、本能的である。丈け、それ丈け彼の利己心の如く、其の要求と其の感觸とあるを記憶せねばならぬ。是を以て多少氣六箇敷き所あるから、教育上餘程用心せねばならぬ。嘲笑の如きは、最も其心を痛めるものであるから、男の兒に對して左程でないとするも、女の子に對し

ては、断じて之を避けねばならぬ。

女性の私愛

女性の同情心には、固有の特性がある。今之に就て、尙重ねて語るのは、無用の業でなからうと思ふ。

先づ第一に、其の最も主なるものは、女性の同情心は、思想よりも、寧ろ人に趣味を有つて居るので、常には個人的で、人と密接の關係を有つて居る。キゾ一夫人の言に曰く、吾等は一一般の事件に關係を有つこと甚だ尠し」と。是れは恐くは大半教育及び風俗の結果だらうと思はれるが、然し是れは事實である。尙一層廣い教育を授けて、其の精神を開發したならば、必ず女子の仁愛をも、其の眼界を廣潤ならしむるであらう。今日に至るまで、博愛仁慈の心は、婦人の徳生(道德的生活)に於て、比較的狹隘なる位地を占め、彼の多少排他的傾向ある、個々の私情のみ、婦人の心を横領して居つたのである。

アルフオンス、ドレーの言に據れば、愛のある婦人と云つても、自分の愛の爲にのみ仁腸を有つて居つて、其の慈善、其の仁愛、其の憫憐、及び其の赤心等

一切の勢力は、唯だの一人の私益の爲に吸収されると云ふ。然し是れは激發
熱中した愛の事である。但だ概して言へば、博愛、仁慈の心は、其の愛情の
傾く所の者に對する、私人的情愛を有つて居るものである。ジラルデン夫人
も曰つた、該博なる仁人は、婦人の事にあらす。婦人は神に祈るときにも、何人
かに反抗する精神を以て、祈る容子ありと、慈善を行ふときにも、何人かを目
指して行ふ。又其の何人かを目指して行ふと云ふ點に於て、男子の慈善より
も、一層嬉しく感ぜられるのである。

婦人が斯く偏屈的及び排他的愛情に傾いて居るのは、何の譯であるかと
云ふに、それは過去に於ける境遇が、全く夫婦的及び家族的であつた爲であ
るけれども、併し之が爲に、アミエルの如く、女子は天の攝理上、男子に従屬す
べき者であると云ふやうな議論を、大早計に持出す筈ではない。寧ろ教育に
依つて、除々と之が改良を行はんと務むるものが、男子の義務である。アミエル
氏の言に據れば、女は、男子に吸収されて了ふのが、女の女たる所以で、妻なら
ば、良人をのみ、本尊と拜み奉れば、それで可いのであるが、男子は之に引き換

へ、妻の崇拜など、其の生命を吸収されて了ふやうなことがあつては、眞個男
兒と云はれぬ。半男兒である世間からも、輕蔑されるし、妻自らからも、心の中
で之を輕蔑して了ふ。本統に愛のある妻は、自分の最愛なる良人の光明の下
に、自ら消失せんことを希望し、己の愛を以て、良人を大ならしめ、良人を強か
らしめ、良人を活動せしめんことをのみ望むものである。是れが實に、妻の本
分である。妻は、良人の爲に作られ、良人は、社會の爲に作られた者である。前者
は一人の爲に竭す可く、後者は衆人の爲に竭す可き者である。二者各々此の
原則によらなければ、其の平安、其の幸福を認むることが出来ぬ。是れ實
にアミエル氏の議論であるが、面白い議論と云へば、面白い議論のやうなも
の、眞理を半分以上も缺いて居る。婚姻して夫婦睦しく暮して居る時では
へも、妻の運命が、此の如く良人に吞まれて了ふことは、逆も眞理とは思はれ
ぬ。果して然りとするならば、婦人と云ふものは、婚姻以外に、何等の道德的天
職を有つて居らぬ者と云はねばなるまい。妻ならば、良人を離れて、何も出來
ぬ者と謂はねばなるまい。ア、是れ實に辛い運命ではあるまいか、股合婚姻

したからとて、良人崇拜に吸収される以外に、尙爲す可き美事善事あるに相違ない、良人たる者も、亦若果して實力あらば、決して此の如き事を、其妻に要求せぬであらう。堂々たる男兒にして、此の如き云爲に出ると云ふのは、耻しい事ではあるまいか。

されば茲に眞理として掲ぐ可き事は、女子の愛情に、唯一の排他的目的物あることは、自然的の事にして、且結構な事ではあるが、然し其の仁愛、其の憫憐、及び其の同情は、如何なる形式を帯びても、尙それ以外に、光輝を發する。この出来る而已ならず、是非斯の如く、光輝を發するやうにしなければならぬ。ものである、又實は自然茲に傾いて行くものであるけれども、然し教育を以て、茲に導くやうにしなければならぬ。婦人は家國に盡す可き所を、必ずしも充分識得して居ると限らぬ、彼等にして、若も愛國の衷情を有つて居るならば、随分と熱誠的であるけれども、乍併多くは母の愛と、家族の愛が、其心を満たして、他の一切の愛情に、門を鎖して了ふものである。

無論男子は、尙一層活動的に、國家を愛するに相違ない、女子の愛國心は、熱

烈ではあるけれども、偏狹にして、地方的である。故に教育は、女子の愛國心を、尙一層廣く、且大きく養成しなければならぬ。

人道の觀念に至ても同じことである。女は己が家の門前に泣いて居る。一貧民があれば、之に母の慈愛を施すに躊躇せぬが、然し一般人民の貧苦の爲には、左様に痛痒を感じない。是れ亦教育に依て、矯正しなければならぬ點である。即ち其の仁愛を博愛的にするやうに、其心を廣濶ならしめなければならぬ。

女性の輕薄

女子愛情の特性として、輕薄と云ふことをも算入すべき筈であらうかと云ふに、一般の輿論は、之を首肯するものゝ如く思はれる。曰く恒在なるは女子の性に、あらず、曰く女は羽毛の風に舞ふが如く、始終轉々すと、然し余は思ふに、一般の輿論は、此點に於て誤つて居る。女子の心に於て變る所のものは嗜好である、其の我儘な心である、其の薄弱なる志望である、其の物好きなる虚飾等である。乍然此等のものに、信を措く者こそ、馬鹿である。此の輕佻浮薄

なる心は、厭倦、閑居及び思想と知識との缺乏より起つて来る者である。之に眞面目なる嗜好と知識上の資料とを提供すれば、自然に其の傾癖が直つて了ふ。若夫、愛情、情愛等に至つては、女でも、確に、男の如く、堅固にして、且、永續して居る者である。余は思ふ、男の方が、却て秋風を吹かせ易い、直に飽き易い心がある。女の情愛は、寧ろ益す深くなつて、之が表明をも示せば、之が爲に辛い事をも忍んで行く。アリの言に曰く、不幸に際して、決して脱去せざる者は、獨り女あるのみ。彼は男と境遇の變遷との間に、後見人の如く立てられたるの觀あり」と如何にも良人の不運を見て、離縁して行くが如き女は、殆ど皆無と云つて、差支ない。若も本統に愛があつたのに、出て行く者がありとすれば、それは悲惨なる境遇、殆ど病的場合と云はるゝやうな時でなければ、男の方が、傲慢無情にして、女を蔑にするやうな場合にのみ限るのである。

女性の友愛

本章の終に、菘み、友愛も亦是れ女子の特性と、視做すことが出来るかを論じて見なければならぬ。人は曰ふ、女は、始終、多少、情愛的、性質の者で、殆ど、友愛、

を排除して居るとシヤムフォールの如きは、先天的に女を以て、愛情の資格なき者の如く、視做して居るから、是れは論外であるが、ラブルエールに至つては、友愛の點に於ては、男は女に勝つて居ると云ふ議論である。此の以前には、モンテペギエは、女の心は、斷金の契を、結ぶ程、堅固でない、と云ふ意見であつた。

余は此等の意見に反對して曰ふ、膠漆の如き堅き交りは、男子にも女子にも、甚だ稀なるには相違ないけれども、友愛に於て、女子が男子に劣ると云ふ理由はない。男に出来る事は、確に女にも出来る。女子の友愛に、厚く、且、忠實なることは、實に、感心である。他に比す可きものなしと言つても、過言ではない。人は曰ふ、友愛には、冷靜なる理知と、堅實なる判斷とを要する。然るに女子は、之を有つべく、餘り甚だ情熱に過ぎる云々と、ロシユフォールの言に據れば、友愛は、情愛を解せる婦人に取りては、無味淡泊に過ぎると云ふ。此等の言は、固より、全然皆誤れりとは、云はれぬけれども、余は其中より、眞理として採用するのは、唯左の事實に過ぎぬ。曰く、女子の友愛は、男子の友愛よりも、情熱的。

活動的及び感動的であつて、判斷的部分を缺て居るから或は迷ひ易いかも知れぬ云々と。

尙深く歩を進めて、事物の理を精密に檢覈するに、友愛は先づ男女間にはない云ふ、又在る能はずと云ふ、何となれば始終他の情愛に移り易い、次に女子と女子との間(女同志の間)にもない云ふ、何となれば、餘り輕薄過ぎる、若くは餘り競争し易くして、直に格氣に變じて了ふ云々と。

余は是に於て、女同志の間に於ける友愛に就てのみ語る積である。勿論彼の少女間の美しく愛らしき友愛は、如何に深厚にして、且發情的なるに係らず、其中の一人若くは二人共に結婚した後には、他の新たらしき情愛に分れて了ふから、常には依然同一の性質を保つて繼續して居ること甚だ稀なるは申す迄もなき事である。然し是れは女子にのみ限つた譯のものではない、男同志の友愛も此の如き場合には、殆ど同じ状態になつて了ふ。女は又往々異性の人と交ることを好むと云ふ事も事實であるに相違ないけれども、然し此の事實あればとて、本問題に取つて、大した關係はない。尙又女同志の交

情は、多く淺薄にして、女子は男子よりも友愛と云ふ美名を濫用するの傾きあると云ふ事も、又々眞理たるを失はぬ。是を以てポール、ブルゼは左の如き言を發した。男同志の友愛と、女同志の友愛とに異なる所のものは、前者は、絶對的信用なければ立つ能はざれども、後者は之を要せず。女同志の友愛は、相互に其の語る所を、必ずしも皆信すと云ふ可からず、常に一種の猜疑心を挿む。且、尙且相互に深く愛するを妨げずと。此言は純然たる嘲笑とも思はれないけれども、然し若も果して此の如しとすれば、今の所謂友なる者が、根本的に輕佻浮薄なる女であつたならば、如何であらうか、矢張りそれでも、之を信用して愛し合ふであらうか、是れ實に未定問題である。成程女同志の友愛は、男同志の友愛よりも、六箇敷いか知らぬけれども、然しそれが不可能であるとか、又は稀有であるとかと云ふ事は、余は信せぬ。

シデロの言に曰く、女は相互に相愛せず、但、凡ての女同志の間には、一種の密契ありて、宛も同敎の僧侶間にあるものゝ如し、相互に憎み合ふと雖、又相互に防ぎ合ふものなりと。婦人の秘密契合に就ては、シヨペンハウエルも

語つて居るが、婦人は競争を排除せず、共同責任を帯ぶと云ふ事には、多少の眞理あるには相違ないが、是れは寧ろ女でも眞面目に結合し得ると云ふ證據になる事である。無論此の如き結合は、友愛ではないけれども、乍併友愛を行ふ資格なしと云ふ證據には、尙更ならぬと云はねばならぬ。

女は異性の人に對してすら、立派に友愛を保つことが出来る、此の如き場合の、餘り見受けられぬものは、其罪女の方にはない、此の問題は、充分研究するに足る趣味を有つて居る、中々錯綜して居ることである。女は異性の人に對して、男ほどに誠實堅固なる友愛を有つことが出来る、其時温情優雅の心に於て、男子に勝つて居る。トマの言に曰く、男は概して友愛の風致よりも、寧ろ働作に重きを置くものなり、是を以て慰撫する意を以て却て傷害することあり、其の最も温き心情と雖、細かなる事には行き渡らず、細かなる事と雖、没す可からざる價あるを記せざるべからず、婦人は之に反して、緻密なる情を有して、萬事に行き渡れり、彼は友の黙せる時にも之を推知し、友の怖れる時に

は之を獎勵し、友の苦める時には之を優しく慰籍すと、ア、是れ實に眞理の言である、女子の友情は實際此の如きものである。

ラブ・エールの曰ふには、善人の美質を備ふる美婦人は、世に最も交りて嬉しきものなり、此の如き婦人には、兩性の徳は悉く之を認むることを得べし云々と。

美醜如何に拘らず、眞に女と云はるゝ女ならば、又同時に善人であるならば、其の交情最も嬉しく、又最も悦ばしき人と云はねばならぬ。人若し此の稀有の珍寶、世に之なしと言ふ者あらば、之に際會したことのなき、不幸者と云はねばならぬ。吾人は寧ろ其の不運を憫まざるを得ない。兎に角、友愛は、女の心之に到達し得すと云ふが如き議論は、承服し難き議論と云はねばならぬ。此の如く論じたからとて、決して女の堅實なる愛情、誠實、正直、安固なる交情及び其他の美質を損益するものではない、此の如く論じ來るときは、女子は決して男子に劣るものではない、女子の特性を一々篩にかけて見れば知れることである。余は故さら之を詳しく論じたので、是れは吾人の所謂女子教

育の上に大なる關係ある事であるから、決して無用冗長の業でなからうと思ふ。今日まで女子に向つて、投げ付けられた罵詈褻笑の言は、此種の研究によつて、自ら消えて了ひ、其の探る可き言論と雖、如何なる程度まで探る可きかは、矢張り此の研究に依つて定まるのである。何れにしても、女子教育に就て、餘り多大の希望と理想とを有つて居らぬ人々は、女子の特性を知らぬ者、若くは信用せぬ者、又は尊敬せぬ者と謂ふ可きである。

第八章 女性の感性—高等感情

女性の利己心と利他心

余は女性の感性に就て、一々詳しく研究したが、尙其外に、高等感情とも稱すべき部類のものが遺つて居る。高等感情と云ふのは、別に特別の人々を、目的として居ると云ふ譯ではなく、但だ普遍的、若くは理想的とも稱し得べき

性質のものを、目的として居るから、斯く名づけるのである。普遍的及び理想的性質のものとは、名譽、正義、眞理、神明の如き、即ち是である。女子は如何なる程度まで、又如何なる形状の下に善の觀念、眞の觀念、及び宗教的觀念等を感知して居るか、と云ふことは、何人も之を否定せざる所にして、凡て人間的の事は、女子も亦之を胸に藏して居るに相違ない、少くも其の種子位は、有つて居ること明であると言ふけれども、但だ特別例外の場合でなければ、此等の高崇なる志望觀念は、女子の心には強大ではない、大抵は利己的若くは情愛的傾癖の雜木蔓草の蓬生して居るが爲に、窒息せられて居ると云ふ事は、能く人々の口にする所である。曰く婦人は、餘り情に熱し、易くして、義の程度を知らぬ、日々婦人は、餘り饒舌多言にして、秘密を安心して托することが出来ぬ、曰く婦人は、其の無欲の愛情を行ふにも、餘り私人的に失して、正平を缺いて居る、云々と種々様々に、婦人を輕侮する言論を吐く者が多い。

因て余は今茲に、女性の心に、大情小情が相戦つて紛擾を極めつつある利己心と利他心との混合結果に、少しく眼を注いで研究して見たいと思ふ。

女性の多感性

乃で先づ女子をして、多感ならしめ、繊細な事にも直ぐ傷心せしめて、往々病的状態にまで至らしむるのは、自愛の爲であらうか、將た又愛し若くは愛されたき、要求あるが爲であらうかは、別問題として、兎に角女子は、反對と云ふことを忍ぶ力の甚だ弱いものである。愚弄をも嘲笑をも、忍容せぬものである。愚弄と云ふことは、冷酷なる攻勢的の云爲である。處が女には、交戦と云ふことも、其の主性となつて居らねば、冷酷と云ふことも、其性に合はぬことである。女は復讐的行爲に出でて、得る所なくして、寧ろ失ふ所多きを殆ど本能的に感じて居るものと見え、返報するなどと云ふ事を餘り致さぬ。ミジュレ氏は、社交的性質のある女には、凡て批評的、議論的、論争的の事は、其性に合はぬから、設令自分が、其目的物となつて居らぬとも、太く氣持を悪くするものであることを、能く研究して曰ふには、女は、憤激、愚弄を憎むものなり、故に、其の感ずる所を以て、之を捕捉せよ、愚弄と憫憐とに溢るゝ其の珍らしい心を以て、之を捕捉せよと、アルフオンス、ドーデも、殆ど之と同じく語つて曰ふ

には、婦人は子供の如く、民の如く、凡て質朴、眞率なる者の如く、嘲弄を嫌惡す、蓋し嘲弄は、婦人を狼狽せしむるものにして、婦人は之を愛の迷想、及び感激と反對なるものと感知するが爲なりと。

女性の饒舌

婦人の性質に、特別固有の感情の奥底に、矢張り利己心と、愛情との混合物を認むるのである。格氣即ち是である。ランドリオ僧正の言に曰く、婦人は萬事に就て格氣なる者なり、其夫に就き、其の子供の結婚したる者と否ざる者、いに就き、其友に就き、又其の聽告、白師、人の懺悔を聽く僧侶に就き、一々格氣す。其の動き易き心、其の熱き想像は、此點に就て、一種の幻影界を作るものにして、此の幻影界は、病的精神の夢想以外には、實在せざるものなりと。多くは其の虚榮に於てのみ、氣に障るものであるけれども、是れは言ひ難いことであるから、己の名譽が、毀損せられたと云ふ、是れはモット貴く高尚に聞える、多くは心を欺いて、利慾、傲慢、虚榮、野心等の上に、名譽の大風呂敷を被せる癖がある。

乍然其の原因の如何に拘らず、恠氣ほど人の心を憤懣せしめ、之を不義にし、之を猜疑深からしむるものはない。一たび恠氣に刺激せらるれば、如何程善良なる、又如何程温和なる性質でも、直ぐ悲しくなり、憂鬱となり、苦しくなり、人が之に接するとも出来なくなつて了ふ。恠氣は女の憎惡、怨恨及び殘逆なる復讐の原因である。此等の事に就ては、多くの道學者が女性的心を描くときに語る所にして、余は既に之に就て前にも略述したのである。女は多く復讐的、殘酷的、不和解的にして、其時には、如何程敵視しても、一向顧みぬに至ることとは、實際である。オクスターウ、フイエの言に曰く、女は不忠實を何とも思はず、宛も荆棘中に於ける蛇の如きものなり。彼は其中に屈伸自在の働きをなして、男子の夢想せざる行動に出るものなり」と。

若し恠氣が、其の根源虛榮にのみ基て居るとすれば、左程深くなからうから、悲惨なる結果を來たすやうなことも、なからうと思はれる。若又其の原因が、深い愛でありとすれば、左程毒氣を帯びて居るやうなことはない、何となれば眞實なる愛ならば、如何なる苦をも忍び、克己獻身的の事をも愛するか

ら、そんなに容易く憎怨の結果を齎らすやうなことはしない。此の恠氣の恐る可く、且變に複雑して居る性質は、利己心と愛と、互に相戦つて、一勝一敗しつゝある、錯綜した原因に基くからである。

女性の恠氣

古經に曰く、恠氣なる婦人は、口に鞭あり、此鞭は其舌なり」と。乍併女性の饒舌、多言、好奇、輕忽、惡口、讒言等、此等は皆恠氣の外に原因のあることである。恠氣其れ自らも、余が今迄女性の心理として述べ來つた所のもの、混合結果である。即ち己を目立たしめ、己をのみ愛せしめ、やうとする。虛榮心、愉快に暮さうとする。社交性、眞個表情の要求を有つて居る。同情心等、婦人一切の感情の總合した結果である。早く言へば、婦人が社會の大利害、大事業を離れて、始終家庭に於て、想像と舌とを自由に動かされるやうな、手業に従事しつゝある閑居的、及び座職的生活の結果と言つて差支ない。婦人は外より話を聞く機會の稀なる丈け、それ丈け新奇なる事を聞きたがるのは、蓋し自然の情と云はねばならぬ。又大事に關係すること、尠い丈け、それ丈け小事に就て饒舌

を弄するに至るは、是れ亦自然の情と云はねばならぬ。仔細に研究して見るときは、婦人の舌に關する罪は、大抵皆此等の原因に歸すべきである。然し何と言つても、是れは婦人の弱質、短所たることは、拒否すべからざる事實である。

男子も亦饒舌である、多言である、輕忽である、是れは言ふ迄もなきことである。其譯は男子も亦虛榮心がある、社交性もある、即ち多少表情的及び共通的性質を帯びて居る者である。若も繁劇なる名利の巷を離れて、日夕事なく暮すと云ふやうな晩には、此等の事に就ては、矢張り女子と五十歩百歩であらうと思はれる。但だ其の方法が違ふ、男子も亦饒舌を弄するけれども、之に重きを歸する程度が違つて居る。男子の方は、寧ろ饒舌を遊ぶ方である。自分の一番包み難い秘密は、己れ自身の秘密である。故に何となく心情を吐露したき氣持がする。或は倨傲の大言を吐く、然し饒舌の女と違つて、人の秘密は、中々能く守つて居る。女が是れは極秘密ですけれども、貴女にはッかりなると、遂に口から滑らして了ふと、大に選を異にして居る。人の秘密は、女には

脊負ひ切れぬ重荷である。何時か又は何處にか卸して了ふ。加之ならず男子の欺辨には、制限があると思ふ。此等の欺辨は、多少普通の性質の事業若くは職業的事に屬して居る。又大した罪はない。毒にも藥にもならぬ事が多いのである。

若夫れ女の饒舌に至つては、萬口一致である。余は別に女を罵倒する爲に論ずるのではない。女の饒舌は、男ばかりでなく、女自らも自狀する所である。エラスムの言に曰く、舌を弄する點に於ては、七人の男ありと雖、尙女一人に及ばずと。某貴婦人の自ら警戒する言に曰く、おのれ人に接せんときには、多言に失せざらんやう、常に用意警戒しつゝ、舌の上の數限りもなき罪を避け、我人共に語る可からざること語りて、相互に心を傷めざらんことを努む。就中自他の秘密に關する事は、必要あるにあらざる上は、決して語らぬ決心をなしぬ。訪問なども、出來得る丈け度數を減じて、自らも讒言を云はねば、人の云ふ讒言を聞ても、悦ばぬ風を装へり云々と。

鏡舌問題に就ては、區別を立て、論じなければならぬ。先づ第一は、言葉の

分量問題第二は言葉の品質問題即ち是である。分量を過すと云ふからして、早や既に一種の弱點である。何となれば多言に失するときは、必ず静思を缺くに殆ど定まつて居る。フェネロンが多くの婦人の語る所は、大抵皆言多くして、實少しと曰つたのは、明に婦人に取つて、難有い言葉ではない、然し切言すれば、此には毫も道德に抵觸することはない。余の知つて居る婦人の中には、随分と饒舌の婦人がある、其の舌を弄すること、眞に百舌鳥も雷ならずである、其の快辨は、宛も火焔の如くである、然し無口の婦人同様、甚だ貞淑である、憫憐の情、又は憤激の情などに驅られるとき、心にあることを残らず口に出して了ふ質であるけれども、心は決して悪いものでない、寧ろ淡泊で愛す可き所がある、女の饒舌は、又無口よりも愉快にして、毫も罪のないことがある、其時には、罪のない戯言の目的物となるばかりである、例へばアレキサンドル、ジエマが言つた如く、天は女に鬚を與へなかつた、其鬚は鬚を剃る間は話しかる事が出来ぬから云々と、此の如き戯言に上るやうな、婦人の饒舌は、罪のない方である。

乍然常には、言葉の分量が多くなるに従つて、其の性質も變つて來るのが當然である、人は話をするときには、何か話すべきことがなければならぬ、處が其の話すべきことは、學問上の事や、眞面目臭つた事は、餘り面白くないから、勢ひ人を笑はせたり、面白がらせたりする事を尋ねるのである、其中にも、仕事のない者や、心の悪い者には、人の秘密を探ぐるのが、一番面白く思はれる、是に於て乎、好奇の心が起る、それが頓て又悪意的に變ずる、斯の如くして、悪口が習慣になつて了ふのである、否、悪口が商買となり、職業となつて了ふのである。

此の如き状態に於て、女が口を慎むことの出来ぬと云ふも、決して珍らしい事ではない、乍併自分の秘密だけは、兎に角心に蓄へて置くことを知つて居る、但だ何事をも饒舌る婦人ならば、氣を附けて居る者に、其心の秘密までも推量せらるゝことがあるのみである、ラブルエールの言にも、女は人の秘密よりも、己の秘密を能く守るとある。

要するに饒舌は、設令罪がないとしても、一種の弱點たるに相違ない、悪意

があるときには悪らしい、虚榮的であるときには可笑しい、常には此の二種の極端の間に往來して居る。然し饒舌が人の害にならぬとき、饒舌者自身の害になる。何となれば一たび口より發した言葉は、最早や取返しがつかぬ。

女性の貞節

多感性、格氣、饒舌等女性の弱質缺點とは云ふものゝ、男にもない譯ではない、果して然りとすれば、女も此等の弱質缺點の爲に、人性の高崇なる感情を、清く感知することの出來ぬ理由はない。ケレども否定して居るから、余は今之を研究して見やうと思ふ。

兎に角女の名譽とも云ふべき貞節に至つては、女に之が感情のないと云はれぬとは明である。然し人は多く之をも劣等性の感情の結果と視做して、殆ど道德的價値なきものゝやうに言つて居る。此等の解釋は、之をラロシエフスルに質す筈である。貞節は、人の評判の恐怖に過ぎずと云ふ、曰く「婦人の貞操は、往々其の名譽と、其の休養を愛する心より出づ」と尙又一種の伊達の如く視做す説もある。曰く「婦人の貞節は、其の美貌を装ふ、粉飾に外ならず」

と甚しきに至つては、單に冷酷なる氣質の如く視做す説すらある。曰く「婦人は人好き悪からざれば、貞節なる能はず」と。要するに左の説に歸して了ふ、曰く「虚榮、羞耻、氣質は女の徳となる云々」と。シヨベンハウエルは、女人の大研究者であるが、女の貞節を解説するに、是れは婦人間に於ける、一種の密約にして、己の價値を高めて、男を釣らんと欲する策より出でたるものゝ如くに言做して居る。氏の語句に據れば、敵をして媾和せしむる策であると云ふ。媾和は即ち結婚條約を云ふのである。是に於て乎此の密約(貞節)を破る婦人に對して、中々嚴酷なのである云々と。

此等の諸説は、中々巧みに出來て居るので、其中に、多少の眞理を藏して居ることは、余も之を拒否する積はない。就中貞節を以て、人の評判を恐れるものとなす説に至つては、随分味ふ可き眞理がある。何となれば、婦人は常に此の羈絆の下に生活し馴れて、自分の心に任せて、責任の下に自由に行ふと云ふこと、極めて稀であるから、自分の良心を、當代の先入以上に高めると云ふことは、甚だ困難である。男子よりも確に困難に相違ない。人前を憚ると云ふ